
魔法使いの赤い夢

双色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの赤い夢

【Nコード】

N7796L

【作者名】

双色

【あらすじ】

統合戦争。歴史の表舞台に魔女狩りと語られる、その忌まわしい文明の分岐点。神代の魔法使い達は、自らの叡智を記録した『法典』を作り上げ、その存在を世界に秘匿した。そして現在、受け継がれてきた『法典』の回路を廻って繰り返される魔術師達の闘争。赤い夢の罪惡に縛られる魔術師の少女は、色をなくした少年と出逢い――。開闢の空、果てに見る赤い世界。『法典』を廻る魔術師の物語が、新たな戦争の幕を切る。

／prologue

／0

それは、弓を模した火炎の集合だった。

怪鳥が羽を広げたようなその姿には無駄がなく、射手の少女は静かに矢の先端を視線の先に向けている。夜の風が熱風に変わり、肌を焼く。じりじりと大気を焦がす紅蓮は、正に鋭利な剣のそれを。

赤い光を放って旋回する魔法陣。輝きが夜を穿つ。

“———応えよ”

赤い瞳の少女が告げる。

世界はその声に応えるように震えて、そして霞んでいった。

まるで色が抜け落ちるように。

褪せて行くのは自我。消えていくのは意識。

水性絵の具に水を混ぜすぎたみたいに、どんどん薄くなっていく世界の色。やがて、世界は色を失った。なにもかもが消え去ったそこは、音も、光も、痛みも、感情さえも存在しない。飽和とは違う、完全に色の欠如した世界の姿。

そうして消えていく自分を見ていた。

自分で自分の欠け落ちていく、色褪せていく様子をただぼんやりと。

世界は無色。悲しくも無い。既に、悲しいと思う感情も残されていない。

だけどうして。

頭の中を廻るのは、己が世界に干渉して飲み込んで行った別の世界の意思。同じことを繰り返して、叫んでいた。何度も何度も。何処かにいる誰か、ずっと遠くの果ての声に謝罪を叫んで。

耳を突く断末魔。肌を焼く熱い風。

ここは終わった世界。赤に呑み込まれて崩壊した、火炎に焼かれる果ての夢。聞こえるのはただ、誰かの断末魔。悲鳴も嘆きも絶望も全てが糾弾。そして彼女は繰り返す。ごめんなさい。ごめんなさい、私の所為で、と。

“ 汝が色を奏でよう。果てを彷徨う光、我が剣となれ ”
でも何故だろう。

なんとも思わない。それはきっと、今の自分に感情が残っていないからだろう。そんな風に、他人事のような思考で結論を下した。見えている赤い世界。絶望の夢。ここで少女は孤立する。崩れる瓦礫。燃える空。人肌の焼ける異臭。

何もかもが終わっていた。

生きていたのは一つだけ。

この世界の、少女の強く燈る一つの意味だけだった。
アクセス

“ 共界 ”

魔法を見ている気分でした。

六方星を変形させたような記号を中心に、アルファベットか象形文字かも判断のつかない文字が円形の外側を囲んでいる。不思議とそれが何なのかは理解できた。それは、世界から零れ出た色。世界の感情が、現象となって流れ出る断片。

魔法使いのような彼女が、炎を使役する為の回路――。

“ 断罪の焰は加速せよ ”

少女が弓を絞る。弦も、弧も、矢も全てが紅蓮の炎。標準は眼差しの先。蟠る有象無象の集団。

“ 循環する炎熱は我に従え――我は獄炎を統べる者。汝、その色をここに示せ―― ”

射法八節。

旋回し、加速する魔法陣。散らばる幾つものそれが、少女の足元に集合し、炎は一層大きく燃え上がる。それは風前に晒されて、焼失する寸前の火が最後燃え上がる様に似ている。

ふと考えた。火が燃えるには、必ず媒介が必要だ。それは何か。嗚呼、そんなこと、考えるまでも無いじゃないか。

今、消えようとしているこの意識こそが、少女の手繰る火炎の発火剤。

抵抗することも無く、自己の消失への恐れも無ければどんな感慨も浮かんでこない。それが悲しいと思えたのは、何故だろう——否、悲しいのはそんなことじゃない。ずっと、頭の中に響いていた少女の声が、悲しかったんだ。

“——ごめんなさい”

長い髪をはためかせ、背中越しに少女が言う。

その声が、泣いていた。

赤い夢に彼女が繰り返す。果てを見て心に決めた誓い。絶望の空に掲げた願い。

何かを、守りたい、と。赤い目をした魔法使いは、泣きながら叫んでいた。

だから、その言葉は、

“あなたを、守れなくて——ごめんなさい”

少女の、自分自身へ向けた糾弾の嘆きだったのだろう。

そうして放たれる矢は、空間の全てを焦がして進む。呑み込まれる——人の形をした影の数々。見覚えのある顔。聞き覚えのある声。上げる断末魔。それにすら、何の感情も浮かばない。薄っすらと理解した。感じたのこのない感覚だ。

そうか。これが、無くなるって、ことなんだ。

消えていく意識。

最後に見たものは、涙を流す赤い魔術師の姿だった。

1／白い覚醒（前書き）

／
——赤い夢の中で、少女は孤立する。

世界は赤い光に灼かれ、空を渡る黒煙は月の光を遮った。

断末魔はまるで糾弾。——少女の耳を割く剣。

視界は火の海。

果てなど無い地獄の中で断罪を待つ。

けれどそれはいつまでも訪れず、彼女を理解するものは一人としてなし。

そうして幾度も紡がれる、煉獄の夢。

獄炎に灼かれた世界の中で、この夢もまた少女は孤立する。

それを、悲しいと思わなくなったのはいつからだろう。

繰り返す謝罪の声は此度も、遙遠に霞む陽炎に飲まれて焼失した。

1／白い覚醒

／
1

微睡みの中で、夢ともつかない何かを見ていた。

——きて、いたい？

声は優しく問い掛けてくる。けれど、その声が何を訊いているのかはどうしても解らなかった。声はノイズが掛かったように聞き取り辛い。それが幼い少女のものであることだけは曖昧な世界の中でも、唯一つだけ確かなことだった。

声は質問を繰り返す。……否、繰り返されているのは質問ではなくてその瞬間。何度も何度も、曖昧な一瞬が再生されていた。だとしたらこれは記憶なのだろう。はっきりと思い出せないいつかの日を、脳が必死に想起しようとしているのだ。意識は唯、それを眺めているだけ。この夢に似た遠い光の中で、意味もなく再生され続ける映像に干渉するのみ。

やがて、声は明確な形を描く。

——生きていたい？

尋ねる幼い声。それに、なんと答えたのかは覚えていない。

少しだけ、ほんの少しだけ世界が明確になった気がした。まだ視認できるほどに明らかな形を持ってきたわけではないが、古ぼけた写真の埃を払って色褪せたそれを見ているような、そんな気分。

金色の、大きな月が空に昇っていた。深淵な空の果てには星さえなく、あったとしてもそれはきつと眩しすぎる月の影に隠れているのだろう。

——ねえ、だったらさ。

静謐な金色を背に従えて、白い少女が微笑む。小さな、背丈はま

だ齡一桁を思わせる彼女を何故か見上げていた。

——わたしが、助けて上げよっか？ お兄ちゃん。

言葉を皮切りに弾ける世界。巨大化した月が世界を飲み込み、闇の存在さえ照らし焼き払う月光が許容量を越えて溢れ出す。そうしていつも、この夢はいつもここで途切れる。白に包まれた意識が微睡みの中にあってさらに深い底へと落ちる。

白い夢の果て、その終わり。

今度もまた、そこにいた誰かを思い出せない。

：

「——い——ちゃん——兄ちゃん」

うつすらと靄が掛かった視界。反響したような声は細切れで、言語として脳が解析するにはまだ少しだけ時間を必要とするだろうとぼんやり予想した。耳に心地のよい声が、何度も同じ言葉を繰り返す。その度揺れる体は揺り籠に入っているかのような錯覚を強制するも、反して意識は着実に覚醒していくのだった。

「起きろコラあ！ いつまで寝てるのバカお兄ちゃん！」

はいはい今日を開けますよ、と扉の外で呼び鈴を連打する客にするみたいな対応の文句を心中に呟きながら——次の瞬間には、そのモノローグを叩き割る衝撃が側頭部に見舞われた。鉄槌。上方から降り下ろされたと見える一撃はどれほどの位置エネルギーと運動エネルギーを衝撃に変換したのか計り知れない。俺に言えることは一つで、こんなもんを喰らったのでは状況は睡眠から永眠に移行してしまうのではないか、といった苦情なのだった。

痛みに悶絶しつつ、目を開ける。寝起き一発目の視界に思った通

り、踵落としを放った後の体勢で髪を宙に浮かせる少女の姿を発見。まだ黒髪が降りきっていない。衝撃に遅れて痛みがやってくるまでのこの瞬間が、とてつもなく長く感じられて、時間の流れが普段の十分の一くらいのスローペースになったんじゃないかと錯覚した。無論、錯覚でしかないので俺は一秒未満の後に自らの鼓膜を引き裂かんばかりの大音声を上げてしまうのだが……。

頭を押さえてベッドの上を転げ回る。痛い……痛えなこの野郎——！

「なにをしゃがる！？」

視界の潤みは溜まった涙の壁を意味しているのか。片方は拳を固めて、片方は患部を撫でるように保護して叫ぶ。と、相手はそんなこちらの姿をけらけらと指差し大爆笑。ヒトの形をした悪魔を涙の先に俺は見た。

「だってお兄ちゃんが起きないからだよ。当然の処置ですつ。で、ともあれ気を取り直して——おはよう、お兄ちゃん」

にこり、という擬音が素晴らしくマッチする、元々微笑んでいるような雰囲気のアートのいい端麗な相貌が笑顔を形成する。朝一番には十分すぎる愛らしさに息を飲んで……いやいや今更何を变に意識しているんだ俺は……当たり前前の挨拶を口にする。

そのつもりだったのだが、しかしながら、

「おはよう……えーと、あれ……お前、誰だっけ？」

「うわあ……それちよつと酷いよ。まあね、いきなり蹴ったのは悪いと思うけど、だからってそんな意地悪しないでよ。……本気でへこんじゃうよ」

しゅんとして笑顔を曇らせる。俯き加減の表情は心からこちらの発言を嘆いているとしか思えず、演技ならばかなり達人級だ。と、そんなことは実際どうでもいい。問題は事実、俺がこの少女の名前を思い出せないことであって——

「ね、ホントに忘れちゃったの？」

——あ。

じつ、と目があつて思考が稲妻めいた閃光をショートさせる。目が覚めた心地で俺は、閃くままにその名を呼んだ。

「……来旋^{ラセン}。……お、おはよう来旋」

満足して、再び舞い戻る少女の笑み。当たり前だったらしい。というか、一時的な忘れによる記憶の不具合が起きていたのか、ぽっかり抜けていた空白は実際にその名前を口にすることで驚くほど見事に塞がった。何かの拍子にパズルのピースがぼろりと落ちてしまったみたいにな、抜けていたそれをぼろりと埋めた瞬間に現れる元の形。

棺^{ひつぎ}継来旋。

俺の妹であるのだった。

「よかった。頭蹴った時に記憶喪失にでもなったのかと思ったよ」

「そう思うなら次からはあんなことはするな」

「はい」

童女のように手を挙げて宣誓する、軽すぎる来旋。本当に心得たのだろうか。明日また同じことが起きそうで怖いのだが。

白い少女。その出で立ちは漆黒のブレザーを身に纏い、そしてその闇色よりも深い純黒のロングヘアを背中へと垂らす——全身を黒く染めた姿。全容を包む色はブレザーからスカートまで黒。唯一の彩りはアクセントのような真っ赤なネクタイ。そしてもう一つ。黒で着飾った彼女を、それでもしかし『白』足らしめているのは、あるいは白いヘアバンドかもしれない。まあ、流星にそこまでは言い過ぎなのだが。雪のように白い肌や、そのどこか儂い様子もまた少女を揺らぎの色である白として確立しているのかもしれない。

ちなみに来旋は右と左で瞳の色が異なる。それは生まれた時からそうなので理由ははっきり言って解らない。……俺が知らないだけとも言え可能だ。

右が群青、左が灰——双色の瞳を持つ白い少女。その儂くも虚ろな存在は、けれど絶対的に揺るぎのない何かを持っているようで霞はない。ここにいることの明確な一つの現象と、そのカタチ。

「よし。それじゃあ今日もはりきって一日頑張らしましょう！　ほら早く着替えて、学校行こうよ、お兄ちゃんっ！」

腕をぐいぐい引かれて布団から引きずり出される。待て待て妹よこの時期の気は朝方非常に冷え込んでいてだんだん温もりの残る布団を去るにはそれなりの決意と決断が必要なのであつてしかも寝起きの男の子は例え相手が妹でもちよつと間の悪い事情があつたりなかつたり――あー、畜生面倒臭い。

無限に生産される数々の不満の中から厳選して、俺は自己を埋め尽くす苦情の弾幕を取り払うようにしてそれを言った。

「……とりあえず飯、喰わせてくれ」

その時の自分の声が信じられないくらいに慄然としていて驚かされたり、総じて予感したことを端的に述べるならば――

――今日も今日とて平穩に、何かしらぶつ壊れた不穩な出来事でも発生するんじゃないか。ということなのだった。

2／歪む朝

／2

来旋と登校を同じくするのは校門を潜って学年分けされたエントランスに向うまでだが、しかし兄妹で揃って登校するのは高校生の年子としてどうなのかと思わなくもない。そんなことを道中来旋に言ってみると、真顔で「なんで？」とか訊いてくるものだから間違っているのは俺のほうなのかと思ったくらいである。

上履きに履き替えると、後ろから追いついてきたらしい御道に声を掛けられた。

振り向くとそこには漫画みたいに真っ赤な腕章をつけた風紀委員長様がスタンダードスタイルの仏頂面で腕を組んでいる。俺は何やら無言の非難を受けているようなのだが、その理由に心当たりがなくしばし啞然としてみると、

「朝からまた随分と風紀の乱れたことをやってんな、おまえ」
なんてことを感情のない声と瞳で糾される。

「風紀委員の癖に金髪のおまえに言われたくないし、別に乱してもない。冤罪だ」

「知ってるか？ 現行犯逮捕には令状が要らないんだぜ」

「だから違うって。さっきのことを言ってるならあいつは妹だ」

……それはそれで問題なのかもしれないが。だが御道の言うように風紀が乱れたりすることはないだろう。流石に実の肉親に変な気を起こしたりはしない。それだけは間違いないはずだ。

が、俺の弁明に対して御道は表情を和らげるどころかむしろ、より悪辣なまでに怪訝な顔色を浮かべる。威圧的な眼光が取調べ中のベテラン刑事みたいだった。そんな人物ドラマでしか見たことはな

いけど。

「ばればれの嘘ついてんじゃねえよ。おまえに妹がいるなんて聞いたことないじゃねえか」

「そりゃあ、言っていないんだから聞いてないだろ」

家族構成なんて偶然話題に上がるか、訊かれでもしないと普通は言わないだろう。俺もその例に漏れないわけだ。御道に妹がいるなどと話す機会は入学当初知り合ってから今この瞬間までなかった。それこそ偶然の巡り合わせで今日話すことになったが、それだってそれだけの因果でしかない。

気に入らないとばかりに顔を顰める御道。どうやらまだ信じていないらしい。

実際俺から見ても似てないとは思うので、こいつが疑うのも無理はないのかもしれない。

「……今の、棺継来旋だろ？ 一年の有名どころだぜ、あの娘」

「それがどうしたんだよ」

「……………わーったよ」

沈黙を二倍にした後で、

「そういうことにしといてやる。お咎めなしだ」

髪を掻き上げながら悲嘆的な溜息を吐いて御道がその事実を許容した。もっとも、百歩譲るところか今のこいつは一万歩以上譲った上で森羅万象に背中を向けたような状態だが。事実しか言っていない俺としてはいい気分ではないが、戸籍謄本まで持ち出して血縁を証明するほどのことでもない。

終わった話をからりと切り替えたのは、俺がそんなことを考えている最中に別の話題を提示した御道の方だった。大きなあくびを天井を仰ぎながら吐き出して、

「知ってるか、郊外のマンションの話」

「なんだそりゃ？」

「住人の全員が一晩でいなくなったって話。なんだよおまえ、ニュースとか見ねえのかよ」

それはまた、奇異なことがあったものだ。マンションというからにはそれなりの人数の人間が一斉になくなったことになるが……残念ながら俺は詳細を知らない。今朝はニュースも見えていなければ新聞も読んでいないのだ。

しかし住人全員が、同時に。それも一晩で。

「集団失踪。完全に行方を眩ませたんだと。まるで魔法だよな、これ」

「魔法……か」

御道の口からそんな神秘的な言葉が出てくることにこそ驚きだ。

とはいえ、言葉の主こそそれに似つかわしくはなくても、状況を魔法と言い得るのは間違いでない。なにせ集団の人間が誰にも目撃されず姿を消したのだ。そんなことは普通有り得ない。こんなのは失踪ではなく消失という方が正しいだろう。

消失。

炎に焼かれた、焼失。

住人を飲み込む炎の波。焼き払われる、数十のヒトガタ。

……あれ、なんだ、これ。

「あ……ああ、そういえばさ。先週来た転校生知ってるか……えっと、何てったっけ」

軽い頭痛と眩暈を忘れる為に、適当な話題を振る。

意識がどこか、触れてはいけない部分に触れていたらしい。けれどそれは、話題を逸らすことによって直ぐに正常へ帰還した。驚くほどにあっさりと、頭痛も眩暈も引いていく。自分でも信じられないくらいの回復振りだった。

対照的に、機嫌を傾けたのは御道である。

「弓坂絵空だろ。確か、帰国子女だとか言ったな」

思い出しながら、御道は小さく舌を打つ。

さっきにも増して不機嫌な顔をする御道。その横顔を隣に発見して俺は、なにか弓坂と因縁でもあるのかと訊いてみる。答えは単純明快にしてかしながら、この男にだけはケチをつけられたくない

事柄だった。

「あいつ、自分の茶髪は天然だとか言い張るんだよ。英国帰りか何かは知らねえが、名前的には純血の日本人だろ。天然なんて嘘に決まってやがる。……たく、風紀が乱れてしかたねえよまったく」

「……」

悪態をつく御道に対して俺は沈黙するばかりであった。この風紀委員長様は徹底して学園の風紀と治安を維持しようとする鉄の正義の執行者として生徒間に名高い。が、その訳は苛烈な制裁や行動力よりもむしろこの男の風貌にあり、こいつこそ全く同じ文句を受け売りにして自身の頭髪を正当化しているが……現状はそのことを棚にあげるどころの騒ぎではないようだ。

灯台下暗しとでも言おうか、取り締まるべくはすぐ近くにいます誰かこいつに教えてやれ。

以上に加えてその他諸々の最早語るべく意味さえ持たないあれやこれやの意思を籠めて肩を叩いてやる。俺がどんな表情でそれをしていたのかは定かでないが、眉間に皺を寄せた風紀委員長の顔を見るとそれも解らなくなかった。

教室に入ってから、いの一かがみさき番に鏡岬が途方もなく場違いなテンションで挨拶してくるのは本日の俺や御道にしてみれば常識のようなものとして当然に認められていた。もとい、咎め立てても無意味であることを静かに悟った無然とした心中とも言える。

「おはようっ、グッドモーニングだよ籠野かじのくん！」

窓際からぶんぶん手を振って教室中を満たす大音声の挨拶をスタートの合図として、鏡岬の矮躯が腰を沈めていた椅子から飛び出す。ロケットスタートで慌ただしくショートカットのサイドテールを揺らしながら扉付近の俺に襲い掛からん勢いで飛び付いてきた。

「……相変わらず朝から晩まで騒がしいな、鏡岬。つうか、俺には挨拶なしかな？」

「あは、御道くんいたんだ。いやいや失敬、御道くんってクールアンドドライだからさ、そんな風に籠野くんの影に立たれると背後霊

にも見えないんだよね。まあ、それはともかくとして、おは——」

「いい、解ったよ。おはよう鏡岬」

光速で閃いた鏡岬の手を確認すると同時か、あるいは初動を視認しての無意識反射かで神速の腕が振り上げられる。御道の手は今までに爆音染みた音声を放とうとする唇を牽制するように鏡岬の顔の前で翳されていた。

人の情を感じさせない無愛想なクラスメイトを、それでも笑って迎え入れるのが鏡岬である。声は出さずとも小型太陽みたいな澁刺とした喜色の顕現が表情を染め上げていた。思えば、俺は鏡岬の顔色に喜怒哀楽の二番目と三番目を見たことがない。

「あっ、そうだそう言えばさ」

御道が言うところの朝から晩まで騒がしい鏡岬は、途切れることもなく話題を提示してくる。ラジオ女と昔御道は称していた。俺を含むこの三人の中で八割以上の割合で会話を振っているのがこの鏡岬だ。ちなみに残りの二割の内一点五割くらいが俺で、少数点五割が御道となる。

「昨日の停電ってさ、まだ原因不明らしいよ」

「停電……？　なんだよそれ」

応じたのは俺で、

「なんだ、おまえ知らないのか」

俺の発言を意外そうに追及してきたのは御道だった。

珍しいことに意見が半分に割れて少数になったのは俺という結果になる。御道は疑問符を浮かべた状態から一変、いつもの気だるい眼差しに今度は僅かな呆れを含んでさらに付け加えた。

「……いや、つーかこの街に住んであれに気付かない人間なんていないだろ普通。それともおまえ、昨日は夜の十時にはご就寝か？」

昨日の就寝時刻はと思い出そうとしてみるが、どうも就寝どころか昨日の夜にあった出来事についての記憶を見事なまでに自分が忘却していることに思い至る。

御道曰く例の停電は十時以降に起きたようであり、その時間なら

普段はまだ床についていないはずなので、停電なんかが起きていたら気付くはずなのだが。

「……しっかりしろよ。おまえ、なんか抜けてんじゃねえのか」

「言い過ぎだよ御道くん。自分だって時代遅れのビジュアル系バンドみたいな髪の色してる癖に。そういうの、自分のことは棚に上げるっていうんだよ」

「鏡岬……おまえの表現ってほんと解り辛いよな」

金髪を掻きながら呆れ顔の御道。俺が指摘したいのはむしろその後の発言をスルーしているおまえだ。この状況で何を棚に上げるというのか、そこを受け流すのは少なからず自らに負い目があるからではないだろうか。

「今朝までには復旧したらしいけど、嫌だよねー。あたしまだお風呂入ってなかったからさ。シャワー使えなくて大変だったよ、もうっ」

鏡岬が頬に空気を溜める。

「って待てよ。それ、停電関係ないだろ。電気だけじゃなくて水まで止まったたのかよ」

「それだけじゃねえよ。携帯の電波は飛ばないし、ガスだって止まっていた。本当に、馬鹿げた言い方だが昨日は街が死んでたみたいだったぜ」

「おっ、言うねえ御道の旦那ー。クールな冷血漢のふりしてその実態はロマンチストなのかな」

……鏡岬は無視するとして、御道の慣れない比喻は昨晚の惨状……そう表現しておよそ間違いはないだろう……を如実に連想させた。この現代における生活の必需品。電気やガスや電波の一切を遮断された街は確かに、死んでしまったようであるだろう。さながら、死霊の循環うゴーストタウンだ。

ふと考える。

郊外のマンションで住民が失踪したのも昨日だ。そしてそのどちらにも俺は覚えがない。こんなことがただ偶然で済むのだろうか。

……根拠はない。本当に唐突に思い至っただけの、くだらない思考の断片。

だからきつと、気にすることはないのである。

「まあ、そんなことに気付かなかったんなら寝てたんだろうな。あんまりよく覚えてないけどさ」

最後にそう言って話の締めにする。見計らったようなタイミングでチャイムが鳴り、教室の各所に散らばった生徒たちが各々自席へと向かい始める。席が前列の御道は片手を挙げて去っていき、俺と鏡岬とともに窓側へと歩き出した。

思い出したみたいに鏡岬が提案したのはそのときだ。

「そうだ、籠野くんさ、今日の放課後は暇かな？」

「今日？ ああ、別に予定はないよ」

「やった。じゃあさ、今日はあたしに付き合ってよ。部活、自主練だから人集まらないんだよ。ね、お願いっ」

両手を合わせて、上目遣いに片目を閉じる鏡岬。こんな風にしていれば奇矯な人格も隠蔽出来て、それなりに男が寄ってきそうなくらいなのだが、残念なのかそうでないのか鏡岬がこんな顔をするのは俺か御道の前だけである。

そして、そんな顔をされてはしない用事をでっち上げたり断ったりするのは申し訳ないと思う反面、気に食わないのはむしろこっちだが、男としての性が承諾を強要してくる。

俺の返答はいつも決まっていた。

「解った。構わないよ」

3／赤い邂逅

／3

鏡岬の自主練に付き合ってから帰宅する場合、通常の下校時間よりも約二時間ほど遅い時間帯での帰宅を余儀なくされる。普段より熱の入った本日の鏡岬は下校時間までを全て剣を振り回すことに費やし、片付けに入っただけに既に下校時刻を回った頃。教師に見付からないよう下校するのはなかなか精神を磨り減らす行動だった。

我が校の剣道部はその実力を全国クラスとして名高い。……というのも、ある一人の天才が一年次から全国大会に駒を進めたことからそんな風に知られているからである。もっとも、全国級なのはその天才少女一人だけで、他は顧問も設備も部員も凡庸以下なのだが。今日のような自主練は酷い月は週に一回ほど設けられる。

自主練とされた日には一人の部員を除いて、他の部員はおろか顧問まで顔を出さないというほどの徹底振りだから部外者の俺でさえ呆れるほどだ。これまで両手の指の数以上は練習に付き合ってきたが、一度だって顧問を見たことがない。最初の頃は見付かって注意されるんじゃないかと危惧していたが、今では仮に竹刀を握る様子を目撃されても黙認されるんじゃないかと思っている。

この段階で例の天才少女が誰であるかは既に語るべくもないだろうが、それでもあえて名前を出すならばそれは、今俺の隣でコーヒ―牛乳をストローから吸い上げているか鏡岬深紗希である。

「いやー、やっぱり籠野ちゃんと打ち合うと練習になるよ。ほんと、いつかの全国大会を思い出しちゃった。ねえねえ、この際だから剣道部正式に入部しちゃいなよ」

「冗談言うなよ。毎日こんなのにつき合ったら俺がもたねえ。お

まえ、先週よりまた剣が重くなってたぞ」

「へへへ、人間は努力を欠かさないことが大切なのです。毎日素振り五千回してるもんねー」

「……そいつはお見逸れした」

こっそりとまだ痛む掌を見下ろす。今でこそ若干の痺れしか感じないが、練習中は焼け付くような痛みに何度も握力を失いかけたほどだ。女子の振り下ろす竹刀にこれほどの重みがあるというのは本当に信じられない。細身で小柄な鏡岬のことだと尚更。自重の倍は剣に乗っているんじゃないだろうか。

「おまえ、もっと別のところでやった方がいいんじゃないのか。うちだと設備も何もかも不遇だろ。……ていうか学校側ももう少し援助していいのにな、他はあれでも一人は全国区なんだからさ」

「……それ、ちょっと傷付くな。いいよあたしは。剣道ならどこでも出来るし。それに今年は一回戦で負けちゃったしね。『市坂の蒼い槍』って異名を持つ子にやられちゃったんだよ」

「らしいな」

「ほんと凄いいんだよ！　なんだっけ、ぐにぐにるーだっけ、ほら、神話の槍」

グングニルだと思う。

確か北欧神話の、必中必殺の槍だっけ。

……それってさ、槍じゃん。こいつがしてるのって剣道だろ。

「……無理もねえよ。そいつって今年の全国覇者だろ？　なら気にすることない」

「あはは、ありがとう」

照れ笑いの謙遜。

不遇の天才は今日もこんな風に笑っている。

夜の街灯が一度二度点滅。灯りを失った空間に闇が一瞬満ちる。

その闇が、深遠が、昨晚はこの街を満たしていたという。一瞬でさえも冷え込むような暗闇にヒトの本能が反射的な震えを催すというのに、これが長時間となると正直堪える。

終わらない夜に絶望を孕ませて。

世界が廻る終焉の旅路。

理から隔離された閉鎖空間が充満した暗黒を果てまで曇らせて、混沌と渦巻く夜の街———その中に灯る、切り裂くような紅蓮の灯火。輝きは天に昇る柱となって世界を焼き、あらゆる現象を灰塵へと変える。赤い円陣の中に佇む少女の瞳と、螺旋に舞い上がる炎が———

……なんだ。

瞬きを五回。その後たつぷりと十秒を忘我で過ごし、ようやく平常に帰還した。目を開けたまま、意識を保ったまま夢を見たような奇妙な感覚から開放されると、その事情を知ってから知らずか鏡岬が言った。

「そういえばさ、学校では言わなかったけど昨日って停電以外にも火事があったんだよ」

この様子だと、俺が妙な意識の錯乱を起こしていたことは気付かれていないようだ。

「火事……？」

「うん。あたし、お風呂入りながらだったけど外が一瞬すっごく明るくなってさ。気になって窓開けてみたらね、街中真っ暗なのに一箇所だけ真っ赤に光ってる場所があったんだ。街全部停電だから、あれはきつと火事だよ」

「それ、どこが燃えたんだ？」

「んつとね……方角だと郊外の、マンション辺りじゃないかな。でもさ、詳しいことは新聞にも載ってないしニュースにもならないし。お父さんとお母さんも知らないってさ。籠野くんも……知らないよね？」

「知ら——」

——舞い上がる条理を超えた世界の果てより吹き込む熱風。

紅に照らされた少女の儂い笑顔。

風に靡く髪が火の粉を散らす。それがまるで、刹那に煌く

花火のようで――

「――ない。……知らない」

「だよね。……ってあれ、どうかした？」

「いや、なんでもない、と思う」

多分、こんなのは意識の混乱でしかない。昔見た夢が脳裏を過ぎ
って、それがあまりに昔の曖昧な記憶だったことから現実と摩擦し
て気が滅入ってるだけだ。

「そっか。それならいいけどね。あつ、あたし次の角曲がるからね」

「大丈夫かよ、なんなら送ってくけど」

「だーいじょうぶです。今日は練習にも付き合わせちゃったし、疲
れてるだろうから。それに今日は竹刀も持ってるしね。ふふん。蒼
い槍にでも襲われないと、あたしは負けないよ」

二つに分かれたアスファルトの三叉路。躍り出るように鏡岬は駆
け出す。

たたた、と夜に響く靴の音。とても剣道具を担いだ練習後の少女
がする動きとは思えない。

丁度二又の分かれ道まで走っていった鏡岬はそこで一度振り返り、
背走しながら夜に漂う微かな光の全てを収束して灯る笑顔が月と対
を成す太陽みたいに輝きを増す。距離なんて十メートルも離れてい
ないのに、大袈裟に手を振り回す無邪気な姿が疲れを忘れさせた。

「ばいばい籠野くん！ また明日ねっ」

朝から晩まで慌しい少女は、その二秒後に翳りなき笑顔のまま背
中から転倒するというベタなオチをつけて、それでも消えない笑み
を満面に去っていくのだった。

十

夜は、空の果てまで続いていた。

冴えない意識と疲労した体を引き摺るようにして家を目指す。その足取りが数分前よりも重くなっているように感じ始めた頃には、自覚してしまつてそれは紛れも無い事実へと変容していた。鏡岬と解れてから脚に鉛でも繋がれているような気分だ。

気付けば呼吸すら落ち着いていない。肌寒さに身を震わせると、背中をびっしりと濡らす汗が体温を奪っていることを自覚した。だというのに、寒さを感じているはずの体は内部で異常なまでの熱を発している。人間の命が心臓とは別の何かとして存在しているなら、その何かが強烈な熱に浮かされているみたいだ。

意識は溶けるように、鉄が過熱されて形状を変える様に似て流れ出す。

心中の空白にどろどろと流れ込む泥のような熱が、意識の支配権を剥奪する。

そして、この世界の中で脚が震え、立っていることさえ出来なくなっている自分がいた。

視界が反転する。原色が瞬き点滅し、脳が転がるように揺れる。胃の腑が本来ありえない異物を飲み込んでしまったときのように、防衛反応を起こすみたいに中身の全てを吐き出そうとしている。

寒さと熱さ。矛盾する二つの感覚が体を蹂躪し、

世界の軋轢の中で消えていく意識が断末魔の激痛を走らせた。

ぐらり、と背骨が消失した気分を味わう。

脱力の極致に達した体が、一切の抵抗を許さず地に伏した。

「……………ねえ、ねえちよっと」

声が聞こえた。

瞬間、それまでが嘘のように生命機関が正常に循環を開始する。エラーを起こしたシステムがエンターキー一つで再起動するみたいな、それは本当に魔法のような一瞬。繋ぎ止めた意識は確かにここにあり、世界は普段通りの平静をしてここにあった。

「ねえってば。大丈夫なの？　こんなところで座り込んでたら風邪引くわよ。ねえ……………聞こえてる？　もしかして寝てるの？」

苛立ちと憂慮を含んだ声が、頭の上から降ってくる。

先刻の冷汗とは別の冷たさを背中に感じて、自分が今座り込んで路上のブロック塀に凭れていることに気がつく。乾いた衣類から、もしかしたら自分が意識を失っていたのだと自覚した。それも短時間ではなく、濡れた服が乾燥するくらい。

「……あ、えっと………大丈夫、だ」

顔を上げる。閉ざされていた視界が開かれて、そこにいる人物を、声の主を瞳に認めた。

そして、おそらくその姿を生涯永遠に忘れることはないだろう、と再起した意識が漠然と理解する。夜の世界に立つ少女の姿を、ただ美しいと感じた。微睡から醒めた意識がまだ不安定だったからだろうか、その姿に心を揺らされる。金色を纏うような、月を背にした姿が綺麗だったから、瞬間呼吸すらも忘れて言葉を無くした。

少女の髪が風に流れる。虚空に翻る明るい色の髪。黒とは異なるその色は、自称通り天然のものなのではないかと、疑う余地をこちらから奪い取る。流麗な髪に引きを取らず、少女の風貌もまた端麗を極めていた。

凜とした顔立ちはしかし、それでもまだあどけなさを残す目元や輪郭をして、その歳の少女に最高峰の美麗を与えている。気の強い眼差し、長い睫、引き結んだ形のいい桃色の唇と——そして異彩を放つ赤い大きな瞳。

宝石のような輝きの瞳は、後天的に色付けされたようには見えず、髪と同様に生来備え持ったことを主張する透き通った色を帯びている。深く深く、真紅の瞳が放つ赤い月光染みた眼差し。美しくも苛烈であり、そして雅な輝きのそれが何よりも異端であり、少女を世界から隔離するかのようだった。

「そっか、よかった」

そう言って、本当に心から——弓坂絵空は月の下で微笑んだ。

4／火の弓

／4

しかし安堵の表情を浮かべていた弓坂は次の瞬間に深紅の瞳を開き驚嘆に言葉を失った。有り得ないものを見ているように、まるで柳の下に幽霊でも見付けたみたいな顔をして愕然としている。今にも沈黙が叫び声に変わりそうな、そんな状況だった。だが弓坂が次に発した声は酷く落ち着いた――無理矢理に落ち着けた――およそ叫び声とは掛け離れたトーンで夜に落ちた。あろうことかその視線を眼下の俺へと向けて、少女は言う。

「……なんで――」

質の悪い、うっかり正夢になってしまった悪夢を呪うように、

「なんで、あんたが、こんなところにいるのよ」

再度確認するも、やはりこの場には俺と弓坂の他に誰もいない。

ならば疑いようもなく先の言葉は弓坂から籠野静月しずきに向けられたものであり、とはいえ俺にはそのようなことを問われる覚えも言われもない。弓坂と正面切って向き合うことさえ初めてのことで、顔を覚えられたり、避けられたりする理由には心当たりが皆無である。驚愕は弓坂一人が独占し、俺は世界から取り残された感覚を味わう。目を一杯に開けた弓坂に掛ける言葉など到底見つかることもなく、とりあえずいつまでも呆け面で腰をついていても仕方ないので立ち上がった。気を失う前に比べて体がかなり軽い。全身に鉄の錘を巻き付けたみたいなさつきまでとはかなりの違いだ。

全快した体を起こして、まだ啞然としている弓坂に声を掛けるためにボキヤブラリーに検索を掛けた瞬間だった。

何の予兆もなく――あるいはそんなものがあつたなら、それは気

絶前のあれだったのだろう——脳漿を干上がらせ、脳を焼き切る激痛が頭の中に沸き上がった。

脚の指先から徐々に上ってくる痙攣。希薄になっていく意識と気力。さっきほどではないにしろ、強烈な立ち眩みと嘔吐感は加速度的に神経を蹂躪していた。点滅する視界——否、点滅ではなく瞬時に光が落とされてブラックアウト。深遠が世界を満たす。だがそれはどうやら体の不調とは関係を為さないらしく、落ちたのは視界ではなく電灯から注いでいた明かりの方であるようだった。

道の端から端まで。並んだ幾つかの街灯は全て機能を失っている。その頭を垂れる姿が様に不気味さを醸し出していた。

「……っ。よりによって、こんなときに」

舌打ちした弓坂が忘我の果てから回帰して苛立たし気に首を回す。眼差しの先には道の彼方があるだけで、夜の暗闇以外の何物さえも存在していない。それでも弓坂は目を細めてとうとう表情を不快の色に染め上げ、見えない何かから逃避するように一目散に駆け出した。

何故か、俺の手を取って。

「いっしょに來なさい。話があるから、ちょっと付き合って」

拒否を許さぬ物言いと、是非を聞くまでもない迅速過ぎる行動。こちらには手首の拘束を解くことは愚か、苦情の一つも許されない。即座にトップスピードに乗った少女の疾駆。風を凧いで駆ける勢いが髪を虚空に靡かせる。

不思議と、手を握られたその瞬間から、俺の不調は夢が覚めるように消失していた。

＊

辿り着いたのは周囲に民家のない、既に廃れた公園だった。

弓坂は長方形の敷地に入ると、走ってきた勢いと胴体の回転から生み出す遠心力を利用して俺の体を放り出した。出来うる抵抗は体に操作権が戻ってから受身を取って転がる程度であり、全力疾走したことで息の上がった俺はさらに頭の中が真っ白で何が起こったのか理解できない。

啞然とするまま、黒い制服のスカートと長髪を翻して背中を見せた弓坂を見、

「おまえ……、いきなりなにするんだよ！」

「ここから離れて」

走り出す前に比べて、体力自体は間違いなく疲弊しているにも関わらず、確実に復調を遂げている。自分の威勢の良さに驚いたくらいだ。だがさらに驚いたのは弓坂の態度の方で、問答無用で強制連行してきた見知らぬ公園から今度はいきなり出て行けとの発言。

意味が解らないことだらけだが、それでも弓坂は今、俺が何と言っても耳を貸さないのだろうな、ということだけは漠然と理解させられた。その背中が、毅然として立つ少女の醸し出す空気がそれを突きつけている。

「とりあえず、ここは待ち合わせ場所だから。一時間後に集合。絶対、来なさいよね」

肩越しに、右の瞳をこちらに向けて、

「――それまでは、絶対にここには近づかないで。折角、生きてたんだから」

剣の切っ先みたいな言葉が、拒否を許さぬ絶対令を発した。

未だ状況が飲み込めない。何が起きたのか、ではなくて、今何が起きているのか。その現在進行形で展開される現象に理解する余地が一切見当たらなかった。突然見舞われた気を失うほどの頭痛。意識を取り戻した視界に現れた弓坂絵空。鏡岬と別れてから今に至るまでの全てに理解が及ばない。

自分がまだ尻餅をついた体勢でいることを知ったのは、弓坂の姿が異様に大きく見えたことが原因か。俺が腰を上げたその次の瞬間

——世界の色が反転し、静止した空間を静謐と深遠が包み込んだ。

ぽつり、と佇む街灯が、

唯一の光源が暗闇に溶ける。

「なにしてんのよ！ 早く行きなさい！」

怒号一喝。

状況は解らずとも、従うことは出来よう。そんな威嚇染みた弓坂の一声をスタートの合図にして、納得の行かぬまま走り出す。今入ってきた公園の入り口を抜けて外へ——

「バカッ！ そっちじゃないってば！」

そこで、信じられないものを見た気分を味わった。

初めて訪れた為に、俺はまだこの公園がどのような立地条件の下に存在しているのかを知らなかった。それを知ったのは今この瞬間、敷地の外に出て初めてここが他よりも高位にあることを眼前の光景に思い知る。

小高い、その程度でしかなくとも街をある程度見下ろすことは出来た。

だから、この。

一切の光を欠いた異様な光景を、目の当たりにすることが出来たのだ。

思い出す御道と鏡岬の話。普段は統合することのない意気が見事に波長を合わせた今朝。二人が揃って口にしたキーワード。停電。失われた光とそして夜に沈む死んだ街。俺の記憶にないそれが、いまここに堂々とその姿を晒していた。

「……………ッ」

心臓が大きく跳ね上がる。過度に酸素を吸い込み、肺が痙攣を起こす。頭痛。不意に頭を抑えて膝をついてしまう。同じだ。さっきと同じ、この理不尽な痛み。動転する意識。焼き切れそうな脳。けれど今回のそれは直ぐに引いていき、後には何も残らなかった。

ひたり。——足音を聞く。

疾走と呼ぶにはあまりに無様な暴走。だがその速度だけは、常軌を逸した快速を記録していた。

あまりの出来事に回避が間に合わない。そもそも、さっき受けた衝撃のせいで体が上手く機能していないのだ。立ち上がって躲すなど、この圧倒的な速さの前では叶わぬ望み。俺はただソレの動きを黙視し、死を受け入れるしか出来ない。

必殺の左拳が夜空に突き上げられる。

凶器となった硬いそれが、再び落とされる直前に――

「――共界^{アクセス}！」

凜然とした声が静寂と愚鈍な叫びを切り裂いた。

途端。

夜を照らし出す火炎の煌き。

炎は壁となり、俺と、ソレの間に沸き立った。咄嗟の防衛本能からソレが身を振った姿が視界に残る、だが次の瞬間に眼前を覆いくしたのは鮮烈な赤。その異常なまでの発火は一瞬で酸素を使い果たし、瞬間的に最高温に達した後焼失する。残ったのは、全身を焼け爛れさせたヒトガタだった。

「……今の、弓坂、おまえか？」

人間語を十年振りに思い出した、そんな気分。自分の発言が正しく通じたのかも判然としない。

目の前で起きた数コマ程度の事象が未だに呑み込めない。思考が及ばない。

背後に立っているはずの弓坂を求めて、強張った首の筋肉を無理矢理駆動させる。振り向けば、やはりそこには弓坂がいて、掌をこちらに向けていた。

つかつか、と、まだ緊張感の残る顔は弛緩の気配を感じさない。その足取りは例えようもなく峻険だった。こちらに向っているのは間違いなく、この後きつと張り手の一つでもあるんだろうな、と俺はそれを当然のように理解して受けれる。
だったのだが。

そんな些細なダメージに体が反応しなくなったのだ。まともに喰らえばあっさり骨が折れていただろう一撃を受けて、俺がまだ存命しているのはインパクトの瞬間に弓坂が庇ってくれたからだだった。

「……ッ……弓坂！」

痛みを無視してその姿を探す。

俺よりも強烈な打撃を受けた少女の体は、しかし四肢を震わせてまだ稼動していた。咳き込みながらも体を起こそうとする姿に、だが俺は一目に絶望を覚える。異形の屍が覚束ない亡者の足取りで弓坂に近づいていく。死を与える拳を無情に揺らしながら。

「こ、の……やろう……！」

走り出すと同時に転ぶ。体が限界を超えている。運動神経を伝達する脳が度重なる衝撃で麻痺しているのだ。生命活動を優先するなら、他の運動に神経を割くだけの余裕なんてとっくに失われている。だとしても、構わない。

ここで倒れたままではいるなら、例え二度と動けなくなってもいい。だからこの一瞬だけ、動いて欲しいと願った。

自分を庇って傷付いた少女が、無惨に引き裂かれる様子を見るくらいなら、この目はいらない。その悲鳴を聞いてしまうなら、この耳も削ぎ落としてしまいたい。何よりも――彼女を守れないならこんな体など朽ち果ててしまえばいいとさえ思った。

「……冗談じゃ、ねえ」

脚だけではなく、腰も、腕さえも悲鳴を上げて骨は軋み出す。その全てを意識の外へと追いやる。

限界を越えた踏み切りを一步、そこからは逆に止まらなかった。策など持ち合わせない身でありながら、それでも直進する。

何でもいい。ソレを止めなくてはならない。頭にあるのはただそれだけ。

心臓の鼓動は警告を超えた信号に変わり全身に激痛を奔らせる。一步ごとに細胞が焼き切れる。痛みに意識が飛びそうになっては、新たな痛みにそれを引き戻された。

ソレが腕を持ち上げる。目が壊れてしまったのか、その腕が十倍にも膨れ上がったように見え——事実、膨張した筋肉が血管を破裂させながら巨大化している。子供の背丈ほどにまで肥大した腕が、鉄槌のように振り下ろされる。

思い知る、己の無力。

目に映る世界と、本能が告げていた。

——
叶うべくもない。

其はおまえでは手の届かない域にあるモノ。

その少女も、本来ならばその因果に介入することさえ許されない。故にただ絶望して悲嘆せよ。

彼女を救うなどと、思ひ上がりも甚だしい――

「ふざけんな……このやろう——！」

駆け出す脚が一步ごとに致命的に壊れていく。それを自覚しながら走る。

鉄槌となつた腕が振り落とされる一瞬——少女とソレの間に身を捻じ込む。

そうすることで、己が身を少女の盾として差し出した。

「そ、んな……なんでよ。なに……なにをしてるのよ！」

誰かがそう罵倒した。

叩き付けられる人外の腕。それで体が折れた。腹から地面にぶつかって、その衝撃に反発して一度だけ断末魔のように跳ねるのを感じる。まだ生きているのが不思議なくらい。それはどうしようもないほどの止めとなる——そのはずが、幸運なのか不幸なのか、まだ、どうやら起き上がれるらしい。

なら、立たないと。

よかった、と。そう言うてくれた少女を失わない為に。

この命が続く限り、
何度でも立ち上がる。

「……ッ！」

派手な攻撃の代償は、より深刻なフィードバックをソレにも齎していた。動きを止めて苦痛に咆哮する。ソレの肥大した腕が破裂し、

剣が欲しい。いや、剣でなくても構わない。それに比類する何かがあればこの亡霊を打ち負かすことが出来る。

満身創痍の体、色をなくした視界。既に籠野静月は限界を迎えていた。呼吸は内側から自らを焼き尽くす炎熱となり、筋肉の動きは神経系をぶつ切りにする鋭利な刃物。そんな果てる寸前の命が一つ、不意にそれを捉える。

それは、季節外れの蛍のようだった。色彩の失せた視界に一つだけ色を持った小さな光。幽かに揺れるそれは理を穿った幻想の鍵穴。――その先にある何か。それに手招きされるように手を伸ばした。過呼吸に肺と心臓を燃やしながら、腕の駆動に体を殺しながら――蛍は、手にした途端に光量と形状を変えた。剣のようにも、槍のようにも、或いは弓のようにも見える。だが形などどうだっていい、これが眼前の敵を妥当しうるものならばその名は問わない。

果てる寸前の――否、果てた後の体で光を奮った。

「あ――――、があ……あ……！」

最後、交差した二つの碎ける様子と、自分自身の終わりを見た。今まで自分を動かしていた糸が完全に切れる音を聞いた。

何が起きたのかを理解することは許されない。呑み込めるのはこの目に映る今この時の現のみ。片腕を失った異形の獣の体が遠くに弾けとんだのを確認して、そこで全身から力が抜ける。元々立っていることなど出来なかった体が当然の結末に辿り着く。

支えを失った体が崩れていく寸前、それを支えた少女の矮躯。弓坂絵空が立ち上がって、俺に肩を貸してくれたんだと、判然としないう意識で悟る。決して長身とも大柄とも言えない、少女の基準に照らし合わせても標準程度の体格が今はこの上なく頼もしく思えた。

「あんた……今のなによ」

「知るか……俺だって訳がわからないんだよ」

全ては流されるまま行ったようなことに過ぎない。俺自身にとってはさっき何が起こったのかさえも明らかではないのだ。鏡岬の練習に付き合ったお陰で、剣を模した骨を躲すことは容易だった。確か

にそこまでは明瞭なのだが、問題はその後。あれと対峙できるだけの何が必要だと思ひそして、その次には――

知っていたのは体ではなく、心の方。本能とは違う、なにか別の己が世界に刻まれ根付く万象の理に体が呼応したような、そんな感覚だった。

「……そう。解った、じゃあ訊いても無駄ね。おっけ、今はその話はなしで。そもそも、そんな余裕もないからね」

顔を背ける。見据える先には片腕なき亡者の屍。死に体がまたしても立ち上がり天に吼えていた。

横顔。灯る眼光に強い意思を通して、

「ありがとう。貴方のお陰で色々解ったから――随分助けられちゃったけど、あれは私が処理する」

少女は笑う。赤い瞳を自信に満ちた輝きに煌めかせ。

「処理するって……どうするんだよ、あれ、腕がなくなっても平然と……じゃないけど動きに支障はないみたいだぞ。心臓を燃やしたって多分」

「意味ないでしょうね。そもそもあれは心臓なんて必要にしないもの。あれを動かしてるのは別の魔術^モよ。だから決して止まらない。あれに人の死の概念は当てはまらない。生きた死体^{リビングデッド}とかの類いじゃないわね。敢えて言うなら人形。あれを止めるにはね――」

ゆらり、と虚空に手を翳す。

「――全部、焼き払ってしまうしかない」

「……出来るのかよ、そんなこと。さっきは火傷くらいにしかならなかっただろ」

「さっきはね。でも大丈夫、あれは『悲鳴』を上げてたから。つまりは、あれにも『感情』は残ってるんでしょ」

吼えた屍の怪物が走り出す。都合五十メートル近いその距離を、あの化物は一息に駆け抜けるだろう。代償は踏み出すごとに脚から飛び散る鮮血の飛沫と苦悶の絶叫。残った腕の肉が溶け落ち、剥き出しになる白骨の剣。先刻と同じように、今度は骨を膨らせて大剣

を造り出す。

そんな死神の疾駆を前にしても弓坂は口元に笑みを浮かべていた。
「だったらそれを貰う。——どうせもう感情なんてあっても苦しいだけだろうから」

瞳を閉じ、

「私が、世界に還してやるのよ——！」

人外の獣と隔てる距離は数十メートル。その間合いは二秒後には零となる、安全圏とは到底言えはしない短距離。むしろ、獲物を狩る獣にしてみれば限りなく必死の間合いとさえ呼べる。

絶対的な死の接近を前にして、弓坂はしかし目を閉じていた。

彼女にとっての敵は外界にいるものではなく、内側に存在しているかのように。固く目を閉じ、精神を統一する姿は内側の何かと戦っている様。——遠い遠い自身^{セカイ}の果て。弓坂絵空という現象の始まりよりもさらなる深層の絶対意思に——求める先は世界の果て。何もかもが存在し飽和した無色の空間。万象の中心。なにもかもの原初を遡る世界との共鳴。

少女は告げる。

世界に呼び掛ける。

「応えよ」

人外との距離は隔てて十五メートル。猶予は既に一秒未満。

だがそれは。

弓坂絵空にとって永遠にも等しい無限の刹那。

「我は汝と共に在る者——汝、その意を司る容を我に捧げよ——
——」

条理を覆す、三千世界の果てより吹き荒ぶ理の風。少女の髪を巻き上げ、光のない夜に幽かに灯る紅の煌めき。

閉じた目を開く。

翳した手を、目前数センチの亡骸に突き付ける。一瞬、その手が焼けた皮膚に触れ、猛獣の突進はあっさりと往なされた。翻る体、浮かび上がる赤い紋章、泣き叫ぶように悲鳴を上げる最果ての旋風。

最後、弓坂絵空が詠唱を紡いだ。

「共界回路、^{アクセス}接続完了」

それは彼女自身に掛ける呪いの暗示。世界と自己を繋ぐ鍵となる言葉。

轟、と響く風の音が最後。旋回しながら拡大した赤い円の魔法陣が光の粒子へと拡散する。それはまるで夏の夜空に拡散する花火のようで、散っていく光は舞い落ちるようにひらめきながら消えていく。

終始虚空を捉えて固定されていた腕が射程を絞る。

「……これで」

どくん、と心臓が脈を打った。

弓坂の手に集まる超常の炎。それは渦を巻き、加速し、号令が下る瞬間を待っていた。

「終わりよ——！」

振り絞られた紅蓮の眼光。眼差しが定めた一点にその焦点が重なり、放たれる火炎の柱。槍のような切っ先が旋回し、大気を焦がしながら直進する弾丸染みた速度。躲せる道理もない。——業火の切っ先が亡骸の胸を穿つ。突き刺し射抜き、貫通した紅蓮の煌めきは彗星のように線を引き空へと昇った。

それが終わりの瞬間。

胸の真中を穿たれた廃人は、自らを操る糸の切れた人形のように二度と動くことはなかった。

十

胸に開いた穴は、徐々にその大きさを拡げてそれを飲み込んでゆく。やがて体の半分ほどを砂塵へと変えた異形の屍は、まるで初めからそこに存在していなかったように欠片ほども痕跡を残さず風に

吹かれて消える。公園に訪れた静寂が、大気と土の焦げる臭いの中で蟠っていた。

「弓坂、おまえ今のって……」

「ごめん。この話はまた明日でいいかしら？」

背中を向けて公園の外に出る弓坂。慌てて追いかけると、見下ろした街にはぼつりぼつりと光が灯り始める。夜が明けていくように、光の粒が各所で生まれ、日常が再起していく。弓坂は口を引き結んでその様子を眺めていた。

「お互いに、ここで追求し合うのは上手くないでしょう？ それに、訊きたいことがあるのも。だからここは一度休戦。……そうね、明日にでもこっちから出向くわ」

そこまで言うてようやく振り返る。弓坂の赤い目はどこか胡乱で、澄んでいるのに底が見透かせないような深い色を帯びていた。自身がそう宣言した通り、その身はどうに疲労困憊に達していたのだろう。所々の破れた制服の隙間から覗く傷付いた肌。砂埃に汚れた姿。それが、自分を庇った結果なのだと思い知る。今の俺に四肢があるのは、弓坂がここにいてくれたからだった。

そのことを自覚して一言でも礼が言いたくなって口を開くと、同時に激しい目眩が意識を襲った。立ち眩みが脳を揺さぶる。俺は誤解していたし、弓坂は間違っていた。満身創痍だとか、限界寸前どころの話ではない。とっくの昔に、この体はそれ自体が存在を保てないくらいに、いつ朽ち果て崩れてもおかしくないほど、限界なんてとっくの昔に越えていたのだ。

立っていることも出来ずに崩れ落ちる。膝立ちの状態で弓坂を見上げ、霞む視界に赤い瞳を映し出した。弓坂はただ黙ったまま、空前の灯火のような意識で足搔く俺を見据えながら言う。

俺は、

「ほらね。……まあ、今は休んでなさい。大丈夫よ。きっと——だって貴方は昨日も——」

最後の声を、聞き逃す。

5／鏡の幕間

／5

来旋は朝から機嫌が悪かった。それはもうとても。

「ほんとにもう！ あのね、あのさあ！」

こんな調子で眉を怒らせ、頭部からぷんぷん蒸気を昇らせている次第である。

「もう少し心配する側の気にもなって欲しいよね！ なにこの怪我！ どう考えても普通じゃないよね！」

「痛い痛い痛い！ 突付くな押すな触るな指差すな！」

つまり状況がどんなものかという点、いつものごとくいつもの調子でいつものやり方で、棺継来旋は今朝も律儀に休みなく籠野静月を起床させるというありがたいのかそうでないのか全く不明な任を遂行したわけで。言っても部屋を出ることなど絶対にしない来旋の前で更衣を済ませるしかない俺は、その結果三日前に負った傷を目撃されてしまったとかそんな場面の延長が現在だった。

背中には打撲の痕や内出血、多くの痣などが盛り沢山であり、これが今日まで発見されなかったのは逆に奇跡の類いではないだろうかむしろ。しかし実際に言えば、気紛れで来旋が俺を起こしに来て、さらに気紛れ——というかこれは既に悪ノリの部類だ——によって着替え現場を観察したことに連結する必然なのだが。

正体不明にして原因不明の傷に、来旋はたいそうご立腹の様子で実際憤慨していたのだった。

「なんなのそれは！ どこで何をしたらそんな大怪我するのよ！」
大怪我とは言うが、これでも驚愕の回復力なのが現実だ。

三日前。あの夜の直後といえ、こんなものでは済まなかった。

打撲や内出血を各所に患い、そんなものが三日で治ってしまうのだからそれこそまさに異常だといえるだろう。

その理由には、少なからずとも心当たりがない。

昔から怪我の治りが早かったなんてことはないし、それこそ、この状況は魔法のようで信じられない。信じられなくても、疑って答えが出る命題ではないので考えないことにしているのだが。

それに、答えを知っている奴は、まだ姿を見せていない。

本当に、あの夜は夢だったのではないかと思うくらいだ。この傷が完治したら、そうとしか絶対に考えられなくなる。魔法のような、一瞬の世界を忘れて。何事もなく日常に帰るだろう。

「だから、これは鏡岬の練習に付き合ってたな」

「嘘。絶対に嘘。嘘に決まってる！」

「……」

「もし仮にそれが本当だとしたら、そんな練習には付き合っちゃダメです。今すぐに縁を切りなさい」

「な……おまえそれは言い過ぎだろ。いいじゃねえかよ、おまえに迷惑は掛けないんだからさ」

「掛けてるよ！」

拳を突き上げ、危うくそれが俺の顎にアッパーの角度で炸裂する寸前に停止。ピンと指を立てて鼻先に突き付けられる。

「心配するんだから、わたしは。お兄ちゃんがいなくなったら、嫌なんだもん」

真顔で睨みながら、されども上目遣いに、欠片ほどの羞恥すら感じさせぬ声色がまるで自明の理を辞書から読み上げるみたいな口調で紡ぐ。となれば……俺に反論の余地はないのだった。

「もう。最近は何事なんだから、妙な傷は作ってこないで。知らない訳じゃないでしょ？ 郊外の集団失踪。マンション一つ消えちゃうような事件が起きてるって、そんな世の中なんだよ。本当に……気を付けてよね、お兄ちゃん」

異なる色彩の眼光が真摯に訴える。微かに潤んだ瞳が少女の胸中

に宿る本気を代弁していた。

無言のまま、来旋は顔面に向けて突き立てていた人差し指を引っ込める。代わりに、今度はそれよりも細く短い小指を控え目に立てて、そのまま視線を外してしまった。

「約束……だから。あんまり心配掛けないで、危ないことは、しないで」

さしもの棺継来旋とて、高校生たる己の身の上にしてその行為には多少ならず赤面ものの心情を抱かずにはいられないようだった。……つうか、他人事みたいに語りつつも冷静に考えればこんなもん笑い事でもなんでもない。何故なら、指切りに興じる当事者二名の内一人は俺なのだから。

腹を決め、お互い後味の悪くないよう目を逸らし、

「解ったよ、約束する」

そつと指を絡めたのでしたとき。

と、来旋にはそんな約束をしてしまったものの、今日も俺は鏡岬の背中を追って剣道場なんか顔を出しているのだった。いやだって、断れないんだから仕方ない。これが危ないこと、に部類されるかどうかは個人の主観によるだろうが、俺にとっても鏡岬にとってもあくまで部活。

約束を破ったことには、ならないだろう。

鏡岬はまず、ウォーミングアップと称して素振りを始めたのだがそれは今から三十分ほど前のことである。本人は目標一万回を高らかに宣言し、今もその長き道のりの上にいるが、俺はとくにリタイアして道場の隅。少女の叫び声が回数をカウントするのを聞いていた。

「まだ続けんのか、鏡岬」

「え？　だってまだ十分の一しか振ってないよ」

「……千回もやりゃあ十分じゃないのか」

五百回付近で腕が上がらなくなった俺と違い、その倍近くも竹刀を振っている鏡岬はまだまだ元氣なご様子。放っておけば明け方まで延々と素振りを続けているだろうことが予想される。その場合、帰っていいのかな、俺。

「ほどほどにしないと、時間なくなるぞ」

「うーん……そうだね、それじゃあそろそろ打ち合いでもしよっか。籠野くんも暇そうだし」

「いや……俺はもうちょっと休んででもいいんだけどさ」

筋肉繊維が悲鳴染みた痺れを拡大させる。ほら、体も休みたいって言ってるよ。

しかしこの体力無限無尽蔵少女は、一般人たる籠野静月を許しはしないのだった。にこやかにスキップみたいな足取りで――剣道場でだから場違いとか、モラルとかが気になる――腰を下ろす俺のもとにやってきては、傍らに投げ出した竹刀を無理矢理握らせる。

後は、解るよね？　みたいな笑顔で促して自分は早々に立ち去ってしまった。

……とんだ力技じゃないか、これ。俺に拒否権ないじゃん。

なかなか立ち上がらない俺を急かすように、鏡岬は畳みの上で剣を振る。ここからでも風を切る音が聞こえてくるのだから、あれに今から立ち向かうには相当な勇気が要るわけだ。加えて、こっちはステータス万全でない。下手をすれば死ぬかも、だ。

命の危険を感じながらも、赤点滅状態のヒットポイントで魔王に挑む勇者の心境を引き摺り畳を踏む。これが比喻と違うのはセーブポイントも回復薬もそれっぽい技が使える魔法使いもないことだ。つまり、常に命の危険と隣りあわせなのである。

ああそうか、よくよく考えるとこれって、普通にアブナイコトだわ。

「ということで帰る」

「どういうことで!？」

「悪いな鏡岬、愛する妹との約束があるんだよ」

「もー！ 籠野くんの嘘吐き！ 妹なんていないくせにー！」

「……いや、実は嘘なんてついてないんだぜ？」

やれやれ。

冗談も罷り通ればそれもよし、とは思ってみたがやはり戦乱の神はそれを許してくれなかったらしい。どうしても俺に死地に赴けとこれは天国への道標かなにかなのだろうか。などと半ば自棄になりながら畳みを踏む。

毎回思うことだが、道場の淵と畳みの上ではまるで別世界だ。

脚の裏に伝わる感触が違うというのも然りだが、なにより雰囲気が違う。厳かな空気が想像以上の重圧を意識に掛け、さらにはそこに自分以外の人間がいるのだ。俺は鏡岬以外の相手と剣を交えたことがないから解らないが、おそらくこの感覚は相手が強大であるだけ比重を増すのだろう。

互いの間に充満する戦場の赴きが、両者の力量を伝播する。

故に勝敗は剣を交える前から決まっているといっている。

いつも、同じ瞬間を幻視する。

鏡岬深紗希の剣が、この体を貫く瞬間を――

「どうかした？」

中段に構える……いや、単に剣を持って立っているだけか……鏡岬がきょとんとして首を傾げる。こちらの胸中など露ほどにも知らず、こいつはきつと俺の感じている威圧感や緊張感など一片たりとも感じていないのだろう。

「……なんでも。つうか、鏡岬、おまえやっぱり凄いや。ただ向かい合ってるだけなのに、なんつうか、息が出来なくなるみたいなの、視線が合うだけで負ける気がするんだよ。その、殺気立ってるっていうか」

「そんなことないよー」

あっけらかんと否定する。

鏡岬はびっくりするくらいに軽い口調だった。

「ただね、嬉しいんだ。こうやって誰かと打ち合えるのがさ。うちの部ってみんなやる気ないから。誘ってもきてくれないし。声を掛けて来てくれるのは籠野くんだけだよ」

「俺、剣道部じゃないぞ」

「いいのいいの。一緒に練習してくれるなら肩書きなんてなんだった」

不遇の天才。

鏡岬深紗希は、こんな場所にいるべきではない。それは何度本人が言われたか解らない、称賛の言葉。彼女の才に与えられる賛美。そうでありながら、頑なに本人はそれを否定する。一年前、全国大会に駒を進めた彼女に部員全員がそういった日も。

少女は決して、この場所を離れなかった。

だから。

みんな、いなくなった。

元より、ここには彼女の居場所などなかったのかもしれない。目の上の瘤だったのかもしれない。だから、そこにいた彼女らは少女を迫害した。自分達の居場所を守る為に。けれどそこに少女は在り続け、彼ら彼女らは姿を消した――。

「ほらほら――！ 始めるよ籠野くん！ 面つけないと怪我するよ――！」

つけてても怪我するって、十分に。

不精ながらに指示に従い、構える。自分に喝を入れるように、一度だけ深い息を吐いた。そして、それが最後。後はここを離れるまで満足な呼吸など出来ない。打ち合いを始めればその瞬間、この畳の上から酸素が消失するのだ。

それよりもずっと濃密で重厚な、一人の少女が漂わせる殺気によって。

呼吸さえ許されない。

故に全力。こちらもまた、力の限り剣を振るう。

死線を踵で踏みながら、許されぬ後退に足掻き前に進む。それは

生と死の鬩ぎ合い。

衝撃。一步。その踏み込みで距離を詰め、勢いをそのままに剣を振り下ろす。予備動作のない脚捌きから繰り出される上段。対応できたのは極限に研ぎ澄ました防衛本能による反射。音を立てて重なり合う二つの剣。そこから感じ取る、彼女の声――

「……………あたしだって、本当はみんなとやりたいよ」

――垣間見る死の予感の先に感じる、剣に乗せた少女の想いこゑはいつも泣いていた。

6／魔術師の協定

／6

赤い夢を見る。

それは途方もなく絶望的で、救いの欠片もない灼熱の煉獄。気を抜けば、その光景は目の前に浮かび上がった。最初、否、そもそも何が初めなのかなんて区別もつかない。唐突に訪れたそれは叫びであり嘆きであり、痛みであり肌を焼く炎熱でもある。自分以外の存在が自分の世界に干渉して、その異物は循環し、世界を侵していく。繰り返される絶望の赤色。三日前から消しようもない、確かな映像。幻は蜃気楼のように、或いは陽炎のように揺れては知らない間に消えている。いつもそうだ。悪い夢は目覚めてから何でもなかったかのように日常に溶けて消える。それが必然。当たり前のこと。だけど一つだけ、夢の輪郭が溶解して判別できなくなっても残留するモノがある。その一つはきつと、この夢を見ている誰かの感情。深く、世界に根付く叫びなのだろう。けれど俺には、いつも、彼女の声は何を訴えているのか理解が及ばなかった。

「かーごのくん。どうかした？ さっきからぼーっとしてるよ」

「え？ ……ああ、なんでもないよ」

気を抜けばこんな風に、簡単に意識を持っていかれた。

「ちょっと疲れただけだから、大丈夫だよ。つうか、おまえは元気だよな、ほんとに」

「あははー。だらしないう、籠野くん。男の子なのに」

こいつに言われたら本気で面目ないな。

「じゃあ、あたしはこっちだから。お別れだねー」

「おう。また明日な、鏡岬」

笑い声とともに駆けて行く鏡岬。ばいばーい、とか子供みたいに手を振りながら遠ざかっていく姿に、苦笑しながら小さく手を振り返す。これが日常。いつもの有り触れた光景だ。異常の介入する余地などない。こんな当たり前に何でもない。

少し空を見て考えてみた。あれは全部嘘だったんじゃないかと。だってそうだろ。骨が折れて、全身を焼かれて、肌の焼け落ちた人間が動き回れるはずがない。そんな魔法みたいなことはありえないんだ。何もなかった。いつも通りの夜だった。全部夢だったんだ。長くてリアルな、幻想だったって、それでいいじゃないか。

そうすれば、信じれば何も変わらない。いつまでもこの当たり前の日々で生きていける。普通に、何も知らないまま、何にも気付かないまま。こうして日常を享受して迷子みたいに――何も思い出さなくていいんだから。

思い出すって、なにを。どんなことを。

砂嵐の掛かった記憶が騒ぎ出す。頭の中で叫んでいる。思い出せと。今は仮初めなんだと大声で。忘れている。でも何を。そんなこととは決まってる。俺が忘れているのは俺自身。俺自身の、赤い夢。……なんだよ、それ。ここにしていることの異変。何かが変だ。間違ってる。こんなのは可笑しい。止めろ。俺は異常だ。この存在の在り方こそが既に――

止めろ――！

――既に、異常なんだ。

「お久しぶりね、籠野静月くん」

夜に涼やかな少女の声。凜として際立つ、闇を切り裂く美しい声。それに一瞬また、あの光景を想起させられる。黒煙の空。炎上する家屋。断罪を待ち続ける一人の少女。

振り向くと、いつかの赤い夢がそこにいた。

「三日振りかしら。直ぐに会いに行くつもりだったんだけど……まあ色々あって、遅くなっちゃった」

弓坂絵空は、片手を腰に当てて、そんな風に不敵に笑うのだった。

「弓坂……？」

否定することのできない現実が目の前にあって、否定したい景色が遠くに霞んだ。夢だと忘れて消そうとした三日前の夜が、確かな形を帯びて思考を塗り潰していく。

逃れられない現実の追走。スピードを落とせば追い付かれる。背中を触られたら、その時点で鬼ごっこは終了。迫る現実の鼓動は記憶が重なりあって形成する世界に呼応して、籠野静月を八つ裂きにするだろう。

何も考えずに目を逸らした。そこからは逃げるだけ。早足で駆けていく。追い付かれないように歩を止めない。逃げる。逃げる。逃げる。逃げる。逃げる。逃げる。逃げていく。ずっと遠くに、追い付かれないように。この今が続くように。

「動かないで、質問に答えなさい」

ぞくり、と背筋が氷結する。全身の血液が凍り付き、意識を驚掴みにされた。弓坂の一言が拘束する。抗えない支配に体を、戦慄という鎖にがんじがらめで束縛される。脚がすくんだ。本気で予感する。自分は死ぬんじゃないのか、と。今からこの少女に殺されるのではないのか、と。

「単刀直入に訊くわ。貴方何者。どこの魔術師？ 何が目的なの――

かは、聞かなくても明らかな」

一人でどんな話を進めていく。

魔術師。目的。意味が解らない。何を言っているんだ、こいつは本当に。何一つ理解できない。何故俺が質問されているのかも、何を訊かれているのかも。だというのに心のどこかは、魔術、というその言葉に酷く納得していた。……もし、言葉通り、魔術なんてものが罷り通るなら、俺の日常に起きていることも、そしてこの街で起きていることも全てに説明が付く。

「『法典』――それが目的ね。で、じゃあ訊くけど、どこで知ったの？ 『法典』が、ここにあるって」

「……………だ、から……………」

震える喉で紡ぎ出す。

「ちよっと待ってくれ。『法典』って何だ。魔術師とか、そんなことを言われても俺には訳が解らないんだ。……本当だ、信じてくれ」
「信じてない。信じられない。貴方は確かに魔術を使ってた。魔術、つまり世界と共感するには相応の回路が必要になる。貴方が使役したのは神代の回路よ。偶然だなんて言わせない。……それともなに？ 魔術に心得のない人間が、偶然にも神話再生なんて現象を使役した上に、偶然にも魔術師同士の戦争に巻き込まれたと、そう言いたいのか？」

それ以外に……何があるってんだ。

弓坂の言っていることは何一つ理解できない。今感じているのは、生命の危機を感じるだけだ。

「まさか、協会の人間だなんて言わないでよね。そんな質の悪い冗談、有り得ないとは思うけど」

「だから違うって言ってんだろ！ 何なんだよ、魔術師とか、協会とかって一体！」

「本当に知らないって言うの？ これだけの証拠が揃ってて、それでもまだ嘘を突き通すと」

「状況証拠だ！ 全部おまえの推測だろそんなの！」

「まだ、そんなことを言うのね。……ならいいわ。拷問とかは嫌いだから、簡単な方法を取ります。——黙ってこっちを向きなさい」
手を掴まれる。湿っているのは間違いなく俺の掌だろう。弓坂の手はむしろ冷たく、体温を感じさせない。冷血に感情を制御し、押さえ付けたような感触。首が動かない。振り向けない。

「早くして」

拒否を許さぬ言葉に、従うしかなかった。振り返らないと決めた逃避の対象に再度、目を合わせる。赤い瞳が再び視界に浮かび、集中も注意も何もかもを支配した。

弓坂の握力が強まる。直後、意識に流れ込んでくるいつもの光景。それがいつもよりも実態を持ったはつきりとした輪郭で見えてくる。

今度に限っては、普段は有象無象の叫びに埋もれて聞き取れない、小さな声も聞こえた。

「ごめんなさい、と涙する声がリピートを続ける。誰に謝っているのかも解らない。何を謝っているのかも、勿論。一つだけ解ることは、これは夢の中にいる彼女の泣き声で、この景色を悲しいと思うのは彼女が――」

「……参ったな。あんたの言ってること、嘘じゃないみたい」

引き戻される意識。夜の街。街灯に照らされるブラウンの髪と、闇に灯る紅の眼光。弓坂は手を離し、鼻がぶつかりそうなくらいに近付けていた顔を離してこちらを見据えていた。その表情を、困惑させながら。

「魔術を使った痕跡が見られない。世界に共感した後が、回路の発現がまるで感じられないなんて……貴方、本当に魔術師じゃないの？」

「だから、さっきから何回も言ってるだろ。第一何なんだよ、魔術師とか『法典』って……ついでに、三日前のことも説明してくれたら助かる」

遠回しに言ってみるが、けど実際、一番気になっているのは他の一点。興味の対象はむしろそこだけに向かっていると書いてもいいかもしれない。

「弓坂、おまえは何なんだ」

それが一番の関心。何よりも気に掛かり、神経を支配した事柄だった。

弓坂は表情を変えずに、黙してこちらを眺める。話していいことなのか、或いはどこまでならば話せるものなのかを吟味でもしているのだろうか。それとも俺がまだ信用されておらず、発言の裏を探っているのかもしれない。

しかし少し長めの沈黙を挟んでから弓坂は、重たい口を静かに開いた。

「端的に言うなら、貴方は魔術師の戦争に巻き込まれたのよ」

話し始めたのを切欠にして弓坂の纏う空気が若干ながら弛緩する。これまでに敷かれていた警戒体制が解かれたのか、場の空気はずいぶんと軽くなっていた。

「魔術ってのはかつての統合戦争……歴史上の魔女狩りで異端として排除された学問の名前よ。大まかな説明をするなら、世界の意思である現象に共感して使役するとも言えるのかしら。人間という現象と、全ての現象の原初にして終着である中心とを繋ぐのが回路。魔術師ってのは、その回路についての研究に生涯を費やす人間のことよ」

「……おまえの言い方だと、魔術師って連中は学者みたいなものってことになるよな。そんな奴らが、何で戦争なんてことをやらかすんだよ」

「場合によってはやらかすでしょ。だって、魔術師の目標は『法典』で、それは一つしかないものなんだから。かつての統合戦争で、追いつけなかった魔術側の当代で数人存在していた魔法使い達が、自分達の知識を詰め込んだ魔術界最大の遺産。アカシックレコードに等しい回路が『法典』。全ての探究はここに至るためのモノ。だから、互いの思想がぶつかり合えば、待っているのは殺し合いよ」

だったら、それはつまり。

「……おまえも、『法典』が欲しいのか？ それを奪い合って、この間みたいな戦いをしてるのかよ」

「正確には違うわね。でも粗方そんなところ。私はそうでもないけど、向こうはそれが目的だしね」

さて、と言って弓坂。そんなことよりも、と恐らくは最重要のポイントをあっさりと放棄して話を進めようとする。俺にしてみればまだ疑問は何も解決していない。本当に聞きたいことは他にある。例えばそう、あの連日の停電が彼女のいう魔術師の戦争に関係しているのか。

だが弓坂は質問タイムを設けようともせず、切羽詰まったように自らの話題を進める。不穏な空気は先刻よりもむしろ重苦しい。弓

坂は腰に両手を配置し、夜空の星を仰いで溜め息を吐き出した。

「困ったわね。面倒なことになったわ」

表情を見る限り、確かに困ってそうだし、この様子だと事実として面倒なことになっているのだろう。などと、他人事を他人事のようには推察していると。

「なにをバカ面してんの。それでも、あんたの心配をしてるんだからね」

「俺の……？ 何だよ。俺が魔術師だって誤解は解けたし、その疑いは晴れたんじゃないのかよ」

「わたしの中ではね。まだ半信半疑だけど。でも、この街にいる結界の魔術師はそんなこと知らない」

聞き慣れない代名詞だった。しかし俺もまったく空気が読めないわけではない。魔術師間の争いを戦争と称するのだ。ならばこの街には弓坂の他にもまだ魔術師がいるということ。結界の魔術師と呼ばれた誰かは、恐らくは弓坂の敵に当たるのだろう。

「もう少し危機感を持ちなさい。奴はあんたが『法典』を狙う魔術師だって、きっと思ってるわ。だとしたら取るべき手段は一つだけ。――貴方を殺して、障害は排除する。当然の思考よね、これ。貴方もたまたましてたら死ぬわよ」

「んな馬鹿な。そんな、あっさり殺すなんてこと」

「相手は、マンション一つ分の人間を操って戦わせるような、そんな魔術師よ。慈悲も予断もありゃしない。邪魔なら消す、それだけよ」

魔術が学問の類いであるならば、研究者に値する魔術師はもっと温厚な連中であるべきではないかと一瞬思う。けれどよく聞いてみるとそんなことより、もっと注目すべき部分が弓坂の発言には含まれていた。

「マンションって、郊外のマンションのことか……ほら、住人が一斉に失踪した……」

「……そう、ね。その通りよ」

何故か少し迷うように言って、

「覚えてないの？ なにも。もしかして全部、忘れてる？」

意味深な言葉を呪文みたいに読み上げる。

覚えていないって、なにをだ。……少し考えれば簡単なことだ。

覚えていないことといえば、停電のこともそうである。その夜の記憶が、俺には見事に欠落していた。

「いや、停電のことだろ。一応それは知ってる……あれも、おまえ達の仕業なのか？」

俺の切り返しに、弓坂は僅かに啞然としたかのような顔を浮かべてしかし、それを取り繕うように直ぐ様返事をくれた。

「達、つてのは気に入らないわね。あくまで相手が一方的に暴れるのよ。この街全体に結界の術式を組んで、発動すれば中の人間を支配できる状況を作ってるの」

「じゃあ、三日前のあれって」

魔術師に操作された、魔術とは何の関係もない一般人だったってことになるのか。

「正確には、結界の発動に組まれる術式の中核。共感部を何に設定しているかによって形質は異なるわ。共界系の魔術だからきつと、ある一定の感情を膨張させて、それが個人の器に余った時、溢れ出た感情を結界の延長として操作できるのだろうけど」

「その結界は、まだ」

「ええ。術式は成立してるから、また発動されても可笑しくはないわ」

危機感が駆け巡る。街全体規模の結界が発動して、以前のように一人だけではなく、もっと大勢の人間を人形にされてしまったらどうなる。この街は本当に、冗談でなくゴーストタウンに成り変わってしまう。住人全員が混沌として暴れまわる、あんな化物が何十も闊歩する街に、変わってしまうということだ。

今の場面で俺が焦っても、どうにもならないことは理解できていた。だが落ち着いてなどいられない。自分の暮らす街が、十分後に

は破滅しているかもしれないのだ。焦りを感じないことなど、あるはずもない。

俺のリアクションが予想に違わなすぎたのか、弓坂は呆れるように息を吐き、腕を組み直した。

「つまりそれが『法典』。戦争の素にして、破滅の要因よ。魔術師はそれの為なら平気で何もかもを放棄するわ。他者の尊厳も、自己の生存も擲ってね」

「どうすればいいんだよ。このままだと、また……！」

「落ち着きなさい。向こうはそう直ぐに動かないわよ。むしろ、街の心配をするなら先ずは自分の身を案ずるべきよ、あんた」

パニックを起こしていた思考が急に冷却された気分を味わう。ずつと巻き戻ってこの話題の冒頭。そういえば弓坂は言っていた。『法典』を狙う魔術師は、俺を自分と同じ目的で動く魔術師だと考えているらしい。邪魔者は消す。つまりそれは。

「貴方、下手したら殺されるわね。間違いない。本当に魔術師でないなら、抵抗はできないわ。黙って殺されるか」

続いて弓坂が口にした言葉は、欠片も予想のつかないものだった。「わたしと組んで、抗うか。それだけよ」

「おまえと……どういうことだよ。俺には、おまえといっしょに戦ってやれる力はないぞ」

「それはどうかしら。仮にも貴方が神話再生を行ったのは間違いない。それに、別にこれは同盟を結ぼうとか言ってるんじゃないの。私にしてみれば、貴方のような怪しい人間が傍にいれば監視も出来るし、本当に無関係なら守って上げられる」

「守るって……」

魔術師なんて得体の知れない存在とはいえ、ここにいるのは同級生の弓坂絵空だ。その少女に、守られるなんてことはすんなり受け入れられない。それにこいつは、放っておけばあの異形に壊されかねないのだ。

そう思うと、少しだけ心配だった。

自分が標的にされかねないという状況だというのに。どうして他人の心配なんてしていただけるのか。解決する方法が一つある。弓坂の誘いを受ければ、弓坂の傍にいられるし、自分の身も安全だ。いざとなればまた、三日前のようなこともあるかもしれない。

言い訳染みた思考の末に。

俺は、弓坂のその誘いに乗った。

「解ったよ、弓坂。だけど、これはあくまで協定だ」

「協定？ 聞いてなかったの、私は別に、貴方に何も期待してないわよ」

そう言われるのは少し心外でもあるのだが。

「もしかしたらまた、三日前みたいなことがあるかもしれないだろ。なんにしろ、自分の身は自分で守る。だからおまえも、自分のことを第一に考えて行動してくれ」

「バカじゃないの。だったら、あんたの言うような協定は必要ないじゃない」

「俺は俺の目的の為に、おまえに協力する。今起きてる戦争を終わらせるには、おまえと組んだ方が都合がいいんだよ。それにおまえの言う通り、俺が魔術を使ったのが確かなら、また力になれるかもしれない」

月が雲に隠れていた。古い街灯が点滅し、僅かに生まれた暗闇にそれを自覚させられる。

見失った弓坂の表情。次に、月が覗いたときに照らされる世界。弓坂は、仁王立ちしてジト目、睨むような視線を崩さない。試すようなその眼差しに耐える数秒の後、根気で折れたのは弓坂の方だった。投げ出すように大袈裟な、見せ付けるみたいな溜息で背中を見せて、

「わーっかったわよ。名目は何だっていいわ。だけどそんなに言うなら、ちゃんと力になってよ」

ぎろ、と首を捻って見せる瞳。

弓坂は視線でだけ悪戯に笑って、からかうように続けた。

「期待してるからね」

「……努力します」

断れる理由なんてない。期待には応えたいと思った。

何故かって。決まっている。

月光の下で楽しげに笑う彼女の姿が、思わず見蕩れてしまうくらいに綺麗だったから。その期待を無惨に裏切るような真似はしたくない。だからこれは密かな誓い。決して口には出さずとも、まるで夢に誓うかのような或いは願い。

赤い、泡沫の夢に誓う。

この少女を守ろう、と。それが、誰にしたわけでもない。一人だけの、約束だった。

だってのに。

「じゃあ、差し当たって、今後の方針については明日の昼休みにね。来なかったら、殺すから」

こんな物騒な一面を見せるから、こっちの幻想は簡単に壊れて台無しになるのですた。

7／アングリーレッド

／7

「悪い、御道」

「はあ……？」

「俺今日、昼は中庭で喰ってくる」

率直にその用件を告げると、既にナプキンを広げていた御道は石膏で固められたかのようにぼろりと箸を落とした。硬直状態の不良顔金髪風紀委員長はようやく人語を思い出したように、

「女か……まさか、おまえが」

女には違いないがこの男の想定とは如何せん、多少ならず誤差が存在する。なので余計なことを言って肯定するのは得策とは言えない。

「なんでもない。ちょっと今日は野暮用があるだけだよ」

それだけ言い残して御道に背を向ける。後は振り向かず一直線に中庭へ向った。御道はぶつくさと文句を垂れ流しながらも追いかけてくる様子はない。鉄の風紀委員長とはいえ、他人の事情に口を出すことは出来ない知っているらしい。

もつとも、御道と俺の考える事情は相当異なっているだろうが。

教室を出て行く最後、俺の背中では御道の不機嫌な声を聞いた。

「……風紀を乱すなよ、甚だ面倒くせえ」

とはまあ、御道ならきつとそう言って送り出してくれるだろうとの予想済みだった。

問題は。

昼休み開始直後に購買へ猛ダッシュしていった鏡岬深紗希に、このことをなんと説明すればいいかである。さっぱりしてるみたいで

勘は鋭いし、あれで仲間外れなんかを何よりも嫌うからな。弓坂と会談することを話せば間違ひなく誤解を生むし。

思いつつ足取りは早くも校舎の一階。中庭に出る二棟との渡り廊下にて。

俺は、丁度両手で戦利品の如きパンを抱きかかえた鏡岬と鉢合わせするとか、そんなベタな場面に遭遇するのだった。両者の距離は廊下一本分。数字にすれば三十メートルほど。両者が互いの姿を認めるのは同時だろう。今更引き返すことも、隠れる場所もない。

怪訝さをいつもの能天気な表情に霞ませて、鏡岬が言う。

「籠野くん？ あれあれ、どうしたの、お弁当は？ あ、持ってるね。ってことは足りないのは御道くんか。なにに。今日は気分を変えてアウトドアな昼食かい？」

ユージュアル鏡岬がそこにいた！

鼻歌交じりの駆け足で一息に距離を詰めた鏡岬。その端正なスポーツ少女の顔が満面に笑みを湛えて見上げてくる。太陽みたいな表情がすぐ傍で無邪気に笑っていて……これが可笑しなことに妙な罪悪感を催したりするから困ったものだ。

本物の天然か。

それとも、本当は――

「悪いな鏡岬、今日は昼、御道と二人で食べててくれ。俺ちよっと、用事あるからさ」

「用事？ ふふん……これは怪しいよ。……はっ！ もしかして硝子の如きあたし達の友情に亀裂が入ったのか！ そ、そんなあ！ あたし、悪いことしたなら謝るよ！ 一生償い続けるから許してよ 籠野くん！」

「重い！ 重いよ鏡岬！」

いや、こんなコントを繰り広げている場合ではない。

じゃなくて。

「本当、悪い。別におまえ達がどうってのは関係ないんだ。俺の事情だから、気にしないでくれ」

「……」

「明日からは元通りだからさ、今日は見逃してくれ。頼む、鏡岬」
ことの次第と真剣さをここに至って悟った鏡岬は、もう既に退けないとばかり笑顔のまま顔の筋肉を硬直させる。ぽかんと焦点の合わない微笑が中空、俺の鼻の周辺を彷徨っていた。ややつて、渋々に口を開いた少女は言葉を紡ぐ。

「解った。解りました。解ったよ」

どうして三回言ったんだろう。

「大人しく教室に帰って、こわーいこわーい金髪不良生徒とご飯食べてきます。知らないよ、あたしが危険な目に遭っても」

あいつさ、風紀委員長なんだぜ、一応。

むう、と頬を膨らませた鏡岬。意外と頑固者な少女は、切り返さない俺に対してようやく折れてくれた。不満で一杯に膨らんだ頬を存分に見せ付けて、避けるように俺の隣を過ぎていく。振り返ってもう一度謝るべきかどうかを考えたが、しつこ過ぎるのもどうかと思う。

いや待てよ。

そもそもよく考えてみる、これは俺が悪いのか。

罪の意識はどの辺りからきて、その場所に何があるのかが気に掛かったが深く自問するよりも先に思考に乱入してくる声があった。それは、ぼつりと零した小さな呟き。本来誰にも届くことなく消えていく白昼の螢気楼に似た、虚しい幻想の声。

「でもさ、関係ないとか言わないでよ。そんなの、寂しいじゃない」
本人には自覚があったのか。それとも無意識なのか。

そうして、後ろを向いた頃には既に鏡岬の姿はなく、言葉の真意を突き止めることはきつと永遠に出来ない。戻ることのない一瞬はおそらく、時に埋もれて消えていくだろう。それこそ、なんでもない過去の夢のように。

「で、随分待たせるじゃないの、籠野くん」

「……………いらしたんですか、弓坂さん」

次から次へと、絶え間なく代わる代わる色んな奴が現れる日である。

ちなみにどの辺りからいたのかを問うてみると、本人はまるでさうそれとを自白した。

「そうね。籠野くんが修羅場に踏み込んだ直後くらいからかな」

「つまり最初から最後まで見てたんだろ。趣味悪いぞ、おまえ」

「なに？ あの場合にわたしが出て行った方がよかったのかしら？」

「……ごめん。俺が悪かった」

「よろしい」

なんかさ、キャラ変わってないかこいつ。

初めて会った夜は随分しおらしい態度を取っていたが、あの弓坂絵空はどこへ行ったのだろう。思い出すのは、清廉に凜として怪異を恐れることなく他者に心を配る聖者のような少女。目の前にいるのは、傍若無人にして唯我独尊、自らの内に悪魔を宿す少女。

どちらの弓坂が本物なのかなんて。

考えたくも、なかった……。

「それじゃ、取り合えず場所を移しましょうか？」

親指を立てて、その指で肩の後ろの風景を指す。先にあるのは何期生かが作って残していった木製ベンチ。木の下に出来る、木漏れ日の溜まり場にはまだ先客がない。昼食を取るならばそこは確かにベストポジションだろう。

「ほら早くきなさい。時間ないのよ。あんたがバカやってるからもう昼休み三分の一も終わってるんだからね」

強引に手首を引っ張られる。いつかの夜と同じ、そのまま抵抗することを許されず引っ張られる俺。無抵抗に引き摺られる先は弓坂の指定した日溜まりベンチ。一目散に駆けて行く様子。走る速度に追いつかぬ、靡き流れる綺麗な髪。

不意に解ける拘束。手を離すとそのまま弓坂はベンチにすんと腰を落ち着けた。

尊大に振舞うものだから忘れていたが、黙って座っている分には

なんら普通の少女と違わない。細く綺麗な姿勢が木漏れ日に映える。凜とした横顔。気が強く意思の頑固な、けれど柔らかい目元。こちらを向いた端正な顔が俺の到着を待ちわびるように一層輝く。

「早く座る。あんたが無駄にしたわたしの時間、弁償してくれるわけ？」

……まあ、口を開けばこんなだから、偶像は音を立てて崩れるのだ。

それは本当に一瞬の輝き。

よく記憶に留めておかないと忘れてしまいかねない、夢のような一瞬の嘘^{ユメ}。

だけどそれでいいのかもしれない。夢なんて曖昧なものは現実の前では無力だから、折り合いを付けていかなければならないのは生きていく上で必要なこと。ならば受け入れるしかない。幻想の中にいる少女と、現実にいる少女に。

直視しなくてはいけないのだ。——彼女が魔術師であって、殺し合いの夜を送る現実を。

「ねえ、ちょっと……人がテンション上げてるんだから、そんな暗い顔しないでよ」

「悪い悪い。少し考え事が」

「言い訳しないで。それから、その謝るのがダメなのよ。重いから。……よし。今日から籠野くんは謝るの禁止。解った？」

「解ら……ない。なんだその縛りは」

「なに？ 出来ないっての。まあ、無理にとは言わないけど殺すわよ？」

「善処します」

なんかもうこの時点で二人の関係（上下的な意味で）が決定していた！

さりとて。

浮ついた空気はその一言を最後に終結。こほん、とわざとらしい咳払いをした弓坂はもう隣に座ることを強要したりはしなかった。

少女の鋭い眼光——いつか炎で天を衝いた彼女がしていたような——がこちらを射抜く。ただそれだけのことで、場の空気は一変した。「先に訊いておくけど、何か気になることはあるかしら」

「なら一つだけ。この戦いが、魔術師の戦争ってのが本格的な戦況になったら……この街は、どうなるんだ……？」

「言うまでもないでしょ、そんなこと」

呆れる風に、しかし顔色は真剣そのもので、

「二日もあれば更地よ。貴方の言う本格的っていうのが私の考えている戦況と同じなら。言っとくけど、あんなのは序の口以下よ。まだ魔術師二人だけで、協会も関与してないから大事になってないけど。敵が本気を出して動き出せば、協会も他の魔術師もそれを嗅ぎ付けて——この街は戦場になる。生存者を期待するなんておこがましい。生きていることが異常だなんてのが罷り通る、そんな地獄が顕現するわ」

魔術師と呼ばれる、超常を操る法外の徒。その争いを戦争と称するのが何者かは知れないが、弓坂の言っていることは決して大袈裟などではないのだろう。俺自身もまた目の前で魔術という神秘を体験している。あれが、人殺しの道具として使役されたなら、そこに周囲への遠慮も配慮もないのだとしたら。

そんなもの、想像するまでもない。

地獄というよりはむしろ鍊獄。なぜなら死を押し付けられる人々には相応の罪状がない。同じように、また運もなかったのだとそんな風に諦めるしかない。魔術師なんて存在に関わってしまった時点で命運は尽きたと知るしか、日常の存在には選択肢がないのだから。勿論そんなことは間違っている。あくまで考え得る最悪の事態を仮想しただけ。しかしそれは恐ろしく鮮明に、この身で体感したことがあるかのようにはつきりと浮かび上がった。

——それこそ、誰かが死を受け入れてしまった瞬間の心象さえも明らかに。

「て、言っても、そこまで焦ることもないわよ。相手だって二日連

続で術式を起動させてるから、また直ぐには動けないわ。そんなことしたら、協会に嗅ぎ付けられるかもしれないし、負担も大きいからね。少なくとも、被害規模は一週間前のものより拡大しないでしょうね。下手に動いて面倒事を起こすのは向こうも嫌だろうから」

内心で焦燥を抑えきれない俺に対して、弓坂は他人事だともいうように落ち着き払っていた。昼休みらしく、手製らしきサンドイッチを一口咀嚼するほどの暢気ささえもある。これだと、逆に可笑しいのは俺の方に見えてしまうほどだった。

口内の物を飲み下した弓坂がやはり、動揺も焦りも感じさせない口調と態度で宥めるように説明を始める。

「で、相手が動けない今が反撃のチャンスな訳よ」

「魔術師を見つけ出して叩くってことか……？」

「まさか。正面からやりあったら不利なのはこっちよ。術式が成立している以上、ここは相手のホームグラウンドなんだから。だからね、まずはその不利を解消するの」

「どういう意味だ、それ？」

「簡単なことじゃない。この隙に、術式を破綻させるのよ。術式の断片は街中にばら撒かれてるから一つずつ見つけて解いていくわ……て、どうしたのよその顔？ なにか不満？」

「いやその、なんていうか」

思ったよりも地味なんだな、なんてことは冗談でもい言えそうにない。

一週間前。

マンションの住人が一斉に失踪したあの事件。あれよりも規模が拡大しないとなると……正直それは少し拍子抜けだ。戦争とか街一つが焼け野原になるだとか言っていた後では衝撃に欠けるのは否めない。勿論被害は小さいに越したことはない。とはいえ、戦争とまで称される魔術師の戦闘が、街一つ分の規模にも及ばないと思うとこの心境も間違っていないだろう。

「なあ弓坂、その協会ってのは何なんだ？ さっきから何回も言っ

てるけどさ」

「それについては色々言われてるけど、統合戦争終結後に発足した魔術機関で、創設者は法典製作に関わった魔法使いだっていうのが有力ね。成り立ちはともかく、役割としては魔術界の取締役よ。魔術なんて異常は世界から排除されるのが道理だから、そうならないように神秘を秘匿する組織。もっとその役割はあくまでついだけどね。本来の目的は第二の法典を産み出すことよ。その為に、力のある魔術師が多く集まってるわけ。無所属魔術師は、それこそ協会にしてみればサンプルみたいなもの。下手に騒げば治安維持の名目で瓶詰にされても可笑しくないわ」

「だから、敵も派手に動けないってのか？」

けれど、だからといって放っておいていいものでないこともまた明らかだ。魔術師が形振り構わず結界を利用し、本気で暴れださないなんて保証はどこにもない。ならば一刻も早く魔術師の手は封じておくべきだろう。危険因子を排除することがまず何よりの正攻法だ。

それになによりも、例え魔術師が前回と同じ手を講じたにしろ弓坂が戦わなければならないことには変わりはないのだから。自分と年の同じ少女に、殺し合いなどはさせたくない。その過程で彼女が傷を負わないわけもまたなく、同様に生き残ることができる保証だ。てどこにもありはしないのだ。

「さて、本題だけど……と言っても、もう十分よね。今後の活動方針は、まず術式の破壊。放課後、早速行動するわよ」

「了解……あ、でも待てよ弓坂。その術式とやらを探すのに、何か当てとかはあるのか？」

「……」

あれ、弓坂さん？ どうして答えないのだろう。

不自然に顔を背ける。赤い瞳がそっぽを向いて、こちらから窺えるのは横顔だけとなった。白い指が、かりかりと頬を掻く。心なしに、汗が浮いているようにも見えなくない。

……最悪の想像が脳裏を過ぎる。

間もなく、その結末は現実へと変わるのだった。

「ない……かな」

あははは、とか笑っている。やっと振り返った笑顔は、なんだろう、初めて見る弓坂が自信を欠いた表情で俺は彼女が同年代の少女なのだと思い知る。それもとびきりの、無計画性ドジ娘だ。

「術式自体を見つけるのは、そんなに難しくはないはずなのよ。ほら、昨日貴方にやったでしょ。あんな風に回路の痕跡に共感するの。あれさ、わたしにしか出来ないのよ！」

凄いでしょ！ と、問いかけてくる子供みたいな態度。

「いやまあ、そりゃあ凄いけど。でも、その術式がどこにあるかの見当がつかなきや意味が――」

「ああもう、うっさい！ 何でもいいから付き合え！ こういうのは一人より二人の方が効率がいいでしょバカ！」

「逆切れかよ！？」

「バカバカバカバカバカバカ！ いいから付き合え！ こういうのは根気が大事なのよ！」

昼休みの終り。

赤い目の魔術師はそんな風に咆哮して憤然とベンチから立ち上がる。日光を浴びた茶髪が赤く輝く。風にそよぐ様子がどこか夕焼けを思い出させた。赤い夢に見る景色に似た、その色を。

などと考えている間に、髪を翻した弓坂が大股で校舎に帰っている。引き止めようとした俺の額に、丸めたサンドイッチの包みが命中。どうやら怒らせてしまったらしいのだが、果たしてこれは俺が悪いか甚だ疑問の場面である。というか、断言して俺は悪くない。渡り廊下に脚を掛け、思い出したように振り向くと、真っ赤に炎上した瞳に激昂の色を溢れさせ、

「放課後、先に帰ったら燃やすから！」

満更冗談にならない、そんな物騒なことを声高らかに言い放つのだった。

8／ワンダリングアフター

／8

弓坂の提案はおよそ苦肉の策としてこれほどになくその型に填まったものである。つまり、ただ単に歩くだけ。街中を徘徊しつつ術式を発見すればその場で処理。放課後の予定はその無謀な策に費やされることが昼休みに決定されていた。放課後、校門で待ち合わせ。それが弓坂の指定した時刻と場所。遅れたら血を見ることになりそうなのでそくさ教室を出ようとしていたところを呼び止められる。誰にかと問われれば当然、それは鏡岬の他に誰でもないのだが。

そして、その時点で用件については聞かずとも見当がついていた。「ごめん鏡岬、今日は用があつて練習には付き合つてやれないんだ」先手を打って手を合わせる。正直、昼休みの件もあるのでこの誘いを断ることは抵抗があつたがやむを得ない。

先回りされた鏡岬は思考を読まれたことに驚きを見せることもなく、そもそもそんな感情は初めからなかったかのように、彼女にしては珍しく暗い表情をして理由を訊いてくる。けれどそれは、俺の言葉と同じく質問と言うより確認に近く、

「弓坂さん、かな？」

素直に首肯すること以外に俺は自分の行動を選ぶことができなかった。

「まあな。悪い、また今度埋め合わせはするから、今日は見逃してくれ。……て、ん？」

そして肯定してから気付く。

鏡岬はいつ、どのタイミングでそれを知ったというのだろう。俺と弓坂の間にある関係をどこで知りえたというのか。それは例えば

今日の昼休み。その光景を彼女が目撃していたというならば領ける。……納得できるのと、受け入れられるってのは別物なんだな。

細かく追求することはせずに、その感情を呑み込んだ。

「解った。うん、まあ元々、籠野くんは剣道部ってわけじゃないし、謝られるのはちよつと違うかな。いいよいいよ、気にしないで」

飛び跳ねる笑顔が弾けて、鏡岬に肩を叩かれる。

まるで自分が悪いことをしているかのようなそんな気分を味わうのはこれで二度目。

だから俺は。

「サンキュ。今度また顔出すから、おまえも練習頑張れよ」

籠野静月は少女の微笑みに背を向けて走り出す。

まるでその裏側にあるものから目を背けるように、逃避した。

もう何度もそれを繰り返してきたせいか、今では、その逃避の理由が解らない。一つだけ確かなことは、いつも彼女の笑顔に言い知れない不安を感じていると言うことだけで――

いつからだろう。

それが、畏怖に換わったのは。

「……………で、本当に歩き回るだけなんだな」

溜息交じりに呟いた言葉が口に出してはいけないものだったんだと、吐き出してから思い出した。音の速さに劣る思考では、そう言った頃には無論手遅れなのだが。弓坂絵空の眉がぴくりと動き、流し目が刃物染みた鋭利さでこちらに向けられた。

「いや、その、なんか効率のいいやり方が他にあるんじゃないかと思っただけ」

「へえ、たとえばどんなことかしら？　ちなみに、くだらないこと言ったら燃やすわよ」

本当に機嫌が悪いから、それを言っていないものかどうか逡巡する。

「……術式のある場所に心当たりとかはないのかなって、さ」

「だからないってば。というよりも、そもそも結界の術式っていうのは根本となる式から広がるものだから、張った本人にもどこに根を張っているからなんて解らないものなの。物にもよるけど、結界っていう魔術は一つの式だから。境界を作り出す魔術が結界であって、その内部と外部を遮断する壁が魔術ってわけじゃない。式を組んだ時点で術者の仕事はほとんど終わってるってこと」

「だったらその根本ってのを壊せばいいんじゃないか。何も一つ一つ壊していく必要はないだろ？」

我ながら見事な正論だったと思う。

思うのだが、だとしたら弓坂がその考えに至らない訳もない。

案の定、弓坂はくたびれた表情であっさりこちらの意見を否定した。

「それは無理ね。言ってるでしょ、結界はあくまで魔術。発動すればそれで終わりなの。十分に根を張ったらその後は自然消滅するのが普通よ。実際、そんなものがまだ残っていればわたしが見つける。断言してもいいけど、式はとくに消されてるわ」

「そっか、悪い……軽率だった」

「謝らないの。そういう約束でしょ。ほら、しゃきつとする！ これでも少しは期待して上げてるんだか」

期待されても、俺だって手掛かりがあるわけじゃないんだが。条件としては弓坂と同じだし……いや、ことが魔術関連なのだから、やはり弓坂の方が頼りになるだろう。

とはいえ約束してしまったのも事実だ。微弱とはいえ、そうなれるかは解らなくても、俺は弓坂に協力すると。

けれど今から思えばそれは何故だったのか。

自分の暮らす街が戦場になると、そう告げられたからだろうか。当然、自分の居場所が壊れることに危機感や恐怖を抱かないわけはない。魔術師達の戦争なんて他所でやってくれと思うのが普通だ。

だが、それを自分がどうにかできるなんて——どうにかしような

んて思ったのは、なぜ。

不思議と。

弓坂絵空という魔術師に協力することに関して——自分が戦争に巻き込まれることに対する恐怖は、一切なかった。そう——籠野静月の中には今、『死』に対する恐れが致命的なまでに欠落していた。まるで、それを知っているかのように。

未知である筈の死の概念に触れたことがあるかのように、この心は死を許容する。何も今度のことだけではないのだ。初めて弓坂と会った夜から既にそれは発現していた。あの死者との戦いの中で、俺が恐れていたのは自己の損傷や破滅よりもむしろ、目の前の少女の危機だったのだから。

「籠野くん、どうかした？」

黙っていたのが悪かったのか、弓坂に声を掛けられる。それだけでどこか中空を浮遊していた意識が元の場所に戻ってくる。飛躍しすぎた思考が現実の、なんでもないアスファルト舗装の道路とコンクリートのブロック塀を認識した。

なんでもない、と答えるつもりが、不意に意識に何かが引っ掛かる。

脳の片隅が痛覚に刺激され、熱を訴える。

吐き気を催すような違和感と現実の喪失感には覚えがあった。

「……っ。……………弓坂、そこ」

歪んでいる。

違和感を言葉にするならば、その一言に全てが要約されていた。

日常の風景にあって、そこだけが確実に周囲から孤立している。白線で囲いを作ったように明らかな浮き彫りの空間。視認するだけで、あるいは近くにいただけで肌が感じ取る異常がぼかりと日常に穿たれていた。

「え？　なに、そこって？」

弓坂は何も感じていないらしい。

網膜に結ばれる像はなんら普段と違わない。なのに脳がそれを解

析することで、内包した異常を発露するのだ。そしてその異常は、熱になり、痛みになり、意識を刺激する。

世界がもしも白と黒だけに染まっていたならば。

そこだけは周囲と違って他の色を持った、そんな感覚。

「その電柱、ちょっと位置が高いけど……なんか、変なんだ」

「電柱……？」

反復して俺が指で示した電柱に近付く弓坂。半信半疑といった様子ではあるが、実際に間近に寄って件の電柱に触れたところで少女の反応が表に出た。

はっ、とした勢いで振り返って怪訝な面持ちをこちらに向ける。

その行動だけで心意を探るのには十分。どうやら俺の感じた違和感とは本物だったと見て間違いないだろう。意識してもう一度、その位置に視線を向けて精神を集中する。

消えかけていた異常は、そうすることで確固としたカタチを復元した。

「……信じられない、貴方本当に見えるんだ」

見えるっていうのは少し違うけれど、厳密にどう異なるのかは説明できそうにない。弓坂は口元に手を当てて思案顔を作っていた。やがて、今は俺が術式を見つけ出したカラクリよりもその破壊を優先すべきだと判断したのだろう、再び電柱に触れて、

「……………届かない」

忌々しげに小声で、弓坂絵空は絶望を孕んだ声音で溢した。

うーん、と背伸びをしているが、指先はもう少しのところで問題部分に届かない。身長不足。そんな結果を体現しつつも再三チャレンジを重ねた弓坂は肩で息をしながら物凄い剣幕で俺を睨み付け、

「なにしてんのよ、さっさとこっち来て手伝いなさいよバカ！」

「……俺にどうしろと、弓坂さん」

「跪きなさい」

「……………はい？」

「と、本当なら言いたいところだけどそれだとまだ高さが足りないのよ。この際仕方ないから、肩車しなさい」

「誰が……誰を？」

「あんたが、わたしを」

聞いて後悔した。答えの解りきったその質問は、互いの間に鉛のような沈黙を産み出す以外に意味を持たない。弓坂も俺も、次に何を言えばいいのか解らない状態に陥ってしまったかと思いきや、やにわに弓坂の怒声。

「もたもたするな！ さっさとしゃがめ！」

「あ、いや、俺は構わないけど、弓坂はそれでいいのか……？」

「うるさい。黙ってあんたは黙って肩車してればいいの。それから」言葉に詰まるも目は背けずに、瞳が震えているように見えるのは認識外へ、弓坂は言った。

「……絶対、上は見ないこと」

どうやら、籠野静月に逃げ場は残されていないらしい。いざとなれば女の方が思い切りがいいとは言うけれど、それって自棄なんじゃないか。今の弓坂もその類いの心境であってこれは俗に魔が差したとか自暴自棄だとかそんな感じの考えなしな暴走であってつまり——ああ、もう。

こうなればこちらも腹をくくるしかない。そもそも肩車程度のことでいちいち緊張してはみっともないじゃないか。そう自分に言い聞かせて屈む。……うわ、思ったよりも色々と視界が危ない。

弓坂の、白く適度な肉付きのした脹ら脛が、息の掛かる距離に並んでいる。首を少しでも上向ければその瞬間視界を覆うだろう光景に息を飲む。

「早くしてよ」

……無論そんな自殺行為は死んでも選択しない。

無心。頭の中を空っぽにして、いざ——

弓坂の膝に触れて体勢を固定する。

「あ————」

吐息みたいな声が聞こえた。

構わず、聴覚を遮断して次の行程へ。掴んだ膝の間に頭を入れて立ち上がる。そしてその瞬間に後頭部を蹂躪した感覚に悶絶する。弓坂の体を肩に乗せて密着したこの状態を意識していないと言えるそれは嘘になる。上は見るなどの指示なので下方に目を向ければ肩から垂れ下がる二本の白い脚が視界に入って、極めつけには――

「あ……ん、やあ………」

「頼むから黙っててくれ弓坂！」

俺にしてみればこの状況は、先週のあれよりも断然恐ろしい状況なのだ。だってそうだろう？ 学校で飛び抜けた美人の、知り合って三日程度しか経過していない少女がスカートを履いて自分の肩に跨がっているなんてそんな状況、平然としていられるはずがない。そうして精神を磨り減らしながら自分の中にある制御を失いかけている感情と戦いながら俺が聞いたのは、頭の上で小さく笑いを漏らす弓坂の声だった。……こいつ、確信犯だったのか。

「共感……開始――」

悪魔の笑い声が止み、口調が変わる。

今を必死に耐えていた俺は、その声に平常心を呼び戻された。浮ついていた空気が緊張する。まるで世界が、彼女に共感しているように静まり返った。頭上から降る赤い光。紡がれる細かな詠唱。繊細な声が脳に刻む。それは、赤い景色。

赤い夢が、また、蘇る。

黒煙が喉に絡みつき、目に沁みる。熱い。痛い。

朧な景色はしかし普段よりも明確に、そこにいる誰かを映し出す。長い髪。炎に照らされて焼かれたような、そんな黒に黄金を溶かした茶色。幽かに窺える横顔の表情。赤い瞳は焼け果てる終わった絶望の世界を眺め、見通して――

「――共感終了。術式破棄」

停止ボタンを誰かが押した。そんな風に呆気なく、赤い夢が終わる。

「……驚いた。原理は解らないけど貴方、術式が見付けられるんだ」
まだ夢を見ている気分で、どちらが現実かの認識も曖昧。

答える自分の声は、思ったよりもはっきりとしていた。

「……この状況で、そんなに冷静な感想が抱けるおまえに俺は驚いてるよ」

「ふうん。でも籠野くんだって楽しかったでしょ？」

「そんなわけあるか！」

けられけられ。悪魔がそこにいた。

「さて、それじゃあ次に行きましょう。どうやら期待していいみたいだし、今日はこの辺りの地区に集中して探すことにするわ」

手に入れた探知機の性能が思いの外よかったことにご満悦の弓坂。さっきまでの不機嫌さはどこに飛び去っていったのやらと思いつつ、威勢よく歩く背中を追いかけた。行く先の宛などないはずなのに、前に進むがむしやらな歩幅はどこか子供のように危なっかしい。本当は俺が心配することなど何もないだろうのに。

この時の赤い魔術師は、どこにいても可笑しくない普通の少女だった。

＊

当初は難航を極めると思われた決壊潰しはしかし、終わってみれば思わぬ好結果を残していた。

弓坂の破壊した一つ目の術式は確かに機能を停止して消滅したが、その後でも微かにではあるが違和感が残っていて、それを逆に辿ってみた結果が二つ目の術式に至ったのだ。弓坂の話では結界を維持している術式は大元の魔術から根を伸ばしたようなものだというか

ら、それらは全て繋がっているのかもしれない。あるいは以前結界が発動した際に繋がった術式同士の回路である可能性もあるとも言う。

術式は破棄した数を増やせばそれだけ見つけやすくなったし、違和感から不快感も引いていた。単純な慣れかもしれず、そのことは弓坂にはなしていない。

ともあれ苦肉の策と思われたこの探索放浪はしかし、思いもよらぬ結末をもたらすこととなり、陽が沈む頃には相当な数の術式を解除することに成功していた。

「これだけやれば、この地区はもういいわね。これを後二つか三つの地区で繰り返し返せば確実に結界を破綻させられるわ」

歩き回って疲れたのか、遊歩道にあったベンチに座って弓坂は満足気に言って笑う。

けれど疲労感を隠しきれていないその表情はどこか無理をしているような印象を受けた。

「でも意外。籠野くん、貴方どうやら回路を逆引きする力があるみたいね」

「回路……って、魔術の元になるとか言ってた奴だよな」

「現象を生み出す機関、世界の感情とかそんな風にも呼ばれるわね。本来なら色の通っていない無色の回路に自己を接続して現象を引き起こすんだけど、貴方は逆の手順が踏めるみたい。つまり、回路を見つける能力に秀でているのよ。こういうことって、昔からあったりしたの？」

「いや……なかったはずだよ。こんなこと」

強いて言うなら先週の夜。結界に異常なまでにあてられたことや、死者に対して使った魔術だとか、ここ最近に集中している。子供の頃なんかを思い出してみてもこんなことはまったくなくて、自分に妙な力があるだなんてことは思ったこともない。だからこそ弓坂に言われたことをすんなり受け入れるには抵抗があったし、納得もできなかった。

代わりにあるのは漠然とした不安感。自分が自分でなくなるような喪失と焦燥が現実感を虫食いにする。それはここに自分がいることの認識を拒むように、自身の内側にあるものが酷く虚ろなように思わせた。

「さてと。今日はここまでにしておきましょう。続きはまた明日……かな。籠野くん、都合は大丈夫？」

「問題ないけど、なんで明日なんだ。今日まだこれからでも」
いいんじゃないか、続く言葉を遮る弓坂の転倒。咄嗟に落ちる少女の体を支えて絶句する。何が起きたのかを理解することができなかった。唯一解ったことは、ベンチから立ち上がった弓坂が突然倒れたという経緯だけ。

「……こういうこと。自分でもびっくりしてるわ。わたしの結界処理……術式を解くことは他とは違うから。なんていうか、わたしのやり方は負担が大きいよ。今日は柄にもなくはしゃいじやつたから、疲れちゃった」

「そうか。まあ、それならいいけど本当に大丈夫なのか」

「平気、気にしないで」

そう言われても。

「本当に大丈夫だから。じゃあね籠野くん、今日は手伝ってくれてありがとう。助かったわ、本当に」

それを別れの挨拶に、弓坂はやや駆け足で離れていく。追いかけることもできたのだろうか、そうしなかったのはその行動に必要を感じなかったから。もしくは遠ざかる弓坂の背中が無言のままついてくるな、と言っているように感じたからかもしれない。

何にしても、今日の活動はここまでで終了。

弓坂が立ち去った後のベンチに、まだ乾き切っていない血の跡が残っていてもそれは、既に俺が気にするべきことではないのだ。

9／赤い夢？

／9

夢を見た。

酷く乾いた夢を。

焼け付くような炎天に曝され、何もかもが赤く染まった世界を見ていた。痛みを伴う熱い風。気付けばそこは火の海。まるで深海のような静謐さと、肌を焼き切るみたいな灼熱の重い寒気。世界は激しい赤の光に包まれて悲鳴を上げる。天を衝くそれは断末魔に似た叫びの声。

そうして悟った。ここは、この世界は燃えている。

太陽の煌めきに照らされているのだと思っていた空は、海に空の青を写すのとは逆に、燃え上がる地上の赤に侵されていた。否、その空だと思っていた場所さえも空でなく、それは厚く黒い雲。炎が街を焼いて作り出した排煙が空であつた平面を征服している。

地表は煉獄。

絶えずどこかで上げられる断末魔。建物が軋み崩壊していく轟音。今、火に包まれた誰かが蒸発した。救いを求める声は水分を奪われて干からびた喉を切り裂き、より致命的な痛みとして跳ね返る。爆発に巻き込まれ、けれど奇跡的に四肢を吹き飛ばすに被害を留めて存命した誰かがいた。その誰かも、十秒間のたうった後で瓦礫に潰された。

赤い世界に、永遠に続く地獄。その中心にいたのは、一人の少女だった。感情のない虚ろな瞳はまるで黒い孔のようで、涙の渴れたその後の瞳に映るのは繰り返し返される理不尽な死の瞬間。彼女はただ、感情の失せた目で世界を見る。

そして小さく呟いた。

「…………ごめんなさい。」

涙も出ない、地獄の中でただ一人。

「…………ごめんなさい、わたしのせいで。」

表情はないのに。

その感情はどうしようもないくらいに泣き叫んでいた。

：

目が覚めるとそこはどこか知らない赤く染められた異郷なんかでは当然なくて、見慣れたいつもの天井だった。初めから夢を見ているのだと解る夢も珍しい。だからこそ、目が覚めたばかりでも思考がはつきりとしているのだろう。

「あれ、起きたんだ。珍しいね」

「来旋……きてたのか」

「きてたのか、じゃなくておはようでしょ。もう、人が早起きして朝御飯作って上げたってのに、なに、その無愛想な態度は」

熱した餅みたいに膨れ上がる白い頬。白のカッターシャツに映える自前の黒いエプロン。モノクロのコントラストを数十の色のグラデーションのような鮮やかさに演出する白い少女。残念なことはその手に包丁を持ったままだという点。これだと寝込みを襲われる寸前に目を覚ましたみたいだ。

あんな、夢を見たことも影響して。

不思議な夢だった。それは夢というよりも誰かの記憶を見ているように鮮明で、肌に焦げ付く灼熱も喉に絡んで噎せ返る黒煙も、死を強制する無慈悲な絶望も一身に降り掛かる雨のように苛烈だった。

目を閉じている間に、まるで別の世界に連れ去られたみたいに。目の前の凄惨な炎熱地獄が幻とは到底思えないくらいにそれは恐ろしく現実的だった。

それ故に、聞こえてくる叫び声はどれも胸に突き刺さって痛い。その痛みはもしかしたら、あの夢の中にいた少女が感じていたものなのかもしれない。確証はないけれど。

——ごめんなさい。

彼女は誰に謝っていたのだろう。彼女は、どうして泣いていたのだろう。あやまっ

「ちよつと、聞いてるの、お兄ちゃん」

「……あ、ああ悪い、まだ寝惚けてるみたいでさ」

「しっかりしてよね、ほら、いっしょに戴きますするよ」

ぱたん、と掌を合わせながら怒り気味の童顔が持ち掛ける。これを拒否するなら来旋の機嫌はこの後でどのような状態になるのかなど考えたくもないので、お姫様のご機嫌が湾曲してしまう前に従っておく。妹に倣って合掌。定型句を二人で口にして朝食に取り掛かる。

穏やかな、そんな朝の風景。

見慣れた……もう何度も体験してきた……日々の、繰り返し。——そのはず、なのに。どういふことかそれを認めている心とは別にどこかで違和感を感じずにはいられない。

コンナ日常ハ偽物ダ。

誰かの声が頭の中に語り掛けているような、奇妙な感覚。何故だろう。目の前にあるのは、いつも通りの朝のはずなのに——。

頭の片隅が痛む。熱を帯びた痛覚が必死に何かを叫んでいる。けれどその叫びは亡者の呻きのようで上手く聞き取れず、連結して回想する光景はピンぼけして色褪せた写真みたいに不鮮明。思い出せるのは赤色の光。暗闇の光に誘われるように、何の抵抗も疑問もなく語りかける声に応えた。——その瞬間を確かに覚えている。誰かが心に語り掛けてきたあの瞬間を。

だというのに、肝心なことは何一つ定まらない。それがいつのころとなのかなど些末。籠野静月にはそれが夢か現なのかも解らないのだから。

「お兄ちゃん？ どうしたの怖い顔して」

「なんでもない。ちよつと考え事してただけだよ」

「考え事？ なにかなー、気になるなー」

身を乗り出す来旋。双色の瞳が好奇の色を湛えてこちらを覗き込んでくる。俺がどんな考え事をしているのかなんて、そんなこと、俺自身が一番気になるっていうのに。

本当に、どうかしている。一週間前から籠野静月の日常には、無視できない綻びが確かに生じていた。

「お兄ちゃんさ、わたしに何か隠し事してるでしょ」

唐突に切り出されて、不意を衝かれたことにより咄嗟の反応ができなかった。それが来旋には尻尾に思えたらしく、一度掴んだ限りは絶対に離さないとばかり確信的な声音でさらに追求を続ける。

「やっぱり、なにか隠してるよね絶対。止めてよ、わたしに隠し事なんて。兄妹なんだから、話せないことなんてないはずだよね？」

「いや、別に隠し事なんて……」

「嘘だ。目を見れば解るもん。なんで隠すの？ ……さては危ないことやってるんでしょ。約束したのにさ、そういうことには首を突っ込まないって」

「危ないことって、例えば何なんだよ」

「ずずず、と味噌汁を啜る。」

来旋は細く開いた異色の目を見せて、

「例えば、郊外のマンションであった失踪事件に関わってるとか」「それは……ない」

郊外の失踪事件。とあるマンションの住人が一斉に姿を消した事件が、今この街を騒がせていた。……そういえばあの事件が起きたのは五日前。俺が弓坂に協力する切欠になった夜の前日だ。

もしかしたらそれにも、法典と呼ばれる存在が——魔術師同士の

戦争が関係しているのではないか。だとしたらマンションの住人、数にして五十数人も人間が一度に姿を消したとしても納得がいくけれどももしも本当にそうなら、いなくなった人達は魔術師の殺し合いに巻き込まれて犠牲になったということになる。ただそこで生活してただけなのに。法典なんてモノの為に殺されたことになる。

だったら、法典なんて存在は——あってはならない、戦争の火種でしかないじゃないか。

「それは、ねえ。だったら何をしてるのかな？」

しまった、罠だった……！

「あのね、わたしはお兄ちゃんが心配だから言ってるんだよ。お兄ちゃん、目を離れたら遠くに行っちゃいそうだから。この街、今は安全じゃないんだよ」

来旋の言うことは、確かに正しい。勿論それはこちらの認識している『危険』とは相違する意味でなのだが、この街が平穏でないことに関しては寸分の狂いもなく間違いない。いつどの瞬間も、この街は戦場に変わり得る。魔術師や協会と呼ばれる超越者による戦争は——その火種、法典が存在する限りいつでも簡単に引き起こされるのだから。そうなってしまえば、こんな小さな街は一日も経たずに瓦礫と死体に埋もれるだろう。

それこそ、夢に見た世界のように。

赤い地獄はいとも簡単に顕現する。

「大丈夫だよ、来旋。心配ない」

……そうだ、心配はいらない。あの地獄が生まれないように、俺は弓坂に協力しているんだ。

誰も悲しまないように。

誰も血を流さないように。

今ここにある平穏な幸福がずっと続くように、例えそれが自らの身に危険を及ぼすと解っていても無視することなどできない。ましてその為に傷つく少女がいると知ってしまっているから尚更。

放っておけばいなくなってしまういそうだから、隣にいたいと思っ

た。……ああ、なるほど。そうなるをやっぱり、俺はこの街がどうかじゃなくて、弓坂絵空だから協力しているんだ。勝手に遠くへ行ってしまうそうなのは、あいつの方だから。

「……無責任。自分で言ったんだから守ってよね。お兄ちゃんにもしものことがあったら、わたし絶対許さないから。死んだって許さない、そうなったらわたしがもう一回殺してやるんだから」

……本気で言ってるみたいないな剣幕だった。これはおちおち死んでいられない。正直弓坂と協力関係にある限り命の保証はないから、来旋の言うことが大袈裟だと笑い飛ばすことも俺にはできない。なにせ前科があるくらいだ。

そういえば——その際の怪我は一週間も経たずに綺麗に回復したのだけ。

「……まったく、世間よりおまえのが物騒だよ、来旋」

来旋が空になったお椀をテーブルに置いた音が、話の読点を打った。

10／鏡岬深紗希？

／10

珍しく、昼休みの教室に鏡岬の姿がなかった。購買に走ったにしてはやけに帰りが遅いし、加えて普段なら訊いてもいないのに申告してくる「購買行ってきます！」宣言がなかった。まるで逃げるように、あるいは教室を出ていく姿を誰にも見られないようにと。こっそり、彼女は姿を消した。

世間を俯瞰するまでもなく、異常と言うならここに転がっている。近頃どうも鏡岬の様子が可笑しい。本人は気取られないように努めているようだが、明らかに纏う空気が違うのだ。気付かないはずなど、なかった。

鏡岬に異変を感じているのは俺だけではなく、御道もまたやはり同じことを思っていたらしい。鏡岬のいないこの昼休みに、唐突に金髪風紀委員長は切り出した。

「鏡岬、このところ毎日剣道部の奴等に声掛けてるんだよ」

「そうなのか？ そいつはまた……なんつうか、健気って言うか。一応訊くけど、あいつ、何でそんなことしてるんだ？」

「……解ってんだろ、訊いてくんな。甚だ面倒くせえけど、一応答えといてやる。あいつさ、毎日毎日、やる気ねえ剣道部の連中を練習に誘ってるんだよ。そりゃあもう、生徒会じゃあちよつとした議題に上がるくらいだ。全国級の剣道少女が、こんな廃れた部にいいのかってな。……あ、結果なんて言わなくてもいいよな」

結果に関してなんて、一応さえ確認の必要もない。この学校の剣道部はそもそも並み程度の実力もないのだ。実力のある選手はいるだけで周囲のモチベーションを上げる場合があるが、それがあまり

にも規格外であるなら話は別だ。高過ぎる壁が与えるのは挑戦心なんかではなくただの絶望なのだから。

とはいえないくらなんでも在籍の剣道部員全員がやる気を喪失するというのは、さすがによくあることとはいえないが。

「本当、なんで鏡岬のやつ、こんな高校受けたんだろうな。中学の時からあいつは剣道の実績持ってたし、推薦も貰ってたはずなんだよ」

「……ああ、そういえばお前ら中学同じだったな」

「まあな。でもどうしても今更な感じがするよな。中学の時だってあいつ、正直部の中じゃ浮いてたし、部員も多くなかったんだよ。その時から俺がたまに相手はしてたけど……なんで今になって他のやつらを練習に誘うのか解らないんだよ」

「おまえに解らんことが俺に解るかよ。鏡岬の考えてるとこなんて端から端まで理解できねえ。……つつても、一個だけ俺にも解ることがあるわ」

なにが、と問う俺に嘆息。御道はバカを見る目をして視線で蔑んでくる。さらに普段にも増して倦怠の色を濃くした侮蔑の言葉を口にした。

「甚だ面倒くせえよ、おまえ。鏡岬がなんで推薦蹴ってここの学校に来たのかなんて簡単だろ。……ま、おまえがそんなことも解らねえから、鏡岬はあんなことしてるんだろうけどさ」

要領を得ない御道の言葉。それっきり黙ってしまった風紀委員長は弁当を平らげるなり自席に戻ってはそのまま電源がオフになったみたいに机に突っ伏した。一人残された俺は、とりあえず目の前の弁当を空にして考える。

鏡岬が推薦を蹴った理由。……そんなもの、本当になんの想像もつかないわけがない。もしかしたらと思っても、ただそれを受け入れられないだけだ。だってそうだろう。もしもの想像はできたとしても実際にそれを現実として認めるのとは訳が違う。

ましてや、友達と知っている誰かが自分を好きでいるかもしれない

いなんて。

考えている自分自身を受け入れたくない。

昼休みにそんなことがあったからだろう。

放課後、鏡岬が俺を練習に誘うことはなかったなんて、本来ならば気にも留めない些細な普段とのズレが気になって校舎を練り歩いてみた。彼女がどこにいるかも本当は予想できていたのに、気付かない振りをしてわざと遠回りするようにゆっくりと。

あるいは俺は、ただ怖かっただけなのかもしれない。

「もう勘弁してくださいよ、先輩」

一年の声が聞こえてくる。

丁度二年のフロアと一年のフロアとの中間地点に当たる階段の踊り場だった。

見たくないと思いつつも片隅で認めていた現実。明るいことが取り柄な、朝から晩まで賑やかな少女は普段の面影を感じさせない悲痛な表情で自分よりも学年が下の人間に懇願していた。何を。そんなことは決まっている。御道の言っていたことを加味するまでもなく、それは毎日のように俺が頼まれていたことをそのまま後輩にしているだけなのだ。

「すいません。正直、先輩とは剣道できません」

違うのは、答える言葉。

感情もなければ、慈悲もない。

少女はただ暗い目をして、それでも平然と努めるために笑顔を作る。鏡岬深紗希にとってのそれは、ある種の自己防衛だったと俺は知っている。なのに。

「先輩一人でやってくださいよ、ずっと」

その防衛さえ枯れた、悲しい目をして、少女はそこに取り残された。廊下に響く無情の声。一年数人は感情もなく頭を軽く下げて去っていく。その後ろ姿に唇を噛んだ鏡岬がなにを思っていたのかは知れない。拳を震わせて立ち尽くす姿が走り出して食い下がる先が予想されて、咄嗟に呼び止めた。

「鏡岬」

不意打ち気味の呼び掛けに驚いた様子を隠しきれない、隠す気の窺えない鏡岬が振り返る。

「籠野くん……。あっはは、恥ずかしいところ見られちゃったかなー」

「おまえ、毎日あんなことしてるのか」

「うん、まあね。あたしも一応部長だから、他の部員に練習参加を呼び掛けるのは義務みたいなものなんだよ」

繕う笑顔が痛々しい。

だから俺は、頭に血が上って考えなしに言葉を紡いでいた。

「なんで俺には言わないんだよ。普段ならおまえ、真っ先に声掛けしてくるだろ。なんだって急に――」

自分で言っていて、答えなんて解っていた。だから鏡岬がそれを遮るように声を上擦らせても何ら驚くことはない。一つだけ、そのときまで解らなかったのは鏡岬がどんな思いで俺の言葉を途切れさせたのかだった。

「籠野くんは、部員じゃないから」

もう見慣れた、歪な強がりの笑顔で少女は言う。

「あたしの我が侘に付き合わせるのはいや」

「……なにを、今更そんなこと」

「今更になるまで、そんなことにも気付けなかったんだ、あたしは」
発言の結びに咲いたその笑顔だけは、恐らく心の底から出た本物の感情。自嘲という名の悲しい心が作り出す少女の微笑み。それがどこか自分を拒絶しているように思えて何も言えない。俺はただ鏡岬が背中を向けるのを黙って見ていて、肩越しに話す後ろ姿をもう一度呼び止めることはできなかった。

その悲しい声が言う。

「ごめんね。あたし、籠野くんに押し付けちゃって。練習、無理矢理付き合わせて、ごめん」

「……別に、そんなこと。なんだったら今日もこれからいっしょに」

続きが言えなかったのは、首を捻ってこちらに向けた鏡岬の目が見たこともないくらい冷たかったから。

「それは駄目だよ。だって、籠野くんの隣は弓坂さんだから。――あたしがずっといたかった場所はもう、とっくに空いてなかったんだ」

言い残して、鏡岬はとうとう振り向かない。剣道場に向かうならむしろ遠回りになるというのにそれに構わず階段を昇っていく。解ってはいた。わざわざそんなことをする理由は俺を避けてのことなのだと。ならば何故追いかけることなんてできただろう。

俺は漠然と、階段を降りていった。

11／弓坂絵空？

／11

弓坂と落ち合うのは約束も打ち合わせもなかったが校門前になった。

本当ならば俺が先に行って待っているつもりだったのだがよく考えれば色々と寄り道をしていたこともあって元よりそれは叶わぬこと。生徒ならば帰宅の際に必ず正門を通る為、ここで待っていれば大概捜している人間に会えるとは弓坂の方も気付いて当然ということで。

待たせた自覚はないが実質待たせてしまったのだろう、と解ってしまうほどに明確な苛立ちを表に出した弓坂絵空が門に凭れ掛かってこちらを睨み付けていた。

思わず身がすくむほど。

それはそれほたいそうおそろしいようだった。

「えっと……遅くなった、わる——」

い、と続ければ怒られる。それが弓坂との約束だと思い出して、
「——待たせたな弓坂」

片手を挙げて謝辞の代わりにする。これくらいなら問題にはならないだろう流石に。そう思いながら駆け足で少女の前に参じるなり、俺は弓坂の第一声を聞くより先に背後から乱入してきた別の声音を聞くことになる。

「弓坂絵空さん」

凜として、落ち着いた声。振り返らなくても誰のものが瞭然だったがそれでも確認せずにはいられない。音が同じでも口調は明らかに、俺の知っている棺継来旋のそれとは異なっていたから。

果たして。

後ろを見ればそこには夕焼けを従えた白い少女が立っていて、双色の瞳を明らかな敵意の滲む眼光で彩っていた。それは兄でありながら見たこともない来旋の姿。腕を組み、悠然と立つ姿勢には威圧感さえも感じられる。いや、威圧というよりも制圧。周囲の環境、空も大地も雲も夕日も全て、森羅万象を支配するかのような絶対感を纏って来旋は言葉を続ける。

「弓坂絵空さんですね。失礼ですが、兄さんとなにをしているんですか？　いえ、これからなにをするつもりですか」

弓坂は来旋に対して発言しない。黙して言葉を聞き入れ、そしてやはり黙ったまま静かに白い少女を見据えている。……いや、それはもしかしたら逆なのかもしれない。弓坂が来旋を見ているのではなく、来旋が弓坂に魅せている。

引き込まれるような瞳の色が一度、こちらに向けて一瞥。黙っている、と脅されている気分だった。

「単刀直入に言いますが、弓坂絵空さん、これ以上兄さんには関わらないでください。貴女は必ず、兄に災厄を齎します。貴女なら解るはずではないですか？　自分が籠野静月の側にいることがどういう結果を招くか」

「……………貴女、もしかして」

「最後です。もう兄さんには近付かないで」

押されている弓坂を見るのは初めてだった。とはいえ俺が知っている弓坂の姿など数があるわけではない。これまで過ぎた時間と見てきた側面から、来旋と対峙する彼女の様子がはっきりとした異常であるということだけが歴然としていた。

会話——というより来旋の一方的な要求——が途切れたところで意識が戻ってくる。来旋に戦く理由などないはずだ。蚊帳の外から傍観していた態度から一変して口を挟む。

「来旋、なんのつもりだよ突然。可笑しいぞおまえ」

「黙ってて。これはお兄ちゃんの為にやっтерることなんだから。こ

の際だからはっきりと言っておくけど、この女と関われば近い内、必ず酷い目に遭うから」

「だから、なんでもまえがそんなこと」

一瞥。来旋の灰色と群青の眼光が細まる。不覚にもそれだけで俺は発言力を失ってしまった。まるで蛇に睨まれた蛙。それは生物として本能的に恐る何か得体の知れない『力』による制圧だった。信じられないことに、視線だけでこちらの意識を縛り付けてしまった少女は、あろうことか俺の妹なのである。

来旋は何も言えなくなった俺に対して興味をなくしたようにそっぽを向いた。視線の先には弓坂絵空。その少女は何故か、先刻までの無関心な沈黙とは違う無言で来旋を見据えていた。表情に表れているのは驚愕、もしくはそれに準ずる何らかの感情。

「解りましたか、弓坂さん。今後、兄さんには近付かないでください。貴女自身理解しているはずではないですか。貴女のような存在が、誰かの傍にいてはならないと、そんなことくらい」

「……それは、命令かしら。それとも警告のつもり？」

「いいえ。わたしはただお願いしてるだけですよ。——ねえ、お願いだからこれ以上彼を不幸にしないで」

二人の言葉が、そこで途切れる。後は互いに視線を交えるだけ。沈黙は決して平穏なんかではない。むしろ音がない故に直接感じられるものがある。今の場合それは、夕の風に乗る静かな殺意と敵意の混濁。肌に生暖かくも鋭く張り付き絡み付きながら焼き付いてくる抜き身の刀身染みた感情の流れ。

およそ見ているだけで気の滅入りそうな状況下で、先に沈黙を破ったのは弓坂絵空だった。

弓坂は小さく溜息を吐いてから言う。

「心配しなくても、用が済んだらさっさと消えるわよ。彼の前からじゃなく、この街からね」

一瞬、なにを言っているのか理解が遅れる。主語を欠いたその発言が誰のことを語るのかなど考えるまでもなく、思考することすら

許されぬ瞬時に導き出される解答を否定することさえも叶わない。俺が口を挟む間など存在せず、弓坂は淡々と続けた。

「なんにしろ、ここもそろそろ引き上げ時だったからね。短かったけど、アレに見つけられたんだから仕方ないわ。——そうでなくても、もう犠牲を出しすぎたから。火種はまた別の場所に身を隠すわ」
今の一瞬、弓坂は確かに俺を視界に収めていた。

犠牲、それはつまり魔術師の争いに巻き込まれた人のことを言っているのだろう。先週の死者もそうであるならば、これは推測でしかないが消えたマンションの住人。そして、俺の知り得ないところで運悪く闘争に巻き込まれた誰か。確かに、もう既に無関係な人間を何人も渦中に引き入れているのは確かだった。その中の一人に、籠野静月が含まれていることもまた事実なのだ。

今度ははつきりそれと解るくらいに明らかに、弓坂は俺に目を向けて言う。釈明のような、それとも本人にとっては贖罪のつもりなのか、注意して見れば解る程度に強張った弓坂がそれを表明した。
「この街に張られた結界は排除していく。最低限の後始末は、ちゃんとつけるから」

あくまでも、彼女にとってこの協力関係は結界の解除までと、その瞳が語る。そこには、彼が彼女を守りたいと心の隅で願う想いの入り込む余地など皆無だった。だから静かに受け入れるしかなく、全ては今にして必定の未来。弓坂絵空は本来ならば日常（じじく）にいるはずのない空想の存在——魔術師なのだから。籠野静月が彼女を繋ぎ止める要因になどなるはずもなかった。

「だからそれまでは彼に協力してもらうわ。確かに、エゴだってことは解ってるけど、今は、私も彼に手伝って欲しいと思ってるから」
「それは自らの罪滅ぼしですか？　まあ、なんでもいいわ。くれぐれも先の言葉に嘘がないようにお願いします。それと——自身の犯した罪を、努め忘れないよう」

敵意と、そして殺意を孕む双色の視線。そうして白い少女は最後、弓坂絵空から目を逸らす。まるでそこには何も無いと言うほどに、

先刻までが嘘のような徹底した無関心を貫く。来旋は立ち去る前に一度だけこちらを向き直り、俺の知っている柔らかな表情を戻して言った。

「じゃあ気を付けてね、お兄ちゃん。くれぐれも危険なことはしないように」

その日もやはり、淡々と街中を歩き回って式を解除することに終始した。昨日と違うことは、それが本当に淡々としていたこと。まるで行動を設定された機械のように、一つのことだけを繰り返していた。原因など考えるまでもない。四時間近く歩き回ったところで弓坂のキャパシティが限界に達し、いつかの公園に落ち着いた。

「さっきの話、本気なのか」

買ってきた缶コーヒーを手渡しながら訊いてみる。弓坂は感慨もなく受け取った茶色い缶を一度軽く放って、受け止めた手を見詰めてから答えた。

「勿論、この街には迷惑を掛け過ぎたから。これ以上、魔術師同士の争いで犠牲が出るのは避けないといけない。わたしは元々ここに……どこにもいてはいけない存在なのよ」

「その、『わたし』ってのは魔術師のことか？」

「他の意味がないわけではないけど、それもあるわね。魔術は世界に異端とされた学問だから、現代の文明に溶け合うことは許されない。それは他の誰でもなく、人間という霊長が幾億の血を流して決定したことだから、逆らうことが出来ないことよ」

「……郊外のマンション。あそこで起きた集団失踪も魔術師に関わってるんだよね」

どうしてこんなことを確認してみたくなったのか、それは解らない。

この質問には、弓坂は答えを窮するように視線を逸らした。間を空けるためにか、コーヒーの缶を傾ける。一口含んだ液体が喉を流

れ落ち、心底不満気な表情を作り出すと、

「これ、微糖？ わたし、コーヒーはブラックしか飲まないんだけど」

「え、ああ、悪い次から気をつけるよ」

……そもそも、次があるのかさえも怪しいことながら、俺はそんなことを言っていた。

いや、待て。

今はそんな話をしているんじゃない。

聞かなくちゃならないことがあるのに、話が脱線したままでは終わらせられない。

弓坂、と呼びかける。弓坂本人は意図的に話題を挿げ替えるつもりでいたらしく、こちらの声音が場に合わない重苦しいものであることから心意を読み取って溜息を吐いた。緩んだ目元を再び鋭くして、魔術師としての弓坂絵空が口を開く。

「その通りよ。あのマンションは、停電の夜に戦闘があつた場所だから」

停電の夜。それはあの夜の前日。鏡岬と御道が口を揃えて証言していながらも俺の記憶には残されていないその日。……仮定として、漠然と予感があつた。それは本当に根拠など何一つ存在しない、ただの予感。

俺の記憶には停電の夜がない。停電のことだけではなく――夜そのものの記憶が。そして消えたマンションの住人。原因が魔術師の争いにあるのだとしたら。俺に記憶が残されていないのは、もしかすると、そのことに関係しているのではないかと、不意に思ってしまった。

だが、確かに根拠の無い推論だとしてもそれならば納得が行く。結界に過剰な反応を起こすこの体、頭痛や目眩と共に脳裏を過る閃光のような光景。痛みが記憶の残滓だとしたら、体が類似した状況に痛覚に触れて反応しているのならば。辻褄は合っているのだ。

「……本当に、覚えてないんだ」

弓坂が溢す。

「あの夜と同じ、マンションの住人が全員人形にされた。マンションの内部に結界を張って、住人達を支配したのよ。失踪したのは魔術師が自らの行使した魔術の痕跡を消すために排除したから。解る？　それが私のしたこと。何の関わりも持たない人達を巻き込んでしまったのは私なんだから。私はそこにいるだけで周囲に災いを齎す存在なのよ」

「だけど、それはあくまで他の魔術師がやったことで、おまえに非はないだろ。この争いを終わらせれば、おまえがいなくなる必要はない」

「言ってるじゃない。私は存在そのものが戦禍の火種なんだって。私がいればそれだけで戦争の原因になる」

「だから——、なんで」

言葉が続かない。

……不思議だった。何故自分がここまで食い下がるのか。思えば夕方弓坂が来旋の前でそれを言ったときから同じことを繰り返していた。何度もその議題で思考を巡らせていたのだ。この戦いの罪は、どれだけ弓坂に降り掛かるのだろう。そんなことばかりを。

そうだ、だから認めなければならぬ。

思ってしまった。この場所から立ち去ると口にした少女に。

まだここにいて欲しいと、そう、感じてしまった。今の日々に終わって欲しくないと、弓坂絵空の隣にいられる今が永遠であればいいと。願う心に気づかないまま今に至ってようやく自覚する。——俺は、弓坂絵空を失いたくないと願っていた。

「……なんで、おまえ、魔術師なんだよ」

魔術師でなければ、共にあることができたのかもしれない。そんな、些細な空想の仮定。

弓坂は自嘲気味に微笑んで、自らの運命を呪うような諦観の口調で言う。

「わたしは、魔術師である以外に許されなかったから。そう在るし

かなかった。ただそれだけ、悲嘆もなければ絶望もない。だから、
隣敏も同情も要らない。わたしは私であり続けるために、魔術師で
あることを決めたから」

そう、迷いのない瞳で言われて何が言えるのか。何も言えやしな
い。選ぶべくをして選んだ。他に選択肢がなかったから、だとした
ら、在るべき道が一つなら間違えるはずもない。これが弓坂絵空な
のだと。そうして彼女は魔術師として生きるしかなかったと、語
る言葉は淡々と『普通に生きること』を許されなかった運命を告げ
た。

「未練がない訳じゃない。犠牲にしてきたモノへの償いは永遠に叶
わないから。それでも、私がここにいればより被害は膨らんで犠牲
は積み重なる。なら、今の状態のままいなくなるのが得策でしょ。
いつだってそうしてきた。今度も、これまで何度もあってこれから
何度も繰り返される循環の一部でしかない」

「……弓坂、あのさ」

夜の公園は驚くほどに静かだった。風の音さえしない、聞こえる
のはただ鼓動の音だけ。自らの内に打ち鳴らされる心音が高く響く。
それを聞きながら気付いたことがあって、そんな自分に後悔してい
る自分もいた。

本当ならば、もっと早く気付いて可笑しくなかったのだ。なにせ、
さつきから頭の中にあっただのはそれだけだから。弓坂の話聞きな
がらも、意識はそっちにばかり傾いていた。——そう、ずっと、同
じことを。

心のどこかで誰かが叫ぶ。

何度も何度も同じことを、そればかりを。呪いのように、暗示の
ように繰り返す。

——モノダ。

「籠野くん……？ え……ちょっと、なに……して」

自分が何をしているのか。行動に遅れて頭がそれを理解する。腕
の中には弓坂絵空がいて、こちらと同様に状況が理解できていない

様子で混乱していた。慌てながら、腕を振りほどいて抜け出そうとしている。

——逃ガスナ。ソレニ自由ヲ認メル必要ナドナイ。ナゼナラ。その、存在にそぐわない小さな体を強く拘束した。

「離しなさい……っ。籠野、くん……落ち着いて……貴方ちよっと、可笑しい」

可笑しい、その通りだ。

何故ならとつくに籠野静月はどこかで壊れていたのだから。

——そうだ、あの夜。目を覚まして見つけた彼女に心を奪われた。比喻ではなく本当に、まるで空っぽになってしまったような気分を味わった。

何度も、頭の中では同じことを繰り返していた。

魔術師をどうやって倒すかなんかではなくて、どこかそれとは正反対の意味を持つ事柄を。ずっと、どうすれば弓坂といっしょにいられるかを気が狂ったように考えていた——

どうすれば、彼女を自分のものに出来るのかを。

——ソレハ許サレナイモノ。補色ナキ孤立シタ異端ノ色。

————ソノ色ハ、俺ノモノダ。

「いい加減に……しなさい……！」

渾身の力で撥ね飛ばされた。腕から逃れた弓坂はこちらとの距離を空けると、赤い瞳で睨視を浴びせてくる。そうされることでようやく、俺は自分がしていたことを思い知った。

正気ではない。

狂気に捕らわれた意識の錯乱。

ここに至るまで、正気を失っていた。

自己が抜け落ちたように、衝動だけが意識の内を満たしていた。

「……悪い、弓坂。どうかしてた」

本当にどうかしていた。謝れば怒られるかもしれないと思ったけれど、謝らずにはいられない。言葉は自らへの戒めとしても口にししておく必要があったから。

「……ごめん、弓坂、俺……なんていうか」

なんと言えいいのか判断がつかない。そもそも頭が上手く回らないのだ。思考が弓坂を直視するだけで麻痺する。たったそれだけで正常な判断のできない暴走機関に脳が組み替えられてしまう。

「……間違い、だから」

そして、混乱を裂く少女の声。

弓坂が静かに口にする。その声は明らかに、籠野静月を遠ざけ、拒絶するものだった。

「今のは間違いだから……籠野くんの感情じゃ、ないの。私の魔術は世界に共感するものだから、変に感化されちゃっただけよ。……貴方が、誰かが私に好意を持つなんてそんなこと、有り得ない。私は疎まれ、蔑まれるべき存在だから」

「それは、違う。俺は——」

「違うわいよ。……いい加減にして。貴方が私を好きになるはずなんてない。そんなのは錯覚よ。本物じゃない偽物。内側から生じた訳じゃなくて、外側から当てられただけ。だって貴方にはそんな感情——」

捲し立てるように言って、最後に口籠る。

弓坂は黙って、その先を続けることなく俯いた。

「とにかく……変な気は起こさないで。貴方一人に問題があるわけじゃないのは確かだから。私にだって、私の魔術にだって原因があるの。だから——静月のその感情は、自分のモノじゃない」

最後に心底バツの悪そうな顔をして、弓坂は決定的にこの関係に線を引く言葉を口にした。

「間違えないで。貴方はわたしが好きなんじゃない。私の魔術に感化されただけ。その感情は、決して本物じゃないのよ」

こん、とコーヒーの缶をベンチに置いた。音からしてまだ半分は中身が残っているだろうそれに思うところはないように、弓坂は数時間前に街を歩いていたときと同じ歩調で公園の出口に向かう。擦れ違い際。自分の肩に隠れて顔を見ることのできない弓坂が別れを

告げる。

それは無理に平常を装うような、さっきまでの異常が幻だったと否定するみたいな声音で、

「また明日ね、籠野くん。この調子で行けば明日にでも、この街の結界は潰せるわ」

再来する頭痛と共に、無情のまま今に幕引きを確約した。

12／法典？

／12

弓坂と公園で別れた後、ただぼんやりと街を歩き回った。

目的などなく、あるいはこのまま家に帰らないところこそが目的だったのかもしれない。それは、夕方に回ったルートを再度辿る、そこになんの意味も持たない行為。思考は停止していたといっている。何も考えられない状態、半ば忘我したままあてられたように歩き回る。

何かが、絶望的に欠けていた。そんな気がする。

間違いだと、弓坂は言った。……その通りだろう。一時の気の迷いにしろ、あの瞬間の籠野静月は異常だったと、それは認めるしかない。言葉を当てるならば、それは好意ではなく妄執。どこから衝動が聞こえて、それに抗えなかっただけ。

おおよそ、人間の持つ感情とは遠く掛け離れた衝動。

何がしたかったのか。何をしようとしたのか。そのどちらも解らない。

足取りは不確かでありながら、一通り夕方の道程を終えた後に定まっていた。

何故か吸い寄せられるように。別の意思が体を操っているように。そうして辿り着いた――件のマンション。

夜空を突き刺すように伸びた円形をした新築のそれを前にして、自然と脚が止まった。

――同時に、いつものあれが襲ってくる。

ぞくり、と背筋に駆け抜ける悪寒。眩暈に伴う吐き気と頭痛。立っていることさえも困難な錯乱状態。あの夜、道で弓坂に声を掛け

られる前に感じたのと同じあれが再び精神を揺らす。それも、今までにないくらいに強烈な頭痛だった。

「あ……………うぐ……………」

堪らず膝を突く。

……こんな、こと。弓坂と式を解いて回っているときには感じなかったはずなのに。

ふと思い出す。俺が頭痛を覚えたのはいつか。それは起動前の術式に対してではない。式単体になら、軽い眩暈程度の不快感だけでやり過ごせた。頭痛を伴うのは、これで二度目。一度目は――結果の発動後。

「……って、ことは」

このマンションの周辺、あるいは建物の内部に結界が張られている。

――止めろ。

住人全員が姿を消したマンション。弓坂は、その原因を魔術師の闘争だと明言した。

だとしたら。

――離れろ。今すぐに。ここから。

今更、この場所に結界が張られる理由はなんだ。

――考えるな、すぐに逃げ出せ。

結界は、弓坂に敵対する魔術師が使う魔術。それは周囲を殲滅する為の力。

それが今この場所に、形を成していることが意味するそれはつまり。

――ここにいれば、殺される。

マンション内部で、今まさに、弓坂絵空が戦っているのではないか。

頭部に一層激しい痛み。眩暈。世界が揺れている。点滅する赤の光。また、あれが来る。強い赤色の輝きが網膜を焼き、同時に激しい熱が全身を侵すあの感覚。ちかちかと点いては消える赤い光景。

誰かが何かを言っていて、誰かが何かを叫んでいる。その声に応えるように、意識は抗えず吸い寄せられて――

「行か……ないと」

帰らないと。

それは、どこに。

決まっている。

帰る場所なんて一つしかない。

早く、家に帰らないと。

どこかで語りかけてくる衝動が遂には自我を捻じ伏せ、足取りは依然覚束ないまま、目指すべき家とは反対にマンションの中へと歩みを進めた。その時、頭痛の治まった意識にはどう問いかけても引き返すという行動が見付からなかった。

十

マンションの内部に至る勝手は、まるで住み慣れた場所のように体に記録されていた。

エレベーターに乗り込むと、指先が押し込むボタンは予め決められていたらしい。目的のフロアを示す数字に直ぐ様明かりが点る。

重力が抜ける、体だけが同じ場所に留まるような一瞬の浮遊感の後、エレベーターは数字の階へ昇っていく。

誰もいない空間。

故に四方を壁で囲まれた箱が目的地に達するまでを阻む障害は何一つない。機械は与えられた役目を全うし、内部にいる人間を所定の場所に送り届ける。そうして数分も掛からない内に、到着を告げる不気味な機械音が鳴り響いた。

左右に開かれる鉄の扉。高級感を出す為か、赤塗りの絨毯が敷かれた廊下。窓の穿たれたクリーム色の壁。差し込む月明かり。廊下

に満ちるのは温もりのない無情の光。誰もいない。そう、誰もいないのだ。静かであって当然。賑わうことなどない。

今更になって思う。どうして自分はこんなことをしているのか。解らない。けれど、体はそれを知っていた。

まるで当然のように、脚は廊下を歩く。エレベーターの扉が閉まり、それで逃げ場が封鎖された。踏み出す毎に沈む体が浮遊感を錯覚させる。意識は朦朧としているのに、この時の足取りだけは明確。迷うことなく決められた道程を踏み外すことなく進んでいく。

そうして辿り着いた扉の前。

左右両隣の部屋と何一つ変わらない扉の前で体が止まった。

ぼんやりと、冴えない意識が焼けるように覚醒する。

頭を離れていた自我が突如として元の場所に戻り――瞬間、抗えぬままその光景を瞳が受け入れた。

有り得ない、と、再来した頭痛さえ感じないほどにただ衝撃を否定した。けれど眼球に捉えるその標札に記された名前が変化することとはなく、繰り返し夢想を疑う度に頭痛は酷くなっていく。

こんなモノは偽りだ、と心が叫び、

これこそが真実だ、と体が訴える。

二つの異なる主張は互いに摩擦し合い、削り合い、磨耗する。それが悉く籠野静月という存在の『色』を擦り減らして行き、結果激痛となって体と心を蝕む。抗えない。頭の中から鉄槌で頭蓋を殴打されているような痛みと揺れ。眩暈に伴う吐き気。

痛い、なんてものじゃない。

それは痛覚としてではなく、もっと別の何かで。

籠野静月を際限なく削り取っていった。

「あ……………があ……………う」

耐え切れずに頭を抑えて倒れ込む。

重力の感覚は、とうに失せていた。シートベルトなしで延々と回転し続けるジェットコースターに乘せられているみたい、上も下も右も左も混沌と入り乱れる強烈な浮遊感。床が深く沈んだ気がす

る。天井が圧力を伴って降りて来ている気がする。

予感するのはただ一つ明確な、己の破綻と崩壊。

死とは異なる、内部がぐちゃぐちゃにされて分け隔てが消え去り成型を失うような、そんな感覚とそれに伴う恐怖と絶望。原色の点滅が網膜を焼く。鼓膜を打ち付ける超音波染みた誰かの声。呼んでいる。その声は呼んでいる。呼んでいるのは一体誰で——呼ばれているのは全体誰なのか。

——共界^{フクセス}”

赤い影が呼びかける。魂を掌握するような、絶対的な韻を響かせて。

砂嵐の向こうに霞む、蜃気楼みたいな遠い記憶。埃を被って、霧に覆われる果ての光景。

赤い少女が手を伸ばしている。

少年は、残された命を削って少女の手に触れようとして——

「懐かしいか、人形」

追憶を切り裂く、冷え切った声が夜のマンションに流れた。

その声を聞いた途端に乱れていた意識が纏まる。というよりもばらばらだった感覚が無理矢理一つの場所に集められた気分だった。生命体としての本能が、自己を結束しなければならないと判断したからこそ。——つまり、その存在に意識を集中していなければ自らが破壊されると、声を聞いただけで思わされた。

依然として続く頭痛に片目を閉じながらも、反対の目をどうにか抉じ開け直視する。

黒く伸びた影を辿って行き着く場所。距離にして十メートル以上も離れた位置にいる存在に、音だけで生命を揺らされた。その絶対的存在感。揺らぐことのない、周囲を統べる覇気を惜しげもなく撒き散らす男。

黒い外套を纏った男だった。

全身を包む黒の装束でありながら、男の短髪は白銀。鉄のような鈍い輝きが、黒よりも深い混沌を主張する。黄鉛色の瞳は呼吸も同然に放つ殺意に相俟って、その視線は直視したものに死を予感させるに十分。研ぎ澄まされた、その鋭利な殺意。無駄のない、一瞬でも気を抜けば四肢を断裂されてしまいそうな危機感。

それに、俺は見覚えがあった。

直接記憶に留まっているわけではない。

けれど、肌で感じるこの脅威は一度目ではないと確かに断言できる。だから体は知っていた。この者に出遭ってしまったことが運の尽きであると。生きたいという当然の願いは叶うべくもなく、逃げ出そうとさえ思えない。

絶対。

黒い絶望の影は、その一言に尽きる立ち姿でそこにいた。

「……………なんだ……………おまえ」

動かない体。

痺れる関節。

立ち上がれないまでもせめて、膝立ちの状態にまで持ち直す。視線には申し訳程度の敵意を籠めて、この圧倒的な存在に飲まれて潰されないようにと張り続ける。

こちらの質問に対し、男は然も当たり前のように自らの名乗りを上げた。

「魔術師だよ、おまえと同じだ」

「……………俺は、魔術師なんかじゃ、ない」

は、と男が笑いを零す。

そんな冗談はこれまで聞いたことがないともいうように、溢れ出した哄笑は空間を震撼させる。

「なにを馬鹿なことを。貴様のその在り方、その存在が魔術師のそれではなくてなんだと言うつもりだ」

「どういう……………意味だよ」

訳が解らない。

男の言っている意味を、その意図を欠片ほどにも掴み取ることが出来なかった。

魔術師。

そんな超常の存在と称されるような理由を、俺は持ち合わせていないはずだ。この身は凡庸な、日常に染まった色に満たされている。魔術師などとは比べようもない。条理の内を出ることなどあるはずもない、そんな――

「理解していないのか、それとも記憶がないのか。どちらにしても、それは貴様の行使した魔術の結果ではないということだな。なるほど、中身が伴わない空人形は、さらに四肢を糸で操られる玩具であったか。これは滑稽だ」

「……何の用だ、魔術師」

こいつの言っていることは何から何まで訳が解らない。解らない、はずなのに。この男の言葉はいちいち突き刺さって無視できない。聞いていれば、それだけで壊れてしまいそうだった。だからわざと口調を強めて問うてみる。敵対すれば滅びるのは自分の方だと解っていないながらもそれでも、出来得る限りの敵意を載せて黒い魔術師を睨み付けていた。

銀髪の男は、俺の強がりにも似た精一杯の敵対姿勢を嘲笑い、あくまでも自然な振る舞いの中に殺意を溶け込ませる。両手を天秤の皿のように持ち上げる、その無防備な姿勢すらも直ぐ様こちらの首を撥ね飛ばせることを如実にアピールしていた。

一歩。

たった一歩魔術師が踏み出せば、それだけで俺の体は灰になってしまうのではないかと、正面から対峙するこの状況では思えてくる息をするそれだけで、肺がきりきりと痛んで心臓が早鐘を打っていた。

だがその緊張は、呆気なく終わりを告げる。それはやはり、一触即発の空気を充満させる黒い存在により打ち破られることになった。「そう構えるな。少し話があってここまで来て貰っただけだ。有り

難く思え、人形。この結界はおまえに共鳴する様に式を組んだのだぞ」

「なにが目的か訊いてるんだよ、魔術師」

「無駄話を挟む余裕もないか……つまらん人形だ。いいだろう。率直に言う——『法典』をこちらに渡せ。俺の要求は、それだけだ」

「なにを……馬鹿なこと、言って」

欲しいと言うならくれてやる。だが、なぜ俺にそんなものを要求するのか解らない。『法典』と呼ばれるモノは魔術師の悲願にして叡知の結晶。だとしたらそんなもの、俺が持ち合わせている訳がない。魔術師でないこの俺が、『法典』なんて超越した奇跡を所持しているはずがないことぐらい、簡単に解るはずではないか。

「なるほど。ここまでくると人形どころか道化だな。あの女に何も聞かされていないとは」

「何が、言いたい」

ふん、と鼻を鳴らした魔術師は、続いて思案顔に表情を変化させる。この状況が飲み込めていないのは俺だけではなく、あの魔術師の方も同じであるらしい。だが少なくとも、手持ちの情報量は向こうの方が多いこと、それは確か。噛み合わない歯車の修正が出来るのは、この場で唯一そこにいる異常だけだった。

やがて、黒の魔術師が唐突に切り出す。

「『法典』とは即ち、世界の『これまで』と『これから』を記録した概念だ。魔術とは世界の記録をなぞり、その神秘を使役する行為故に我々の最終目的は万物の記録といえるのだ。魔術師であるのなら『法典』を求めるのは必然。不思議には思わないか。何故、こんな辺境の街でそのような神秘を巡る争いが起きているのか。明らかに舞台として不足ではないか」

……不覚にも、言われるまでそんなことは考えもしなかった。『法典』の争奪をこの街でする必要なんてない。そもそも『法典』は神話の概念に等しい存在だと弓坂は言った。そんなものを奪い合うこと自体が元より道理になっていない。曰く、魔術とは文明に閉鎖

された学問の名であると言う。奪い合う対象などどこにもないのに、学問の探求者が二人殺し合う理由なんてあるはずがないのではないのか。

「否。『法典』はここにある、この地にだ。教えてやろう、人形。『法典』とはおまえのすぐ近くにあるモノだ。何故行動を同じにしているのかは知らんが、おまえはここ数日の間かなりの頻度で『法典』と共にあった。その様子ならば大方、俺の結界に鼻の効くおまえを利用していただけたのだろうか」

「……ちよつと、待てよ」

さつきからこいつ、なにを言ってるんだ？

魔術師は笑う。歪に口元を引き上げて。至上の秘密を口に出すことに快楽するような、そんな表情。

男を取り巻く殺意すら朧に霞ませるほど全面から染み出す内面の悦楽感。

全力で否定した。不意に浮かんだ。その仮説を。

まるで、こいつの言い分では『法典』が――

「弓坂絵空こそが、魔術師の悲願――人類の滅亡を司る因果。あれこそが『法典』だ」

聞いてはいけないことを、聞いてしまった。

「……嘘、だ。そんなこと」

口に出して否定しても、それは戦慄するほどにぴたりと納得の行く設定だった。弓坂自身が『法典』だとしたら、この地で争いが起こる理屈にも当てはまる。弓坂が結界の廃除に拘って、決して魔術師そのものを倒そうとしなかったこと。

これ以上この街に迷惑を掛けられない。

弓坂が、そんなことを言っていた理由も全て説明が付く。

「あれは存在そのものが災いの根源なのだ。『法典』が地上に存在する限り魔術師は奪い合い、殺し合う。その度に周囲は超常の元に

滅びを辿るのだ。そうして幾つもの街を、幾千もの人間を殺してきた。戦火に焼かれた者も、刃に身体を串刺された者もいる。あれが存在していれば、この先も犠牲は増え続ける。――誰かが、それを手中に収めるまではな。弓坂絵空という『法典』は、単独では周囲に破滅を齎す災厄でしかないのだよ、人形」

何か、不思議な気分だった。

今はただ、弓坂が『法典』だとかそんなことはどうでもよくて、一つだけ。

「……れよ」

ことの真偽など、どちらでも構わない。そんなことは後回しだ。些細なことだと思えるくらいに、今はもっと別の感情が色濃く頭の中を満たしていた。激情に脳漿が沸騰する。『法典』、魔術師、そんなものは委細関係ない。

この時はただ。

目の前にいる魔術師が――弓坂を貶めるこの男が、どうしても許せなかった。

「黙れよ、おまえ」

恐れは憤りのドーピングでどこかに消えた。

頭痛だけは引いてくれないが、今はそれぐらいがあって丁度いい。このまま感情に任せて動けば、自分が何をするか解らないからだ。自己の限界を超えた暴走を抑制するのは、理性ではなくこの痛み。肉体への抑止を解除して、今は唯一激情の色に意識を預ける。

不可能などと思うことはない。

何故ならこの身は、一度その奇跡を為し得たのだから。

意識を集中する。

外界ではなく、己の内へ。遙か彼方を遡り、世界に刻まれた回路を見つけ出す。

そうだ。一度出来たのならもう一度、それを復元することも可能はず。二度目の停電の夜に見た光を探してひたすら意識を飛ばす。敵わなくても構わない。この黒い魔術師の口を一瞬でも塞ぐことが

出来るならそれで十分――

「蒙昧だ、人形。実に滑稽だぞ」

魔術師が何か言っている。

それを雑音と、聞き逃すことが出来ていたのなら、或いは。

「自分を殺した女の為に、何故そこまで自らを消耗する」

否、例え戯言だとしても、その言葉を聞き逃すことなどきつと出来なかった。

「え……」

間拔けな声を出して、集中の途切れた反動のように激痛が再来した。それもこれまでの比ではない。もっと痛烈な、脳にあらゆる方向から圧力が掛かって潰されてしまいそうな、そんな感覚。

俺の反応が予想通りだったのか、魔術師は愉快気に口元を歪めた。にやり、とここにきて初めて見せる悦楽の感情。自分以外の人間など全て娯楽の為に消耗品なのだと信じて疑わない、そんな人間が浮かべる人の絶望を是として嗜好する表情だった。

何も言えない。呆然と魔術師を眺めることしか許されず、頭痛さえも忘れて立ち尽くす。

「正確には、貴様の状態は『死』とは異なるのだが、イロが無いのだから実質それに同じだ。誰が何を代替にして貴様を生かしているのかは知らんが、籠野静月という存在は既に果てている」

「なにを……言ってるんだよ、おまえ」

魔術師が一步前に出る。それだけで、マンションに張られた結界が震えた。まるで主の行進に呼応して咆哮するかのような、世界を揺らす巨大な波動に全身が痺れる。

「憶えていないとはいえ、完全に忘却された訳ではあるまい。記録と記憶は別物だ。事実として、貴様の中にそれが残っていたからこそ、この結界に呼ばれてここにきた。その頭痛は、記憶を封じ込める魔術と、結界に呼応する記憶との軋轢だ」

平衡感覚が無くなって、頭痛に視界が白む。

思考は停止して、現実を逃避することに全力を費やしている。ただ痛みだけがリアルで、目の前に迫る圧倒的な絶望への反感はどこかに消え去っていた。こうして、頭を抱えて蹲ることしか出来ない。客観的に見れば目の前の絶対者に膝を屈しているように見えてみっともないだろう。

魔術師に頭を掴まれる。

刃物のような鋭い殺意が渦巻く黄銅色の眼光が、さも楽し気に嗤う。

男は俺の頭を万力染みた握力で鷲掴みにしたまま、無理矢理持ち上げる。脚に力が入らない。自力で立つことができない今は、脚は地についているのに体が宙吊りにされている気分だ。

「思い出せ、人形――」

心に直接語りかけてくる言葉は、まるで暗示。

「――これが真相だ」

やっと、忘れられそうだったのに、そんな都合のいい防衛反応を許さず、男は無理矢理にその現実を直視させる。目を閉じることもできず、白んだ視界の中にでも、答えは確固としてそこにあった。

マンシヨンの一室。

住人がいなくなってもまだ、主の帰りを待ち続ける扉の脇には家主を表す名が無情に記されている。

灰色の大理石に黒く彫られた名前が。

籠野、と見覚えのある字面を並べていた。

13／法典？

／13

「どうだ人形、思い出したか？ いや、思い出せなくとも思い知ることは出来るであろう」

「黙れよ、おまえ……！」

凄んでも意味が無いことぐらい理解していたが、それでも本能的に語調を強める。気迫など皆無の叫びはまるで断末魔。棒切れみたいな腕で黒い袖に包まれた魔術師の腕を払い退ける。思いの外、魔術師はそれだけで簡単にこちらの体を開放した。

支えをなくしてよろめく体。

自分の体重に膝が折れそうになりながらも、何とか持ち堪えて黒い影との距離を取る。五メートルほどの間を置いて立ち止まり、片膝で体を支えながら黒い魔術師を睨む。

相変わらず癪に障る嗤い。

魔術師は正に哄笑を堪えている最中だった。

「弓坂の共界魔術は世界と強い共鳴を起こす。現象を使役する為には世界に等価の心^{イロ}を支払わなければならない。あの女は自らの身を守る為に、この結界の中で支配の薄かった貴様のイロを利用したのだ」

……嘘だ。そんなことは、きっと偽りだ。

「どうやら貴様は『法典』に執着しているようだが、それは貴様自身の感情ではない。イロを無くして空になった貴様は何にだって染まる。共界魔術——世界に共鳴する魔術を扱う魔術師に感化されるのも無理はない。ましてやモノは『法典』だ。尚のこと、強く意識を支配されるだろうな」

嘘だ。

そう否定するこの心こそが。

男の言葉よりもずっと、偽物だったから。

「弁えたか人形。元より俺は交渉に来たのではない。貴様が魔術師であるのなら殺して『法典』を奪い取るまでだったが、そうでないのなら必要もないこと。人形は所有されるものだ。なにかを所有することなど許されぬ。俺が自ら壊す意味などない」

魔術師の一步が世界を揺らす。

本物の、絶対的な存在感に、偽物の、空白ばかりの存在が潰されそうになってここにある。

心は偽物でも、体は本物だから生きようとする。その矛盾が余計に頭痛を強くした。

「立ち去るがいい人形。『法典』は貴様が関わっていいものではない。あれは神代の遺産。最高の叡智を極めた魔術師にのみ、所有することが許されるのだ」

痛みで意識が擦り切れそうになる。

魔術師の言葉は偽物の心を削り、どこか肉体までも引き裂いていく。

偽物と、空っぽの人形だと罵られて、それを認めている自分がここにいて――

それでも、どうしても、引き下がる気にはなれなかった。

……そうだ、本当に、俺はこいつの言う通り人形なのかもしれない。

だってずっと、そうだった。俺には守るべき自己がなかったから。あの夜も今も、自分のことなんてどうでもいい。それはきっとこの心が空っぽだからだろう。本来そこに在って、他の何よりも優先されるべきモノが俺にはない。自己の抜けた穴にはぽっかりと空白が生まれていた。

だけど、だからこそ、別の何かを守りたいと思ったんだ。空っぽの心を満たしてくれた誰かが、自分の色を持たない俺にとっての全

てになったから、本当は初めから自分のことなんてどうでもよかった。

何故ならずっと、このカラクリの心は一つだけを叫んでいたのだから。

「……断る。おまえが失せろ、魔術師」

——ずっと、弓坂を渡したくないと叫んでいたから。

満身の力を振り絞って立ち上がる。頭痛でとくに焼き切れた意識は、逆に万全の体に叱咤されて再起動した。まだどこも傷付いていない。偽物なのは心で、体は死んでいなかった。だったら偽物でもなんでも構わない、体が動くのなら動力となる心は全力で廻す。最初から決まっていた。

籠野静月に逃走の選択肢など無い。

弓坂絵空がこの身の全てならば、それを守り抜くために死力を尽くそう。

幸いにも、まだ体は動くのだから。

休んでるわけにはいかないだろう。元より、俺は弓坂の為にここに来たのだから。

「……共、界」

見様見真似で詠唱する。世界への呼び掛けに応える色を探す。

世界に在る何もかもが回路の延長にある現象。同じように人間もそうなのだから、遡って世界の中心に辿り着けない道理はない。ならばその過程に在る別の回路に通じる道も、見付けられる。

徒に自らの内側を循環う。自身の果て、世界の始まりへと意識を延ばし、別の現象に心を繋ぐ。それが魔術を使役すること。魔術師ではないこの身であっても、理屈の上では魔術が使えるはずだ。

「……正気か、人形。俺と争うつもりならば止めておけ。類い希な奇跡に依って生かされるその身を滅ぼすのはこちらも気が引ける」
——同じだ。

あの時と同じようにイメージしろ。

目の前の敵を打倒し得る純粹な力をここに再生する。

「なるほど。どうやら本氣らしいな。ならば、奇跡を体現する貴様の在り方に敬意を払い——容赦なく潰してやろう」

魔術師が手を上げた。ゆらりと上がったそれは指揮棒の様。振り上げ、五指の先端は低い天井を指している。さながら軍隊を背に負う統率者だ。黒い立ち姿の背後に、眩いばかりの光が幾つもの集合を作る。綺羅星の如く列挙したそれは、全て切っ先をこちらに向け、待機する針。空間に密集する幾億の針は鬨ぎ合い、巨大な壁となっていた。

即ち、死角なしの絶対圧殺。

魔術師が腕を振り下ろせばその瞬間が最後、籠野静月は四肢を断裂され、砕けた肉片は直後落下する間もなく塵と血の霧に変えられるだろう。

「終りだ。果てろ、人形」

空間に満ちる光を全て集束させた針の一本一本が輝きを増す。

威嚇するように輝く禍々しい針を従えて、軍隊を統帥する魔術師の手が今、殲滅を指令した。

「……っ、この、畜生……！」

迫り来る光の針。秒速三十万キロメートルを誇る光速が一斉に放たれる。刹那の時さえも必要にならない。敗北はここに必定。瞬きの後に待つのは抗えぬ死。

だがそれは外界の話。

自身の内に働き掛ける魔術に於いて一瞬とは永遠にも為り得る。

故に遅れることはなかった。

光速で飛来する針がこの身を討ち滅ぼす寸前に、ようやく繋がる。こちらに使える魔術はその一つ。だが十分。再生するのは必中を謳う神の槍。単一の武器であつてもその誇りとなる英談は遂行される。

無数の光の針を、一撃で以て撃ち落とす——！

「……が、あ……はあ…………！」

全身の血が沸き上がるようだった。神話の再現に体がキャパシテイオーバーを起こしている。指先から徐々に痙攣が進行し、光に閉ざされた視界が二つに割れる。

それでも止めるわけにはいかない。止めてしまえばその時点で敗けが決まるのだ。後に滅びが待っていても、今はまだ抗えるならそうすることを選ぶしかない。

穿つ。

視界を覆う光の壁に微かな穴が生じた。

一つ。二つ。三つ四つ――数を追って点は徐々に大きな穴へと姿を変える。加速して増加するその数は瞬く間に累乗を重ねる。百、千、万、無数。そうしてできた巨大な穴は、ここに超常の衝突が共に消失したことを静かに物語っていた。

形を失った光が霧散して、世界が元の姿を取り戻す。

一瞬の攻防の後に残された空虚な風景は、コマ数刹那前に同じ人気の失せたマンションの廊下。

日常を装う結界の中で、再び黒い外套の魔術師と対峙した。

「貴様……あれを、凌いだだと……」

驚愕は秒を待たずして憤慨に換わる。人形と罵る相手に自らの魔術を相殺されたことへの怒りが、先刻までの嘲りを苦笑を通り越した憤怒の形相へと歪ませる。

「なにをしたかは知らんが、同じ偶然が二度続くと思うなよ。唯一本物である貴様のその肉体は、一片たりとも残しはしない」

乱雑に腕を振り上げる。今度は前方だけではない。周囲三百六十度全方位を囲む光の針。術者の感情が現れる神秘の具現は、隠すことなく憤激に振動していた。互いに質量を持った光同士がぶつかり合い擦れ合うことで音を立てる。耳障りな、まるで超音波だ。

それが、意識を見出す要因になったのは、術者である魔術師にとっても想定外の結果だったことだろう。

「――――あ」

うっかり、導線を別の場所に繋げてしまっただけ。例えるならば

それだけのミスでしかないのに、それこそが致命的な失態となった。
フィードバックする頭痛に、流れる幻視。

——少女がいる。赤い目をした茶髪の少女が。

彼女は衣服を所々解れさせ、破られ、そこから除く肌は血の滲む傷で赤く染まっている。そんな状況だけでも十分残酷だというのに、状況はさらに最悪だった。

精気のない胡乱な目をした大人子供男女を問わない人間達が少女を囲んでいる。おそらくその者達は少女を殴打し、引き裂き、容赦も躊躇もなく押し潰すつもりだろう。絶望的に少女は追い込まれていた。四方は感情の殺された有象無象に閉ざされ、逃げることもできない。だというのに彼女は走る。肉塊の壁に体当たりして隙間に体を振じ込んだ。そんなことをすれば同時に攻撃を受けることは解っているだろうのに。

苦肉の策は身を裂く覚悟で。

彼女の傷はこれを繰り返して作られたのだろう。

長い廊下を走っていく。エレベーターから他の階の住人が溢れ出すのを見て階段に逃げる。だが辿り着いた階段からもまた多数のそれが群れを作って姿を見せる。死角なしの安全地帯なし。それでも少女は走った。ただ必死に。

廊下を全力で駆け抜けて角を折れる。彼女が彼とぶつかったのはその時だ。

少女は一人の少年とぶつかって、表情を安堵に綻ばせた。それはどこか、この空間にあってまだ完全な洗脳を受けていない住人に出会えたことを喜んでいるようにも見えて——

“ごめんなさい、わたしのせいで”

——緩んだ表情が直ぐに血相を変える。

背後に迫る亡者の群れを振り返って少女は少年に——世界に呼び掛けて手を伸ばした。

“応えよ”

心を掴むその声に、少年は消え掛ける自己を差し出した。
おれ

「が……おあ………あああああ………！」

暴走する記憶の逆流が脳を切り裂く。じりじりと頭蓋を炙る記憶の奔走が訴える激痛は、これまでの比ではない。圧倒的に死を予感させる、自我が崩壊しかねないほどの激痛に叫び声を上げる。

俺が本物の心を持っていたならきつと耐えられていない。自己の崩壊は決定的だった。これは、それぐらいの痛みだ。

堪らず蹲る俺の姿に魔術師は満悦したようで、顔を伏せているのに割れんばかりの哄笑がそれを如実に伝えてきた。腹立たしくも、こうなる原因になった光の針が擦れ合う鉄の音は今も続く。術者の、今度は愉悦に共鳴しているのだろう。

「なんだ、人形！ 本当に今の一度だけで限界だったのか！ 実に滑稽ではないか。だがそうなくても、偽物でありながら俺に挑んだその断罪は行う。変わらず宣言しよう。その身は塵として世界に残さん」

形勢を完全に我が物にした魔術師の声に一層空間が揺れる。

雨のような哄笑が一旦止み、光の針が立てる騒音も停止した。そして。

「――ではな。来世は平穏であることを願いながら、速やかに逝くがいい」

破滅の号令はあっさりと下された。

+

「共界――――！」
アクセス

決着の瞬間、その声は凜として夜のマンションに響き渡った。聞き覚えのある声。何度目かになるその詠唱。誰がこの場に現れ

たのかは自明。

顔を上げる。視界は暗闇から解き放たれ、虹彩は入り込む光の量を調節できず視界を霞ませた。その中で、俺は確かにその赤い瞳を捉える。光の針が殲滅の令を遂行しようとするこの一瞬、弓坂の魔術が生と死の境界を隔てた。

立ち上る紅蓮の壁。円柱型の内部を切り取ったその業火が、死角無しの一斉射撃を防御する。魔術として世界の現象を超常に昇華させた炎は、少女のイロに共鳴して質量を帯びていた。無数の針とぶつかり合う音が閉ざされた円の中に響いてくる。

超常の炎が、超常の光を焼き払う。

その激突は瞬き二回ほどの間をして終結を迎えた。炎は炎としての特性から、起爆剤となる酸素を吸い尽くして消失する。開かれた世界には再び先刻の平凡なマンションの姿。

変わっていたのは俺の周辺が円形に焼け焦げていたこと。

壁も天井も黒純み、窓は高熱に耐え切れず融解していた。

そして何よりも、決定的にさっきまでと違っていたことがある。

それは偏に、この場にもう一人の魔術師が現れたという、ただそれだけにして絶対的な変化だった。

「弓……坂……………」

上手く話せない。

痛みで走ってくる弓坂の姿は分裂して見えるし、気を抜けば像を結べなくなりそうだ。

こんな状況になって気付く。この体は既に、一度の魔術行使だけで限界を迎えていたのだと。だって、救援がやってきたことに安堵した体は指一本動かない。さっきまで自分を動かしていた信念さえも萎えてしまっている。

守りたいと思っていたのに。

今度もまた、俺は弓坂に救われた。

「この、バカ……！ なにやってんのよこんなところで！」

怒声が鼓膜を打つ。止めてくれ、今大声を出されると直接脳は聴

覚を痛覚に変換しやがる。

駆け寄ってきた弓坂はしかし、直ぐに助け起こしてくれるようなことはしてくれない。俺の横に立つと、視線すらも外して身構えた。別の何かを見ているように。別の、魔術師と対峙するかのよう。

「久しいな、弓坂絵空。この地で対面するのは一度目だ」

魔術師の、声が告げる。

弓坂は強張らせた表情をして、赤い瞳から放つ眼光には殺意を孕ませていた。

それが、魔術師としての弓坂絵空——このマンシヨンの住人を一晩で火葬した、炎熱の魔術師。

「……シリア、ロッドレイル」

忌々し気に口にしたその名はおそらく、黒い魔術師の名。

「お互い会いたくはなかったと思うけどね、まさか、あんたの方から動くとは思ってなかったわ」

「それは違う。この邂逅は貴様によって実現されたことだ。それに俺はずっと貴様に会いたかった。嗚呼、直ぐにでも顔を合わせたいと思っていたくらいだ」

魔術師、シリアロッドレイルが外套の襟に手を掛ける。すると徐に、自らの胸元を大きく開いた。そして曝される、胸に残された凄惨な火傷の後。まるで超高温の熱を帯びた鉄で貫かれたような、そんな傷跡だった。

「イギリスでは世話になったからな。お陰で、色々と苦労させられた。もしも結界の外なら死んでいた。その礼をしなくてはなるまい。心配するな、手荒く扱うつもりはない何せその体は——」

弓坂が拳を握るのが、視界の隅に映った。

「——法典というパンドラの箱。扱いを間違えればどのような災厄が溢れ出すか解らんからな」

……こいつ、また。

萎れていた闘争心が再び活気を取り戻す。今なら隙もある。奴が俺はもう動けないと高をくくっているなら、付け入る隙は残されて

いるはずだ。もう一度さっきの魔術を使えば、一撃で奴を八つ裂きにできる。

チャンスは今しかない。油断していて薄くなった魔術師の注意は全て弓坂に向いている。詠唱も一言呟くくらいなら奴の耳には届くまい。

もう一度だ。

この場にもう一度、神話の奇跡を再生する。

「籠野くん」

「……………」

突然、それまで俺のことなど一切意に介していなかった弓坂に呼ばれる。

頭痛に身を削る集中はそれだけで簡単に途切れた。

「妙なことは考えないで。あれの相手はわたしがする貴方はさっさと逃げなさい」

「何言ってやがる……後から来といて、今から逃げろなんて——」

「次に魔術を使えば、貴方本当に壊れるわよ。貴方に掛けられてるのは強力な暗示なの。貴方の魔術はその暗示に強い摩擦を起こす。

ただでさえ、神話の再生なんて滅茶苦茶な魔術なんだから、使い過ぎれば簡単に潰れるわ」

弓坂もまた、俺の状態を知っているような口振りをしていた。だが考えてみれば当たり前か。

俺が空っぽになった原因は弓坂にあるのだから。

貴様を殺した女——魔術師の言ったことが本当だと、完膚なく証明されてしまったのならその後で、それでも俺は変わらず弓坂を認めていられるだろうか。少なくとも今、九分九厘最悪の仮定が肯定されつつある今はまだ、彼女を恨むことはできないが。

「早計だな『法典』。今宵の俺が用を持ってきたのはその人形であって貴様ではない。——炎葬の魔術師よ、貴様とは相応しい決着の舞台を用意してある」

「へえ……それはまた、親切にどうも」

「礼には及ばん。準備期間をくれたのはおまえだ。――見返りとしては、そうだな、おまえが一週間近くを費やして解こうとしていたこの結界を放棄しよう」

弓坂が舌を打つ。憎々し気なその音が、短く廊下に落ちた。

「決戦は明日だ。場所は指定するまでもないだろう」

「あんたの指定した根城に、わざわざ行ってやると思ってるの?」

「無論だ。貴様は来なくてはならない。これ以上この戦いに犠牲は出したくないのだろう」

「……卑怯者。今ここで、灰にしてやってもいいのよ」

「好きにすればいい。だがいくら貴様とて、その人形を庇って俺に敵うとは、まさか思っていまい。これは慈悲だぞ、魔術師、弓坂絵空」

主導権は完全にシリアスロッドレイルの手にあった。気に食わないのは弓坂の脚を引っ張っているのが俺だと言うことだが、これは否定のしようもない。意識はまだ敵対心をなくしていても、体は抗う力をなくしている。事実として、俺は路傍の石に同じ。厄介なことに、きつと弓坂はそんな俺さえも救おうとしてくれるだろう。それは、俺だからではなくて。

そうするのが、弓坂絵空だから。

誰も巻き込みたくない。そう言った彼女の心は本物だったはずだから、自惚れや陶酔ではなく弓坂は俺を守るだろうと予想できる。

「……解ったわ。それで構わない」

「いい判断だ。では、今宵は退散するでしょう。いや、なかなか愉快的な夜であったぞ人形。素晴らしく無様な喜劇だ」

捨て台詞と嘲笑を残して、黒い魔術師の背中は廊下の先に消えていく。不意を衝くならば間違いない今だったが、弓坂は奥歯を噛んでそれを見送るだけに留まっていた。

その心意は、きつと『法典』として生きた彼女の生涯に由来するものだったのだろう。

誰も、殺したくない。

——ごめんなさい、わたしの所為で。
二つの思いと声が、不意に、泣き出しそうな顔で唇を噛んだ少女
の姿を思い出させた。

14／譲れぬ決意

／14

シリアⅡロッドレイルの去った後に残ったのは気の抜けた静寂だけだった。こうなって実感することは、いかにあの魔術師が垂れ流していた殺意が強大だったかということである。こんなにも呼吸が楽な行動だなんて正直ずっと忘れていた。

立ち上がることでできない俺は、生まれたての馬みたいにぎこちない動きで体を立てようとする。そうしていると、見兼ねたのか弓坂が無言で手を貸してくれた。

起き上がり様に赤い瞳と視線が重なる。すぐに逸らすか迷ったところで弓坂が訊いてきた。

「なんでここに來たのか、なんてことは訊かない。ねえ籠野くん、貴方、あいつにどこまで聞いたの？」

隠すことも、誤魔化すこともできそうにないくらい真っ直ぐな目をして問われる。そんな目をされたら、正直に答えるしかないじゃないか。

「多分、全部。おまえが、『法典』だってことと、俺が……」

死んだ、というのには流石に抵抗があって、

「……その、空っぽだってこと」

「そう。解ったわ。ならいいわ——全部、本当だから」

心のどこかで待っていた否定は行われず、その心が偽物であると、先の魔術師の言葉が真実だと言うことがここに明言された。

弓坂は淡々と続ける。

「言わなかったことは悪かったと思ってる。わたしが『法典』だってことも、貴方を殺していたことも、自分に都合の悪いことを黙っ

ていたのは本当に――」

「いいよ、もう」

いつまでも支えられているのは悪いから、壁に体重を預けて立つ。この体勢ならまだなんとかなりそうだ。こうしておけばその内動けるようになるだろう。肉体に損傷がないなら後は心の問題だ。

けれどその心は欠陥品で、なかには何も無い空虚な伽藍洞。

「謝らなくてもいい。そういうルールにしたのはおまえだろ。それよりも明日の話だ」

「……あんた、もしかして自分も戦うなんて言うつもりじゃないでしょうね」

「当たり前だろ。弓坂一人に戦わせられるか。何となくコツは解ったんだ。明日まで万全の調子に整えておけば、次はきつと上手いく」

「バカじゃないの」

結構自信があっていったのだが、それは弓坂の一言に一蹴された。「魔術が使えるかどうかなんてどうでもいい。だいたい、使ったら貴方またぼろぼろになるじゃない。いい？ 籠野くんの魔術は特別

なの。世界じゃなく、自身に働き掛ける。そんな特異な魔術なんて滅多にないわ。代償の大きさだって解ってるんだから、大人しくしてなさい」

「いや、でも」

でも、なんだと言うのだろう。そうだ、弓坂の言うことは正しい。そんな意味で言っているのではないのだろうが、魔術が使えたとしてもその後は反動でこの様だ。ならば戦いの場で俺は確実に邪魔になるだろう。前段階の魔術行使自体が成功率を低くするというのに、その反動は確約されている。こんな厄介なことは他にない。

それが解った上でもまだ、素直に弓坂に従う気にはなれなかった。ここで頷いてしまったら、弓坂は一人で死地に赴くことになる。それは、どうしても目を瞑って見過ごすなんて出来ない。あまつさえ、俺は彼女の窮地を見てしまったのだから。弓坂絵空は魔術師でも、

それ以前に一人の少女だ。簡単に傷付くし壊れる。その可能性が目に見えてるのを黙殺するなんてことは、できない。

「……言っても聞かないか。貴方、やっぱり強情よね。心、無くしたくせに」

弓坂が離れていく。ゆっくりとした歩調で空けた間隔はちょうどさっきまで黒い魔術師との間にあった距離と同じ。手を後ろに回して腰の位置に結んだその後ろ姿が、この場にあまりにも相応しくなかった。

天を仰ぐ大袈裟なりアクションで、組んだ手をほどいて左右に広げると、

「ね、籠野くんはさ」

首だけを振り向けて、赤い瞳の片方を覗かせた彼女が言った。

「籠野くんは、わたしのこと、好き？」

正気を疑う質問に、面と向かってそんなことを訊かれては当然ながら狼狽してしまう。なんの罰ゲームなのかと神に問いたい今この一瞬に、発狂してしまいそうなくらい混乱する精神を無理矢理落ち着けて冷静に思考する。

籠野静月は、弓坂絵空が好きなのだろうか。

もし仮にここでそうだと答えても、俺はその返事に絶対の自信を持つことなんて出来ない。この心は偽物だ。何にでも染まる空虚な無色の心。それが、弓坂の魔術に感化されただけ。そう思うと、簡単には肯えない。

けれどだったらそうでないのかと言えば、その答えもまた違うのだ。偽物にしろ何にしろ、真実その心は弓坂を思っているというところに変わりはないのだから。つまり問題はそれがどこから来て、どこに在るのか。俺自身の中から来てまだそこにある本物なのか、それだけだった。

「俺、は」

——それは、存在するだけで周囲に災厄を齎す。戦争の、火種だ。

俺は、その『法典』に殺された。このマンションの住人も、きつともっと多くの人も何処かで。魔術師の勝手な闘争が原因で。『法典』なんてものの為に――。

「直ぐに答えられないなら、それは偽物だよ」

長髪が翻る。

振り返った少女はとても、儚く笑っていた。

「貴方はわたしの魔術に共鳴していただけ。それだけの、間違いだから。安心して、それがまともなのよ。わたしを好きになる人間なんて、いないんだから」

「なんで、そんなこと」

解ってる。こいつがなにを言いたいのか何てそんなことは解っている。自分は『法典』だからと、戦争の火種だとか、災厄の根源だとか、あの魔術師が言ったことを繰り返すつもりなんだろう。

違うんだ、そんなじゃない。だってこいつは『法典』なんてものである以前に弓坂絵空という少女なのだ。誰かに好きになられることは、許されているはずなんだ。

――嘘だ。

……どうして、また。

「わたしは、これ以上自分のせいで誰かが犠牲になるのは嫌。だって耐えられないもん、そんなの苦しすぎる。貴方に気を使ってるんじゃない。自分を守るために言ってるの。――お願いだから、二回も殺されないで。『法典』の起こす戦争の犠牲になんて、もうならないで」

懇願されると、余計に引き下がれない。そんな切実な願いを踏みにじってまでも、それでも守りたいものがあると思えた。それだけで十分だ。偽物であってもそれしかないから抱き締める。弓坂一人を戦わせたくないという気持ちはどうなっても変わらない。

その筈なのに何故、俺は、彼女が『法典』であるを知った途端にそれを許容できなくなったのだろう。好きだと、そう信じたい思いさえも偽者に思えてきて。目の前の少女が、災厄の根源であること

が許せなかった。

答えあぐねる葛藤に沈黙する。

弓坂は、痺れを切らしたのか赤の瞳を閉じて、苛立たし気に言った。

「……そう。解った。言っても聞かないならしかたないわね」

「なにしてんだ、弓坂……？」

見覚えのある構えだった。

肘を伸ばして地面と平行にしたその先の掌をこちらに向けて、ゆっくりと息を吐くその姿。見たことがある。夜の公園で、死者の体を貫いて灰に変えた魔術を打ち出す前の構えだ。

それはつまり弓坂が、俺を敵と認識したということ。ないしは魔術を使っている相手だと判断したのか。つまるところこいつは中々言うことを聞かない俺が面倒になって力に訴える気になったのだろう。確かにその方が手っ取り早いし、俺も自分に嘘を吐かないで済む。

「——約束して、もうわたしには関わらないって。そうすれば手荒な真似はしない」

「もし……断ったら？」

「全部終わるまで、寝てて貰う」

ぴたりと、空間が停止した瞬間に鼓動が高く鳴り響く。これから発動する魔術に呼応しているのか、それとも恐れから高鳴っているのか。前者だろうな。後者のようなことが有り得るほど、俺の心は上等じゃない。

状況は完全に決していた。断れば炎に飲まれて、死にはしないだろうがことの顛末が過ぎるまでを寝て過ごすことになる。弓坂に応じればそれこそ本末転倒。どっちにしたって変わらない。俺は今を以て弓坂と決別するしかないのだ。

次の一言で決まる。行き着く先にある結果はどちらも同じ。だが違っているのはその過程。自分に嘘を吐くのか、正直になるのか、その二者択一。そして、導かれる先に待っているモノが同じならば

——考えるまでもない。俺が取るべき選択は決まっていた。

「断る。俺は絶対におまえを一人で戦わせない。おまえが起こした戦争も全部始末を付けてやる。だから一人で戦うなんて、そんなことは認めない」

赤い円が弓坂の周囲を囲んで旋回を始める。

風など吹いていないのに舞い上がる髪が、超常の神秘の具現を報せていた。

「だったら、わたしは貴方を貫いてわたしを通す。わたしは、一人で戦うわ。誰一人、『法典』の隣に誰かは要らない。わたしは一人で戦って、一人で——」

集束を始める光の粒子。世界から供給される神秘の回路。魔術師としての弓坂絵空が瞳に殺意を灯した。

もうそれだけで気が遠くなる。共界魔術に反応する記憶が相変わらず酷い痛みで脳を軋ませる。この上で更にまだ弓坂の魔術まで喰らうなら、ことが終わるまでなんて言わず、二度と目が覚めないかもしれない。

「ばいばい、籠野くん。目が覚めたら、早くわたしのことは忘れてね」

それこそ、出来るはずがない。

けれど否定する言葉を口にするよりも早く。

世界は赤く反転し、籠野静月の意識は彼方の紅蓮に飲まれて消失した。

15／結界の城

／15

世界が燃えている。

黒い空を妬き焦がす赤い大地の火炎。人々の絶叫を薪にして加速する地獄。

少女はただそれを見ていた。終わりの顛末を遠くで眺めて、消えていく命に涙する。表情の枯れた頬を伝う涙が滴り落ちて、呪文のような謝罪をぽつりぽつりと少女は零す。それは何度も何度も繰り返してきた、決して誰にも届くことも無い言葉。

ごめんなさい。

燃え上がる街を見て、少女は泣きながら口に出す。自身の罪の重さに壊れそうになりながら、それでも少女は立ち尽くすことが出来ず、もう何度も見てきた破滅の瞬間を瞳に写す。

何が間違っていたのかなんて、もう憶えていない。

生まれたときからずっとそうだったわけではない。子供の頃は少女も普通に日々を過ごしていたのだ。しかし月日を経て『法典』との回路が繋がると、噂を聞いたたくさんの大人達が、その身に刻まれた術式を廻って殺しあっては果てた。その度に周囲は瓦解し、崩壊し、煉獄と地獄は幾度と無く地上に顕現した。それをいつから悲しいと感じなくなったのかなんて、やっぱり憶えていない。今溢れてくる涙にも、共感できない。

全ては己の内に秘められた『法典』という力の所為。

無くしてきたものは数知れない。幼い頃の平穏な日々も、優しく笑いかけてくれた両親も、仲の良かった友達もみんないなくなった。全部、自分の中にある力の所為だと、毎回目にする炎に思い知らさ

れる。

無くしていくばかりの日々。

終わりを続ける自分の周囲。

その中で、少女は心に誓った。

戦おうと。泣いていた日々と決別する為に、小さな胸に誓う。

自分にはそれしかないからと強がりには笑って。己に与えられたその絶望の術式を利用し、少女は魔術師になった。せめて消えていった人達の心に触れられなかった自分が、この世界にだけは共感できるように。

だから彼女はいつもその詠唱を紡ぐ。

“共界”
フクセス

泣き疲れて感情の枯れた彼女が、世界の色を心に共鳴させる。そうすることが贖罪。救えなかった人達がいて、意味の無い戦争に巻き込まれて死んでいった人達がいる。その人達に届くように、何度も何度も――詠唱は言葉無き謝罪。世界を廻る、一人ぼっちの少女の嘆き。

けれど状況は何も変わらなかった。

結局、自分が戦うことで救われるものなんて極少数。消えていく命の数は一向に減ることを知らない。

誰に罪が在ったのなんて知らない。

だけど一つだけ解ったことがある。感情を持たない俺でも、彼女の夢を悲しいと思えた。それはきつと、この夢を見る原理と同じで、無色の心が彼女の魔術に感化されただけ。それでも、それを悲しいと思う気持ちは確かにあったから。

偽物でも構わないと思った。

たとえ偽りから生じた空想でも、その感情が自らを満たす唯一なら、それが籠野静月の全てだから。

いつかの夜に見た少女を、偽物の心で綺麗だと思った。そうだ。それだけあれば十分じゃないか。そう思えたのなら、それこそが俺の想いなのだから。偽物でもいい。ただ一つのそれを守り抜こう。

夢の終わり、辿り着いた焼け野原。

いつも、少女はその光景を果てまで呆然と眺めて背を向ける。いつになれば終わるのか。そんなことはもう考えなくなっていて、走り続けることだけが全てになっていた。

戦うと、心に誓った。

挫けそうになって思い出すのは、赤い世界に約束した誓い。小さな小さな、彼女の祈り。一人でも多くを救いたいと、呪われた己が身を嘆くのではなく、犠牲になった人達を思う願い。

誰とではなく、自身と。

いつの日か彼女が自分を許せるようになるその日まで、少女の戦いは続く。

——たった一人の、孤独な戦いの旅路がこれからも。

：

目が覚める。

何度目かになる彼女の夢を見た。思えばこれこそが、俺の中身が空っぽだということの証明だったのだ。弓坂との繋がりは、それ自体が俺の心が偽物だということの証拠。このマンションで、自らのイロと引き換えに形を得た魔術に共感した。

それが籠野静月と弓坂絵空の繋がり。

空っぽの俺にも許された、唯一だった。

「そう……だ。いま、何時だ……？」

頭を押さえて起き上がる頭痛の名残と最悪の寝付き、そして長時間硬い床に寝ていたことが一同に作用して体が上手く動かせない。窓の縁に手を掛けて立ち上がるのが今の限界だ。そうした後でも支

えがないと立っているのもままならなくくらいに体にはがたがきてる。昨晚の魔術行使がそれだけ負担の大きいものだったんだと今になってやっと理解した。

それも、今更だな。散々弓坂には言われたし、俺自身も体感した。なのに限界になるまで覚えないのは、俺が相当な馬鹿なのか。

窓の外には既に日が高く昇っていた。この分だと正午を回ってからそれなりの時間が経過しているだろう。つまり俺は、あれから十時間以上もの間昏睡していたことになる。

「い……っ」

思い出すと頭痛がした。記憶はそのまま自身を傷付ける刃だ。今の俺にとって魔術に関わる記憶は有害にしかない。内部からの矛盾が起す摩擦は、容赦なく精神に負担を掛けて削り取っていく。でも今はまだ大丈夫そうだ。これならまだ動ける。

行かないと。まだ戦いが終わっていないなら間に合う。彼女の夢に決めたんだ。あいつを一人で戦わせない、と。だからこれくらいの痛みで立ち止まっていられない。早く、弓坂のところに行かないと――。

場所を特定する有効な手段ははっきり言ってない。しかし全くの無策というわけでもなかった。ただそれはかなり効率が悪く、運試しのような杜撰な策で――とどのつまり何をしようとしているかといえど弓坂と結界を壊して回ったことと同じだ。

あの二人が戦っているとすればそこには必ず結界が張られているはずだから、見つけ出すことは不可能ではない。問題は結界の術式のように不特定多数広範囲に広がったそれを見付けるのではなく、この街のどこかに生じたたった一つの異常を当てもなく探し回らねばならないという点にあって……

「……考えてる時間はない、か」

既に戦いは始まっているかもしれないし、終わっているかもしれない。一秒だって足踏みしている時間は残されていない。考えてる暇があれば動き回った方がよっぽど意味がある。

もしも、既に二人の魔術師が別の地にいたらなんて仮説は、考えたくもなかった。

＊

無策に等しい足掻きが功を奏したのは行動を開始してから二時間くらいが経ってからのことになる。時間帶や、そんな場所は有り得ないという先入観から無意識に避けていたその場所の前で足を止めた。

濃厚な異端の気配。吐き気を催す甘い空気。そして微かに痛む頭の隅。こんな状態でなければ信じられなかったが、魔術師の結界が張られていたのはあろうことか学校だった。

だが見つけた後ならこの場所に合点がいかないこともない。昨日奴が弓坂に言っていた言葉の真意がこれで掴めた。奴がここを根城にすれば当然、生徒全員に被害が及ぶ。そうさせない為にも弓坂は魔術師を立ち退かせる必要があるのだ。

「あの野郎……正義の味方じゃないんだから……」

都合のいいように相手のテリトリーに乗り込むなんて、実はあいつは頭が悪いんじゃないだろうか。お人好しともいう。何にしろ、そのお人好しに俺は助けられたし、俺はそのお人好しを助けたいと思っている。だから。

ここでまだ戦いが続いているなら、手遅れでないならと思うと、知らず胸を撫で下ろす心地で安堵していた。

よかった。

まだ、あいつを助けられる。

「――既に滑稽を通り越して愚かだな、人形。失笑ものだ」

意識の外から声がした。それは声という媒体を通してようやくそこにあることに気付くことができたと言っても過言ではない。こんな——直ぐ目の前に黒い魔術師は立っていたというのに。声を聞かされて認識させられるまで、そこにいることに気付けなかった。

「驚くことはないだろう。なに、そちらとこちらでは別の世界、故に見える景色が異なっていたただけだ。俺と接触して、貴様はこちら側を認識できるようになったというだけに過ぎん」

「おまえ……弓坂はどうした」

「己よりも『法典』のことが気掛かりか。だから愚かだというのだ。死地に赴きながら他者を気に掛けるその驕り、人形には不相応に過ぎる。まして、その命はこの戦いに関わる必要のないものだ。あの炎葬が自ずから危機から遠ざけたというのに、自分からのこのこと現れるとは」

こいつの言葉には、聞く耳を持たない。

一歩で踏み切りを付ける。踏み込んでから加速して距離を詰め——至近距離から攻撃を加える。そうすれば終りだ。躲すことも防御することも許さず一撃で貫く。

「そんなこと——」

拳を固める。昨日と同じだ。

イメージして、回路を繋ぐ世界に記された伝説を奇跡としてここに再生する。

「——訊いてないんだよッ！」

振り上げる拳を変格する。全身を駆け回る魔力の奔流を一点の回路に流し込み世界と共感。人智を超えた神秘を以て理を凌駕する——

「人形風情が、魔術師の真似事など止めておけ」

その拳は。

虚空を切り裂くに止まり何を成し得ることもなく超常としての一瞬を終えた。……いや、成功していなかったんだ、最初から。回路は接続を果たす寸前にこちらとの繋がりを切った。それはつまり、今の俺では奇跡を使役するには足りないということ。極限状態にな

ければ、魔術師でない俺には魔術発動の神秘をやったのけるだけのスキルがない。

「同じ偶然は何度も続かん。それが驕りだと言うのだ人形」

姿を消した魔術師の声が後ろから聞こえてくる。瞬間移動でもしたのか、黒い外套の姿は背後で悠然と立っていた。

「なにを驚くことがある。ここは謂わば俺の城だ。城主が門前の輩に直接顔を見せるわけがなからう。これは俺の意思を投影しているに過ぎない。実体を持たぬ点、貴様と同じかもしれない人形」

「……弓坂は、無事なのか。まだここで戦ってるのか」

「ふん。偽りの心で何を志すのかは知らんが、それほど知りたいと言うなら構わん。引き返す気がないならどの道貴様の結末は決まっている。その無礼は不問に伏そう。——そうだな。『法典』なら今、我が城の中で人形どもと戯れているところだ」

さも愉快気に魔術師は口にする。その光景を思い描くだけで笑いが溢れてくると言うように、口元を引き上げたあの表情で言った。

「人形……て、おまえ、まさか」

「左様だ。この結界はマンションに張ったものと同じ。俺が造り出した一つの世界だ。ならば民を掌握するのは王の権利であろう。俺の思想に賛同する者を全て忠僕の人形とする——この結界はそういうものののだよ」

共界系の結界。弓坂がいつか言っていたことを思い出す。ある感情に強力な共感を起こして、その感情に存在を支配させる。言ってしまうえば支配圏に入った者が持つ特定の感情を膨張させて暴走させるということだ。

結界。外界との隔たりを壁にして四方を閉じた箱のような世界。確かに、ここを城と比喻するこの魔術師は間違っていない。

「これだけの人数だ。いかに優れた支配者も万人に共通する理念など持ち合わせていない。王政には必ず反駁する者が現れる。中には結界に染まらぬ者も多くいてな、その者達にとってこの城はまさに地獄だっただろうな」

言い終えて遂に、黒い魔術師は哄笑を爆発させた。耳障りな大声。結界が微かに揺れている。この結界もまた術者に共感しているのだろう。軋むような音を立てて世界が鼓動する同時に――校舎の窓ガラスが派手な爆発音を伴って碎け散った。三階の廊下。あの分だと距離は教室三つ分程度。だとしたら今のは。

校舎に向かって走り出す。一瞬、横目で大笑いを続ける魔術師を垣間見た。黒い結界の主は走り去ろうとする俺など意に介そうともせず高笑いを続けている。その醜悪な姿に憤るのは後回しにして、今は弓坂がいると予想される校舎に急いだ。

16／弓坂絵空？

／16

そこに待っていたのは、記憶に見たマンションの再現だった。ただその数が比較にならない。全校生徒の総数は千人に近い。新築で入居者の少なかったあのマンションと比べれば十倍近い差が生じる。理性をなくした生徒の群集に囲まれて、弓坂はそこにいた。

「弓坂ッ！」

呼び掛けると、忌々し気に舌を打った弓坂はこちらを一瞥するとすぐにまた視線を前方に戻した。直後、猛然と降り下ろされる金属バット。紙一重で回避した弓坂の背後で教室の窓が割れる。弓坂は床を転がってバットを持った男子生徒の背に回り、関節を決めて動きを封じると、それを背中から蹴って突き飛ばした。

少女を囲む集団に隙間が出来る。弓坂はその僅かな空間が修復されてしまう前に身を振じ込んで走り出した。

赤い視線がこちらを向き、

「ボサッとするなッ！ 後ろ危ない！」

言われて後ろを確認すると、非常用の消火器を持ち上げる大柄な生徒の姿が目に見え。正気を欠いたそれは次の瞬間には手に持つ消火器を降り下ろしてこちらの頭蓋を砕くだろう。

咄嗟のことで回避が間に合わない。せめて頭への衝撃を避けようと腕を盾に持ち出すと、寸前に駆け抜ける体が視界を過る。靡くように流れる茶色い髪。閃光のように突き抜けた弓坂が消火器を持つ生徒に体当たりを決めた。

「ほら次来るわよ！」

倒れ込んだ状態の弓坂が叫ぶ。

二度目となれば今度は遅れることもない。振り返り様に振り上げた脚を回し蹴りの要領で後ろにいた生徒の腹にめり込ませる。痛覚はやはり残っているらしく、仰け反った体にもう一撃を加えて背中から倒す。

次の攻撃が来る前に、弓坂が俺の手を取った。まだ片膝の状態だがそれがクラウチングスタートを模し、瞬発的な加速を実現する。生徒の集団を突っ切って走る。向かう先は解らないので弓坂についていくことにした。

階段を駆け降りて廊下の角を曲がり、階段からある程度の距離を置いたところの教室に飛び込む。といってもドアをスライドさせた弓坂に無理矢理投げ込まれたという方が正確だが。

非難と苦情を述べようとして口を開き、久しぶりに呼吸をして、その異臭に気付いた。

「なんだよ……これ」

粘膜にまとわりついて吐き気を誘発する異臭。人間の血が教室に充満させた死の濃密な香り。薫製にされた、その、机に渡されるように横たわる数人の生徒。それらは全て、胸元から腰の位置までを袈裟に斬られた傷を負っていた。この傷で連想できる得物は、鋭利な鉄の刃、日本刀の類い。

傷に相応しい凶器が何かを考えたとき。

頭に浮かんだのは、ある一つの情景だった。

「酷いわね」

弓坂が、唇を噛んでその光景を遠めに見ていた。

ゆっくりと、血を流す体に近付いて行き首筋に触れる。

「……辛うじてだけど、まだ生きてる。重傷だけど応急処置をすれば放っておいても助かるわね」

「そっか、それはよかった」

「ええ、本当に。まだ助けられて、よかった」

そう言って、自分の手が血で汚れることも気にせず弓坂は大きな傷口に触れる。小声で何かを口に出すと、触れた掌に微かな光が灯

り——僅かに生徒の体が痙攣して、机が音を立てて振動した。何を
したのかなんて問うほど空気が読めないつもりはない。治癒系の魔
術とか、そんなだろう。

応急処置と称する治療を終えた弓坂は、他にも三人切り傷を負っ
た状態の生徒に同じ処置を施した。そのまま休む硬く閉ざした表情
で、低い声音で言う。

「他の教室もこんな状態だった。一応、ほとんど回って治療はして
おいたけど……なんで、こんな」

後少しで弓坂らしくない弱音が零れそうになるが、それを呑み込
んだ瞳が感情を取り戻す。強く睨み、こちらの肩をぐっ、と握った。
その不意討ちに対応できないまま、俺は弓坂が預けてきた体重を支
えきることが出来ない。

背中が窓にぶつかって軋む音を立てた。

「何で、来たのよ」

ぐ、と力を籠めて胸元のシャツを握られる。襟が締まって苦しい。
「もうわたしのことは忘れてって言ったじゃない。貴方はこれ以上
傷付かなくていいのに」

「俺の体だろ。そんなもん、どう扱っても俺の勝手だ。おまえが一
人で戦うなんて言っても、絶対にそんなことは認めない」

「バカ。あんたは、『法典』に関わった存在がどうなるか知らない
から言えるのよ」

「……知ってるよ、俺も」

夢で、同じものを見たから。

それは、弓坂が見てきたもののほんの一部でしかないのだろうけ
ど。それでも全く解らないわけじゃない。だから放っておけないと
思った。こんな、自分と歳の変わらない少女が一人で背負うには、
その光景はあまりに酷過ぎるものだったから。彼女が壊れてしまわ
ないように、同じものを少しでも肩代わりしてやりたいと思った。

「夢を見るんだよ、おまえの。おまえが見てきた世界の。多分、俺
には色がないから弓坂の魔術に共感して、記憶の一部を視てるんだ

と思う」

そして思ったことがあるんだ。

本当ならすぐに言ってやりたかったなのに、言えなかった。

夢の中の彼女は涙を流すばかりで、こちらの声は届くことは無い。でもここでなら言える。それが救いになるかは解らない。だとしても、無意味な言葉だとしてもそれを彼女に言っただけだった。

「おまえが謝る必要なんて、ないだろ。あれは別に——全部おまえが起こしてきた結果じゃないんだから」

そうだ。全部が全部、弓坂が現実に体感したものではない。少女の姿は変化していたが、その変化に伴う景色の変化が乱れ過ぎていた。時系列がばらばらだ。多分、俺はあれを夢に見ている弓坂を夢想していたんだろう。

どれが弓坂の記憶で、どれが『法典』の記録なのかなんて俺には解らない。だが、弓坂がその全てを背負う必要なんてあるはずがない。そんなこと、誰にだって解ることだ。

「あれは『法典』に内包された経過よ。今では協会があるから街一つ灰にする戦争なんて起きない」

「だったら、やっぱりおまえは何も悪くないじゃないか。おまえは、何も滅ぼしてなんかいないだろ」

弓坂は、力の限りを尽くしてこちらの体を壁に押し付けた。

赤い目が、感情を必死に押し殺しながら瞳の奥を抉ってくる。

「それでも——あなたを殺したのは、わたしなのよ」

そんな、ことを言った。

「『法典』に記録された破壊が、わたしの起こしたものでなくても、それは『法典』が齎した破壊なの。そして、弓坂絵空は『法典』そのものの」

唇を噛み、強く、拳を締めて。

「だったら、それに記された千年の滅びは、全部わたしが背負わなきゃならないじゃない……！」

肩を掴む握力が余計に力を籠める。

「それだけじゃない。あんただけじゃないのよ。もっとたくさん、マンシヨンの人達も全員わたしの所為で死んだ。今回に限ったことじゃない。戦いに巻き込まれて犠牲が出るのはいつものことだった。その度わたしはなにも出来なくて——だから夢の中で、これまでに『法典』^{じぶん}が犯してきた罪に、謝り続けてきたんじゃない！」

こつん、と。
力のない拳が胸を叩く。何を責めているのか、誰を責めているのか。

やり場のない感情をこうすることでしか外に出すことの出来ない。魔術師なんて異常者ではなく、今の弓坂はどこにでもいる少女。悲しいことがあれば泣くし、気に喰わなければ怒る。そんな、普通の魔術師なんて超越者でありながらもその実、彼女はどこにでもいるような少女に違いない。本来なら『法典』にも関わることなく普通に一生を終えるはずだった。それなのに、今はこうして必死に戦っている。健気に涙を堪えながら、同じ気持ちを言葉にして繰り返して。

彼女にとっては毎日がそんな戦いの日々。休まることもなく走り続ける、そんな途方もない——千年分の記録と向き合い続ける時間。けれどそんなのは間違っている。間違っているから、弓坂は必死に抗っていたのだ。

よかった、と、助けられてよかった、と心の底から安堵して言っていた。今も、あの夜も。

「わたしは、償い続けるしかないのよ！ 魔術師になると決めた日から、その生き方を選んだ。それが、『法典』としてのわたしが罪の意識に漬されないで生きていく唯一の方法だったから！」

どす、と強い拳が入って、そのままずるずる弓坂は膝を曲げて倒れていった。走ってきた疲れとか、そんなのではなくてもっと別の理由で。

助けたいと願っていた。一人でも多く、『法典』に関わって犠牲になる人間を減らしたいと、それが彼女の祈り。だったからこそ、

この校舎は誰よりも弓坂絵空にとって地獄だった。守りたいものが、ひたすらに壊し合い殺し合い、自らに向けられる殺意をそれでも断罪と受け止めて抵抗することもない。

……俺が、悪いのかもしれない。もしも弓坂が、学校の全生徒は手遅れなのだと思っただけなら、或いはあのマンションと同じ対処を取ったかもしれない。初めて会った夜、四肢を破裂させた男を火葬したように、自己を防御できたかもしれない。なのに俺が、余計なことを知らせてしまったから。

だってそうだ。

まだ助かる可能性があるならこいつは、例え自分の身を滅ぼしてでも彼らを救おうとするに決まっている。

「わたしは……一人で十分だって言ってるじゃない。これ以上わたしのせいで人が死ぬのは嫌なのよ。人の死を、たくさん見てきた。」

『法典』が記録した千年の歴史と、統合戦争の結果をわたしは直に見せられた。もう十分なのよ、こんなこと。わたしは、もう誰にも傷ついて欲しくないの！」

「同じだよ、俺だって」

なにが同じだと言うのか。幾ら、どれだけ同じものを見たとしても所詮は他人事。俺には真の意味で弓坂の苦しみは理解できない。彼女の誓いの重さも計り知れない。だけどそれはそうだ。しかたのないことなんだろう。だって、俺は弓坂じゃない。幾ら無色の存在でも、完全に同一の存在になって成り得ないんだ。

だけど俺には、弓坂の見ていないものが見えている。俺にしか見られなかったものだって確かにそこにはあった。

「俺が見てきたのはさ、思い出してみれば『法典』が生み出した破壊じゃなくて、それを見てきた弓坂なんだよ。いつも、夢の中心には弓坂がいて世界を眺めてた。初めから、俺が見ていたものはそれだけだったんだ。だから——おまえが『法典』の夢を見て戦うと決めたなら、俺も同じだ。俺は、夢の中で泣いてた誰かの為に戦うって決めたんだよ」

破滅と崩壊に軋む絶望の中で、それでも綺麗だと思える存在があった。

俺にとってはその心が全てだから、決して失いたくないと願いつける。それが偽物だとしても構わない。信じ続ければ、大切にしていればなんでもない石ころでも宝物に変わるように、この心をいつか本物と胸を張る為に戦う。

だからこそ俺は弓坂を一人にしたくなかった。

「バカじゃないの……。なにを言ったって、そんなのは結局偽物よ。あなたの心じゃ、ないんだから」

「それでも構わない。だって、俺にはそれしかないから」

「間違ってる、そんなの。それしかないなら、別のものを得る為に生きなきゃいけないのに、自分から危険な道を選ぶなんて。そんなの、絶対に間違ってる」

「間違いでもいい。今間違っておかないと、俺は絶対に後悔するか」

「だけど、わたしは――」

「うるさい。いいから黙ってろ。俺はもういいってくらい何回もおまえに助けられてきた。だから今度は俺の番だ。おまえが『法典』だとかそんなことは知らない。俺は、弓坂を守りたいんだよ。その為に、おまえを一人でなんて戦わせない、絶対だ」

それが籠野静月が立てた独り善がりな誓い。誰を救うわけでもなく、自己満足にしか成り得ない可能性だってある。けれど少なくともその誓いを果たせる間は、弓坂は一人にならない。彼女が一人で涙しないように、傍にいてやれる。それはきつと誰にでもできるとだけど、他の誰にも代わって欲しくなかった。

弓坂の隣にすることで、俺自身もまた、救われるから。

「……………知らないわよ。言っても聞かないなら、後悔するのはあんたなんだから」

「後悔なんてしない。おまえ一人を戦わせる方が、やっぱり後悔するよ」

「……勝手にしろ、このバカ」

どんな顔をして、弓坂がそれを言ったのかは解らなかった。顔が見えないようにそっぽを向いて、さらには座り込んだ姿勢まで作用している。

知らなかった。

こいつって、こんなに小さかったんだ。

どうでもいいことを思いながら、少しでも休むことにした。薄い壁を一枚隔てた向こう側にあるのは死地。一歩踏み出せば逃げ場などない。だから今は少しでも休もう。柄にもなく気持ちを吐き出したら随分と疲れてしまった。

ほんの僅かな幕間。

一瞬の休戦。

何も解決していない、むしろ絶望的な状況下でありながらも俺は——今が永遠であればいいと心のどこかで願っていた。

17／静謐の狂戦士

／17

——ぎいぎいぎい、ぎいぎいぎいぎいぎいぎい。

これからの目的として最優先にすることは、負傷した生徒の手当てだと弓坂は言った。

斬られた生徒がいたのはこの教室だけではなく、他の階の他の教室にも同じ状態で倒れた生徒は多々見受けられたという。その生徒達を上階から順番に処置していく内に、さっきの状態になったらしい。残るは今入るこのフロアと、後はこの下の階。

曰く、魔術師でない人間は当然のように魔術への耐性がない。長く結界に共鳴していれば体の方が強制的に機能を落とすものだろう。弓坂が言うには結界が発動してからそろそろ二時間が過ぎようとしている。人形にされた生徒達が直に動けなくなる今の頃合が行動を起こすには丁度のタイミングだった。

——ぎぎぎ、ぎぎ、ぎぎ、ぎぎぎぎ、ぎ、ぎ。

こんな時でも暢気にチャイムを放送する校舎内。その鐘の音が下校時間を報せている。この鐘で下校する生徒が一人でもいるなどとは思えないが。

「それじゃあ、そろそろ行きましょう。今までの分を見てたら、放っておいても大事には到らないと思うけど念の為よ。万が一ってこともあるし。この醜悪な人形劇を用意した奴も、待ちくたびれてる頃だろうしね」

——ぎぎ、ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ。

「ここまでやられたんだから、しっかりやり返してやらないと気が済まないでしょ。お互いに」

——ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ。

「ねえちよっと、聞いているの？ さっきからどうしたのよ」

「いや、別に……なんでも」

——キィ——……………

何でも、ないのか。

いや、そんなことはない。確実に可笑しい。さっきからずっと、この音が聞こえてる。それも少しずつ纏まりを持って、少しずつ音が線になって。乱れていた小さな音が一筋の綺麗な波を響かせ近づいてくる。

鉄の音のようだった。

先端の尖った鉄を床なり壁なりに擦らせながら誰かが引いているような、そんな音。初めは遠くに聞こえていたそれがここにきて確実に距離を縮めてきているのだ。まるで足音。その存在を報せる存在の鼓動。耳の痛くなるようなその音が、誰かの悲鳴みたいなその声が——

「後ろだ弓坂！」

「へ——？」

背にした壁に嵌め込まれた、スリガラスの窓に人影が映る。影は手に持った刀のシルエットを上段に構え、振り下ろす力を腕に伝える僅かな停止の姿勢でそこにあった。その影が、瞬きを挟まぬ間に掲げた刀を振り下ろす。

瞬間の判断で駆け、刀の軌道から弓坂の体を弾き飛ばす。半ば押し倒す形になったがそんなことを気にしている場合ではない。斬られた窓は静かに断裂を許し、壁もまた同じ様に、音も立てずに亀裂を刻んだ。

壁を一枚隔てた廊下と教室。

二つを繋ぐ鉄の刀身が、沈んでいく夕陽に照らされて鈍い輝きを反射させた。

戦慄する暇も無い、状況を一瞬で了解した弓坂がするりと体の下を抜け出して前方の扉に走る。同じ様に、俺も弓坂を追いかけた。

立ち上がる直前にもう一度それを確認する。学校なんて場所であつて異彩を放つ、銀色の鉄。

その刀身は、記憶に新しい傷口に相応しい形状を模していた。

想像通りの得物。想像通りのその切れ味。あまりに思い描いた光景と同じ現実がそこにあつて、それはもう一つ、悪い予感的中していることをここに表している様に思えて目を逸らす。これを振り下ろした見覚えのある影が、姿を現したときに彼女と別の様相を呈していることを祈つて、教室を出た。

悪い予感は、いつも当たるものなんだといつも思い知らされる。

教室を出て初めに目に入った少女の姿は、きつと今どんな現実よりも見たくなかった形をしていた。

黒いブレザーの下、白いシャツに血飛沫で鮮血色の斑模様を施し、白い頬に花卉のような血の痕を残した鏡岬深紗希が刀を携え虚ろな瞳をしてそこにいた。

「籠野くん……なにしてるの、こんなところで」

いつもの調子外れな声とは打って変わって、生気を感じさせない声が問うてくる。

「あの子……普通じゃない。離れて、静月。ちょっと大きな力を使うわ」

一歩前に出る弓坂。

本気の横顔が、彼女の言葉が嘘でないことを物語っている。俺が見ても異常だと解る鏡岬の様子に、逃げるだけの手段が有効でないと判断したのだろう。状況から殺し合いになるようなことはなくとも、ここでの戦闘は避けられない。

何が異常なのか。

考えるまでも無い、全部異常だ。

この結界の中にありながら言葉を紡ぐ意思。教室の外から内部にいた俺たちの存在を看破するだけの洞察力。手に持つ刀こそその象徴だが、それすら凌駕する異常が鏡岬深紗希自身と言えた。

臨戦態勢で構えて前に踏み出す弓坂を、俺は片手で制した。

「悪い、弓坂。ちょっと下がっててくれ」

「え？　ちょっと、どういいうつもりよ」

いいからと力尽くで弓坂を押し戻す。

俺の態度が珍しかったからか、弓坂は存外大人しく引き下がった。その怪訝な表情に應えるだけの余裕はなく、今はただ視線を合わせるだけで直ぐに眼前の少女に向き直る。鏡岬はぼんやりとした目で、依然としてこちらを眺めていた。

「約束したよね、今日は練習、付き合ってくれるって。なのにな、もう放課後だよ」

「悪いな。ちょっとした事情があって行けなかったんだよ。おまえこそ、なにやってんだよ。そんな物騒な物持って。練習はいいのか、そんなの剣道には使わないだろ」

「練習なら、したよ。みんなと」

かちり、と鉄の音。刀を握る手に力が入った音。

一秒を経て、鏡岬の纏う空気が変わった。柄を握っただけで自己を作り変える、剣士として一流の者が成し得る自己暗示。鏡岬がその域に達していたとしても驚きはしない。しないが、彼女の放つ氣に当てられて身動きが取れなくなったのは、それとは関係のない問題だ。

弛緩していた空気が張り詰め、少女の視線が刃物の鋭さに研ぎ澄まされる。

殺し、殺される。一步踏み出せば容易に死線を越えてしまう一触即発の状況。

「みんなが練習にきてくれないから」

あまりにも自然な動きだったから、反応できなかった。

流れるような体捌きは、刃を持ち上げる様子に全くと云っていいほど危機を感じさせず対応を遅らせる。ぶれることのない視線。剣道特有の脚捌きから――ノーマーションで飛び出す体に、瞬間の対処が間に合わない。

「あたしが、わざわざ教室まで行ってあげたんだよ」

流れる体が懷に滑り込む。場の全てを支配するような圧倒的存在感と気迫を伴った鏡岬深紗希の眼光が、獲物に杭を打ち込む。動けない。反応が間に合わない。銀光が迫る。振り上げられた刀身はそのままの軌道でこちらの首を刎ねるだろう。

「だからさ、籠野くんも——」

煌めく切っ先が殺意を帯びる。鏡岬は最後まで俺と目を合わそうとしないまま——

「——練習、しょ」

冷たい刃が皮膚に食い込む。肉を裂いて止まらず深く深く切り込んでくる。動脈を切り裂き鮮血の花を咲かす。血の飛沫が霧に変わってもまだ止まらない。鉄の刀身は肉を抉り、首の骨を切断して振り抜かれる。——殺人の一刀が無情に首を弾き飛ばした。

「なにぼけっとしてんのよあんたは！」

——そんな、幻を視た。

手首を強い力で握られている。呆けた意識を回帰させるその声のする方へ体が引かれている感覚。寸前に虚空を薙いだ刀身が視界の端に映った。それに気付いてぼんやりと、自分がまだ生きているんだと他人事のように自覚した。

救済の引力は少女の腕から。傾ぐ姿勢が九死に一生を得る。

完全に諦めていた。助からないと思わされた。視線を交えるにも至らない。そんな一流の対決になるべくもないのだ。元より剣を持った鏡岬に俺が叶うわけがない。彼女の剣に首を狙われたのならば素直にそれを差し出す。抵抗など無駄に等しいならば、足掻くことなく敗北を受け入れよう。

——命を賭した判断でさえ、一瞬で諦観に変えさせる。鏡岬の覇気は、それだけで身を滅ぼす鋼の刃だった。

長くモノローグを挟んで停止していた時間が再開される。肩を打ち付けた痛みで現実を意識を呼び戻した。さらにまだ引力は続く。脚が伸びきる前に後方に体を引かれて後退を余儀なくされる。勢い余って尻餅をついた先には弓坂の背中があった。

「共界回路連続機動、充填、一斉解放——！」

刀を振り抜いた体勢の鏡岬は瞬間的に無防備に曝される。その隙を最大限に活かすために間を与えず弓坂が詠唱を紡ぐ。突き出した掌、手首を逆手で固定している。夕焼けに劣らず光を放つ赤い瞳。

世界と連結した魔術師の手から放たれる、火炎の弾丸。それは一撃に終わらず、二弾、三弾と弾幕を生む。

鏡岬は——その悉くを弾いて回避していた。目まぐるしい速度で閃く刀身は、一発たりとも赤い弾丸の到達を許さず切り捨てていく。バックステップで距離を作りながら最小限の動きで躲し、往なし、弾く。そうしてとうとう剣を持った少女は全ての攻撃を無力化し切って見せた。

両者の間にもう一度距離が開く。最初に対峙した間隔と同じ。一瞬の攻防の跡は禍々しく、弓坂の魔術を鏡岬が防御したことにより廊下は至るところに窪みや焼け跡を作っていた。

「なによ、あれ。まるで化物じゃない」

腕をだらりと下げて、絶望的な呟きを弓坂が溢す。

化物と、その剣の腕を称するのは決して間違ではない。鏡岬深紗希の実力は紛うことなく本物。そこに加えて日本刀という凶器を与えてしまえば、それは既に殺人鬼に同じだ。……さらには、今日の鏡岬は様子が可笑しい。いくら全国級の実力があるとはいえ、条理を振じ伏せた超常に刀一本で太刀打ちできるなんてことが有り得るのか……？

「……結界のバックアップね。信じられないけど、この結界に意識を支配されず、どこか共界魔術の域にまでそれを持ってくるなんて……有り得ないわ」

鏡岬が片足を上げた。準備運動で筋肉を解しているようなその動きは次の瞬間には必殺の一撃に繋がる一步に変わるだろう。

「厄介過ぎるわ。ここは引くしかない。悔しいけど……真っ向勝負では敵う気がしないわ」

ほら早く、と急かす弓坂。だが、それには従えない。ここで鏡岬

を無視して逃げるなんてことは、してはならない。

今にも飛び出しそうな鏡岬を見据えて、精神を研ぎ清めます。外界からの感情を完全に断ち切る前に一言、弓坂に頼んでおかないといけないことが残っていた。こんなことを言えば怒るだろうな、と思ったが、今は迷っている暇がない。

「鏡岬の相手は俺がする。隙を見付けたら、その隙を逃げ切れるだけのものにしてくれ。方法は任せる」

「正気？ わたしが言ったこと聞いてなかったわけ。それとも忘れたのかしら。自分が首の皮で生き繋がったんだってこともいっしょに」

今はそんな嫌味を言っている場合じゃないだろうと思いながら、それは口にしない。あくまで冷静に振る舞う。

「どの道、ただ逃げるだけなら直ぐに追い付かれるだろ」

「……だからって、あれには敵わないわよ。隙なんて出来やしないわ」

「ああ。剣の腕なら敵わない。それは絶対だ。だから——俺が勝つ方法は一つだけ、同じ物では敵わない、だったらあの刀よりも優れた武器を用意する」

視界の中から——鏡岬が姿を消した。這うような姿勢での疾走。

剣道とは無縁の足運びは一度こちらの死角に潜る為。彼女なら刹那の隙があればそこに衝け込んで敵を打倒できる。半分ほどの距離を縮めて背筋を伸ばしました、姿勢を変えずにスライドする歩方。距離感が狂わされて対応が困難になる。

一瞬だ。

この一瞬の内にイメージを展開する。

再生しろ。

作り出せ。

鏡岬を打ち負かすことの出来る、伝承されるその奇跡を——。

「行くぞ……神話、再生」

頭の中にある回路を繋ぐ。世界に刻まれた神秘の回路と己の回路

とを接続し、その奇跡を使役する。現実ならば剣を交えることさえも叶わない。だがどんなに強大な相手であっても想像の中でなら凌駕するのは容易い。神話に語られる奇跡を使役し、本来ならば敵わぬ相手を迎え打つ。

作り上げるのは神造の剣。かの英雄が持ち得た無敗の宝剣。鏡岬に勝つにはそれでもまだ足りないかもしれない。だが、モノを手に入れた後は俺自身の腕に全ての責任が課せられる。

無理だとは思わない。何度も打ち合ってきた。ならば恐れることはない。

ここにいるのは化物なんかじゃなく――

「……っ……この、こんなときに」

頭痛が、鏡岬の飛び出すタイミングと重なる。一撃で決めなければならなかった。戦いが長引けば負けるのは千回中千回俺の方だ。打ち合う数が増えればそれだけ不利になる。

視界の外側から跳ね上がってくる剣を弾く。自分の作ったものを見る余裕はない。打ち合った感触だけで次の動きを読むしかない。正直この先は運次第だ。この鏡岬が、まだ俺の知っている鏡岬深紗希なら刀身の軌道が重なり合うのは必然。

左に体を捻る。構えは下段。渾身の力で剣を振り上げ――落ちてくる鏡岬の刃を受け止めた。

衝撃に破裂する窓。硝子の散らばる音と舞い上がり煌めく輝き。その粒子の光は硝子だけでなく――互いに碎け散って塵に変わった鉄も含まれていた。二つの刃は共に破碎したということ。交わった瞬間にそれぞれがその存在に耐えきれなかった。

一方は杜撰な魔術により再生された神話が、それを為し得るに相応しい供給を得られなかったから。

一方は無理な魔術の付与に耐えきれず、その強度の限界が超常の負担に耐えきれなくなったから。

塵に変わる二つの剣。瞬間、目が合う。

「な――あ、ぐあ……………」

気を抜いた一瞬について鳩尾にめり込んできたのは、砕けた刀身に対して残された柄。それを逆手にして武器にする発想を一瞬で繋いだ鏡岬の思考にこそ、ここは驚嘆すべきだろう。

「静月、そこから離れて！」

言われなくても既に鏡岬とは距離を置いている。その、僅かな隙間に飛び込んでくる赤い閃光。弾丸は鏡岬と俺との間にさらなる空白を作る。刀を失った鏡岬はそれを回避する為に下がるしかない。結果として両者が隔てるのは教室一つ分の距離。

弓坂の隣まで行って脚を縛れさせた。無様に転げながら見たのは、教室前の廊下に浮かび上がる三つの魔法陣。

「術式連結……完了。同時起動開始……完了。魔力充填——共界回路連結起動！」

旋回を始める三つの輝き。拡がり、互いに呼応する理を覆す無法の徒。影響し合い響き合い、輝きを増した円陣に世界からの莫大な供給が加わり、弓坂の術式が発動する。

赤い光は見た目に違わぬ高温を宿し、急速回転の内側から魔術によって生み出された炎が沸き上がり——コンマの後、視界に出現した巨大な火炎の柱。それは確かな隔たりとなり、世界を二つに分ける。

炎が消えた先に残ったのは、一階から屋上までを穿たれた煤に黒く汚れた校舎の内側だった。

「これは……ちよつとやり過ぎじゃないのか？」

「これぐらいしないと、あれは止まらないわよ。いくら化物染みてるからって、この距離を跳躍するなんて滅茶苦茶はないでしょ。ほら、行くわよ」

走り去っていく弓坂。その姿にすぐについていく気にはなれなかった俺は、随分と遠くに行ってしまったように感じる友人に視線を投げ掛けた。鏡岬は、何かを言いたげにこちらを眺めている。その姿に罪の意識があって、だからすぐには走り出せなかった。

弓坂の怒声に呼びつけられて、ようやく踏み切る。鏡岬に背を向

けて、俺は逃避の道を急いだ。

負傷した生徒達に共通していたことは、その傷跡がどれも長物による刀傷だということともう一つ——注目すべきはこちらの方である——全員が共通して剣道部の部員ということだった。予想は出来ていたことだが、一階から全てのフロアを確認してみることですることがはつきりした。

外は夕暮れ。

西日に染色された廊下で、弓坂が呟いた。

「言うまでもないことだけど、やったのは鏡岬深紗希で決まりね。……ていうか、彼女の剣道の実力って全国レベルなんですよ？ 道理であれだけの化物が出来上がる訳よ。魔術師に生身の人間が刀を持ったぐらいで抵抗できるなんて、本来ならありえないからね」

当然のように、弓坂もその結論に行き着く。なんら驚くことはなかった。廊下に出るより依然に、教室の惨状を見ただけでこの結果は見えていたのだから。ただ、今でもまだ信じられない。鏡岬が、こんな辻斬りめいたことをして回っているなんてことが、どうしても。直接彼女に殺されかけても、それでも信じられなかったし、信じたくなかった。

「どうするんだ、鏡岬のこと」

「どうもしないわよ。怪我した生徒は全員手当したんだから、後はこのふざけた結果を破壊するだけ。式が組まれているのはおそらく結界の内部だから、静月なら見付けられるでしょ」

「……あ、ああ」

「勿論、簡単にはいかないでしょうけどね。多分式の場所にはロッ

ドレイルが待つてるでしょうから。そうなれば戦闘は避けられない。どうにかして結界を解いて、その上で奴を倒す。それが正攻法ね……って、聞いているのあんた？」

「あ、いや……悪い」

正直言っであんまり聞いてなかった。結界の式がどこかにあって、それを壊す際にはあの魔術師と戦わないといけならしいことは漠然と伝わったのだが、それ以外はいまいちよく解っていない。いや、弓坂が言ったのは事実それだけなのだが、その危機感や緊張感に共感できていないというのが正鵠を射ている。

俺の頭にあったのはこの先にある決着ではなく、もっと他のことだった。弓坂には悪いが今はそれ以外に考えられない。

場の空気を可笑しくしてしまうことも、弓坂の機嫌を損ねることも承知の上で俺は言った。

「俺、鏡岬に会ってくるよ」

「何言ってるの？」

まあ、そりゃあやっぱりそんな反応になるよな。

「いい？ わたし達の目標はあくまでロッドドレイルを倒すことなの。寄り道をする必要なんてないでしょ。ただでさえ、あの鏡岬って子は危険なのよ。本来なら結界に引き出された感情は暴走して理性を食い殺す。そうすることで術者の意思に従う人形を作るのがこの結界なの。だってのに、こいつは自分の意思を持って動いてる。感情に支配されず、結界からの供給を受けて、魔術師と同等の力を持って純粹に目的を遂行してる。そんな危険な奴に自分から関わるなんて自殺行為よ」

「……なんで、鏡岬は感情に支配されなかったんだ。俺と同じで、共界性が薄かったのか？」

「いいえ。全くの逆よ。彼女の場合は日常的にその感情を飼い慣らしていたのよ。だから突然結界から関与されても対応できたし、それを共界魔術の域にまで昇華させることも出来た。……やってることを見ると、大方結界の共感設定は負の感情だったんでしょね。」

そんな人間の前に出向いて、無事で済むはずがないでしょ」

日常的に、その感情を内に溜め込んでいたから。膨れ上がったそれを制御することが出来た。

そんな風になってしまいうまで、鏡岬は抱え込んでいたんだ。現状を見ればどんな感情が彼女を突き動かしているのかなんて容易に推察できる。何度言っても練習に参加しなかった部員達。いつも笑っていた少女は、影で堪えていたんだ。ずっと長い間。一人ぼっちのその孤独に。

気付いてやれなかった。

それは、間違いなく俺の責任で。

きつと鏡岬が一番恨んでいるのはこの俺だ。

だって、剣道部の部員は誰も殺されていなかった。全員傷を負わされただけで済んでいたのに、鏡岬は俺を殺そうとした。それが何よりも素直な感情の表れ。鏡岬は誰よりも俺を恨んでいる。そうだ。当たり前じゃないかそんなこと。

彼女が一人だということを知った、その上で、俺はそれでも何もしてやれなかった。

一人ぼっちで竹刀を振る少女の姿を見てきたのに、俺はその孤独を彼女に強いていたんだ。

殺されて当然。恨まれて相応。――もしも、鏡岬が俺のことを掘り所にしていくれたなら。彼女の感情を抑えていた何かを決壊させたのは、間違いなく俺の行動。そして、手遅れになるまでそれに気付けなかった俺の所為で今がある。

だったら、放っておくわけにはいかないじゃないか。

この結果を潰せば、鏡岬の心は感情の支配から解き放たれるだろう。でもそれじゃ駄目だ。問題は何も解決しない。今日の鏡岬を作り出す感情はまだ、彼女の中に蟠ったままだから。放っておいていいわけなんてない。

けれど本当は、そんな正義感なんて感じていなかった。

全部解っていたけれど、それはやっぱり自業自得。自分の感情を

抑え切れなかった鏡岬に責任がある。俺がそんなことを言える立場ではなくても、それでも言ってやらないといけないんだと思う。過った友人を連れ戻してやれるのは、今この世界で俺だけなのだから。約束があった。

守らないといけない、その約束が。

もう随分時間が経ってしまったけれど、まだ彼女がそこで待っているなら果たそう。

することはいつもと変わらない。

いつものように、馬鹿みたいに強いクラスメイトの剣道少女と剣を交えるだけで十分なんだ。

「危険でも何でも、行かなきゃいけないんだ。あいつはいつも、あの場所でひとりぼっちだから」

その孤独を、弓坂が解らないとは思えない。

誰にも理解されない苦痛はきつと、彼女も知っているはずだから。「約束してるんだよ、今日こそは行ってやるってさ」

弓坂は何も言わない。やはり怒っているのだろう。それはそうだ。明らかに俺が悪い。俺が弓坂の立場ならとくに怒鳴り散らしてる。それくらいに自分が馬鹿なことをしているのだとは解っていたし、だからこそ引き下がれない。

そうまでしても守らないといけないものは確かにここにある。

「それでも駄目だって言うなら、殴ってくれていい。魔術でも何でも使って言うことを聞かせてくれ。そうでもしてくれないと、俺は自分の意思であいつを無視するなんてことは出来そうに無い」

弓坂は――言わずともそのつもりとばかりに胸倉を引っ掴んだ。た。

引き下げられる視界に感情を抑えた赤い瞳が覗く。

目が本気だった。当然だ。これは魔術師同士の戦争で、遊びじゃない。私情を巻き込んで愚かな選択をしようとしている俺は、この場で斬り捨てられるのが道理。もしかしたら弓坂はそのつもりなのかもしれない。

両手で襟を締め上げられ、次の一撃に勢いを溜める弓坂が体を引き――頭蓋がカチ割れるかと思うくらいの衝撃が、額を襲った。いわゆる頭突きである。これが滅茶苦茶痛い。本当に、廊下を転げ回って悶絶するぐらいに。

しかしそれはまあ、当然といえば当然で。

「好きにしろ、バカ。その代わり死ぬんじゃないわよ。そんなことになったら、式の場所を探すのが大変になるんだから」

涙目になるくらい自分も痛かったんだから、弓坂の放った頭突きが渾身の一撃でないはずはなかったのだ。

十

剣道場の中は、物静かで荘厳な普段の空気を何倍にも重苦しくさせていた。

畳の上に散らばる何本もの――恐らくこの剣道場にある全ての竹刀が――全て死んだように横たわっている。まるで墓場の墓石が全て倒されているかのように、この場においてその光景はあまりにも背德的に映る。剣の死体がそこら中から放つ異彩。それこそがこの剣道場を、結界の中にあつてさらなる異界へと創り変えていた。

それはいつも見ていた剣道場の光景とはどこまでも異なり、踏み込んだ場所の空気は普段と別物。

あの肌を痺れさせる緊張感もなければ、心の中を空っぽに洗われるような神聖さもない。

空虚で物寂しい、誰かの孤独をぶちまけた宇宙。

呼吸をするだけで泣きたくなくなるような、絶望の世界。

少女はいつもここで一人。少女はいつもここで一人。

悲鳴を上げて剣を奮う。

そうすることだけが――逃げ場の無い孤独に押し潰されない、唯一の方法だったから。

鏡岬深紗希は剣道場の端で立っていた。瞳に何を映すこともなく、今入ってきたこちらの姿さえも遠い光景のように、眩い何かを眺めるように目を細めて。ずっと、一人ぼっちの孤独を見ていた。

俺は道場に上がり、鏡岬と正対した。一本、足元に落ちた竹刀を拾い上げて。それが始まりの合図。幾度となく打ち合ってきたこの場所で、今日もまたいつもと同じ様にぶつかり合う。剣と剣をではなく、心と心を。

まだ、少女に彼女の心が残っているのなら。

俺にまだ、彼女の心に共振できるモノが残っているのなら。きつと、全て上手く行く。

――戦いは音もなく始まった。

目を見開いた鏡岬が、先刻と同じ歩法――しかし足場は奔り慣れた畳の上、速度は比較にならない――で滑り込んでくる。いつ拾ったのか。手に持つ竹刀が鞭のように跳ね上がる。一瞬で切られた口火を見逃せば、間違いなく死んでいた。

けれどそうはいかない。

この場所で自己を覚醒させることに關しては、曲りなりにも俺も鍛錬を積んできたはずだ！

「く……う……！」

脇腹に飛び込んでくる殺意の一撃を受け止める。だが鏡岬の振った一撃は、普段の数十倍に増した威力と重みを伴っていた。受け止めたのではなく、防御した訳でもない。竹刀を介してその衝撃が腕に伝わり、全身を駆け抜ける。

続いて繰り返される斬撃も同じ様に身を庇うことしか出来なかった。

頭上から全体重を乗せて振り下ろされた一刀は、もはやこちらの体を紙切れも同然に薙ぎ払う。

重力が断ち切られた。そんな気分で流れる天井を見る。これが、宙を飛ぶという感覚なのだと思い知った。脚が着いていない。体が浮遊している。風に運ばれる枯葉のように、体が壁に打ち付けられるまでの飛行を果たした。

「共界回路起動、充填——」^{セツト}

弓坂の声。世界に呼びかける魔術の詠唱。

「止めろ弓坂！」

それを、肺が潰れるような痛みに耐えて制した。

「おまえは手を出すな。これは俺がやらないといけないことなんだよ！」

言っている傍から、顔の正中線上に疾風を纏う刺突が繰り出される。

寸前の反応でそれを躲し——顔の横に突き立てられた銀の刃を見る。これがカラクリ。意識的にか無意識的にか、鏡岬は手に取った竹刀を鉄に変えている。自ら刀を生成する。それが、鏡岬の行っている魔術だった。

「こ、の……やろ——！！」

竹刀が突き刺さったままではこの一撃を凌ぐことは出来ない。

倒れた姿勢から横薙ぎの一振りで鏡岬の横腹に切り込む。——が、その切っ先は空を切った。

攻撃を察知した鏡岬がその手から竹刀の柄を離し、それを放棄したのだ。

全ては一瞬のこと。俺が振り上げた竹刀は鏡岬に斬り付ける寸前で得物を見失い、鏡岬は前のめりの体制から跳躍してそれを回避する。たったそれだけの事実が、現実を超越していた。鏡岬が後方にした跳躍は本来有り得ない距離を弾け、一気に道場の両端に二人の距離を広げた。

それは必殺の一撃を放つ為に取った、決死の間合い。立ち上がる。

同時に、鏡岬がスタートを切る。その手にはまだ竹刀が握られて

いない。

剣を構える。迫り来る疾走を迎撃する体勢で意識を一点に纏める。右手と、左手。無駄の無い動きで鏡岬が足元の竹刀を拾い上げた。二刀流を確認して正眼に構える。半歩右足を後ろに引き、体重を傾ける。向ってくる少女の姿を真っ直ぐに見据えて次の一撃に意識を集中。後ろに軽く預けていた体重を前に持って――

鏡岬深紗希が、手にした竹刀を投擲した。

高速で飛来する二本の剣。鉄に加工された竹刀は失速することなく同時に、こちらの右肩と左肩を射抜く弾道で猛進する。無傷で躲し切れることは出来ない。一本は竹刀で弾き、もう一本は体を捻って回避する。

右肩への投擲を弾き、その勢いで体を捻る。完全に避け切ることには叶わない。左肩を掠めていく鉄の刀身に熱を帯びた痛みを覚えた。おそらく、肩口からは鮮血の飛沫が上がっていただろう。痛みはまだなく、熱の段階で止まっている。

その熱が痛覚に変わる前に。

「――ッ！」

続けて視界に飛び込む、四本の切っ先。

右肩、左肩、右足首、左足首。

四肢の稼動を司る部位を狙って正確に放たれた四刀。それだけではない。走り寄ってくる鏡岬は次々に竹刀を拾っては投擲してくる。全てが魔術の効果で鉄となり、凶器は唸りを上げて飛び立った。

「ぐーう……………あ」

四本。

六本。

八本。

急所という急所に狙いをつけて投擲される死の鋼鉄。

鉄の雨に打たれて、躲すことなど思考に無かった。俺にできることはせめて致命傷に届かぬよう最大限に攻撃を受けきること。その度にダメージは蓄積されたし、意識を焼き切る激痛にも襲われた。

そして漸く止んだ銀の流星群。

星の群れの向こうから、姿を現した鏡岬。

上段で飛び込んでくるその無防備な体にカウンターを入れるほどの余裕は無い。腕を上げるだけで意識が飛ぶような痛みを伴うのだ。隙を突いて切り込もうなんて、できるはずがなかった。

稲妻のように落とされる一撃。

竹刀と竹刀が触れ合って音を立てる。その一撃で、こちらの竹刀に亀裂が走る。それでも正面から受けないよう、往なすように防御はした。それでも、何本もの鉄を切り流した竹刀には限界がきていたと、ただそれだけ。

上から来る一撃に吹き飛ばされる。

踏み止まって右からの横薙ぎ。受け流して体勢が崩れる。左から振り子のように戻ってくる斬撃に意識が掠れた。が、下から跳ね上がってきた切っ先に戻される。再度上段からの一閃に——とうとう竹刀が破碎した。

袈裟に斬られる体。心臓にも到達しかねない一撃が致命傷にならなかったのは、鏡岬の剣を受け止める際に体が後ろに飛んだ為。怪我の功名とでも言うのか。まだ、この命は繋がっていた。

噴き出す赤色の液体。

霧状に舞った鮮血が鏡岬を濡らす。

その光景を一瞬だけ目に入れて、距離を取る為に後は無惨に転がった。傷が畳みに触れる度に痛む。だが止まれば直ぐに止めが来る。意識が飛ぶ激痛に耐えながら、もう一度大きく距離を取った。

「はあ……か、は……あ……ぐ……あ……あ」

——これが、力の差。

絶望的で圧倒的な、力による蹂躪。

元から俺は鏡岬に一本だって入れたことがない。剣の実力で上下を競うなら待っている結末は目に見えて明らかだ。敵うはずなんて初めからなかった。鏡岬に剣道で挑めば確実に負ける。それは必然。恥じることはなく、それは誇ることだ。そう——何年も努力を続け

てきた彼女の、それこそが誉れであるのだから。

達人の死合いに於いて勝負は最初に視線が交錯した瞬間に決まるという。

鏡岬がその域にいるのなら、俺が今まだ意識を保っているはずなどない。こんな競り合いになんてなるはずがないのだ。だが現実はどうだ。籠野静月はまだ生きている。生きて、彼女と対峙している。無様に追い込まれていようとも普段なら——俺はここまで鏡岬と打ち合ったことなんてなかったのだ。

それはつまり。

この戦いが、剣術を競い合うものではないということ。

ならば勝機はある。

こと剣道では敵わなくても、これが互いに超常の程を衝突させる戦いならば不可能じゃない。

それが、鏡岬深紗希の失態だった。結界の魔術効果を得て超越した彼女がもし、本来の方法で戦いを挑んできたのなら俺は一瞬も持たなかっただろう。……いや、それなら魔術は必要にならない。鏡岬が鏡岬であったなら勝敗は揺るがないのだ。だから、これが魔術での戦いだというなら勝機はある。

可能はずだ。

例え不可能でも、可能にする。

それを奇跡と呼ぶのならば尚のこと為し得て見せよう——この身には幾千もの奇跡が、語り継がれてきた夢の形が記されているのだから。

「……共界、回路」

果ての意識を彼方に還す。自己の変格は内なる世界の循環を以て遂行される。故に共界では届かなず、受け継がれる神話を具現化するならばそれは、己自身が世界と成るしか方法はない。

ならば。

クローズド サークットオン
「共界閉鎖、循環開始……神話、再生」

アクセス

己が内を廻る世界に、自己を共振させる。

先に動いたのは鏡岬の方だった。

散らばる竹刀を手当たり次第拾い上げては投擲。直進と攻撃を同時に
行う破滅の疾走。鉄の刃が乱れ飛ぶ。出鱈目に思えてその実、
正確に急所を狙い打つ死の雨が弾幕を張って襲いくる。

だがそれを恐る意識はなかった。

何本の剣を以ても敵わぬ最強の一振りを生み出せばいい。数に頼
るのは実力差を埋めるため。ならば逆も然り。数を凌駕するのは圧
倒的なその質。一本の、ただ一薙ぎで振じ伏せる。

俺がすることは決まっている。俺はただ、千本の剣を以てしても
越えることの出来ない最強の一本を再生すればいいだけ。

竹刀を一本拾う。触媒にはこれで十分。何かを介してでしかまだ
完全な再現は出来ない。媒介は神秘の前に存在を保てず朽ちるだろ
う。だからそれまでが勝負だ。

尖端をこちらに向けて向かい来る何十を数える鉄の煌めき。その
全てを意識の外に弾き出して、見据えるのは自己の内側のみ。

幻想と伝承。

夢で現実を紡ぎ——ここに神話を再生する——！

「は——、————あ！」

柄を握る手に力を込める。全身の血が沸き上がるように発熱し、
ヒトとしての機能が少しずつ停止していく。体は、この瞬間奇跡を
為し得る為の回路に。余計な機能は必要にならない。呼吸は止まり、
稼働するのは脳と心臓のみ。循環する血液に逆流して魔力が迸る。

手に取る竹刀を、神代の奇跡へと変格。

全工程終了。——神話再生開始。

生み出した幻想が碎ける前に決着をつけないければならない。両者
の間を隔てるのは数十の剣の群れ。その全てを打ち砕いて前へ。格
の違いは歴然。飛来する鋼鉄は担い手なき鈍^{なまくら}。迫る銀の鉄屑を両断
して走る。弾幕に自ら飛び込み、その悉くを打ち落とす——。

一刀。

二刀。

三刀。

四刀——無限に思える剣を一心に砕き続ける。

そうして遂に、降り注ぐ鉄の雨が止む。鉄の砕けた砂塵は霧のよう
に銀色の光で一瞬世界を包み込んだ。その影から飛び出す少女の
体。——通常の倍にもなる長さの大剣を両手で握るその姿が、大
きく上段に振り被った。

同時に足を踏み出す。

同時に剣を振り抜く。

交錯した刀身が火花を散らして赤く輝く。鉄の弾ける音。それが
限界値を超えた脳に響いて内側では痛覚の刺激に変わっていた。そ
うしている間にも次の攻撃。気を抜くことは許されない。ここは瞬
きも呼吸も許されない、一寸先は死の世界。

軌道が入れ替わる。振り下ろした姿勢の鏡岬は下段から、振り上
げた姿勢のこちらは上段から。

そしてそれが、最後の激突となる。

刀身が交わった瞬間に響き渡る鉄の碎ける断末魔。

二つの超常とそれを紡ぐ幻想の終局。行き着く先は双方の霧散。

大気に亀裂を走らせる音と、世界を焼き払うような炎の迸りが、
この戦いの終わりを告げた。

19／彼女の笑う世界

／19

終局は剩りに呆気なく、ついさっきまでの打ち合いが白昼夢に思えるくらい静かに訪れる。鏡岬の剣は硝子細工のように柄まで砕け落ち、今はもう跡形も残していない。そしてこちらの魔術にも限界がきていたらしい。夢が覚めるのと同じく、元からそこには何もなかったというように剣は実体をなくして光の砂に変わっていく。代替に利用した竹刀は、その色を完全に奪われて消失した。

これが結末。

互いの魔術が消滅し、爪痕は鏡岬の体に大きな袈裟斬りの傷として残されていた。一刀両断。彼女の剣を切り裂いた神話はそのまま少女の体を袈裟に斬っていた。丁度、他の剣道部員が斬られたのと同じように。だが決定的にこちらの方が深く。少なくとも、立ち上がって直ぐに再戦というわけにはいかないだろう。

鏡岬深紗希と魔術を競った、その結果だった。

「つー……さすがに、ちょっとやばいな」

頭が痛い。それに他の、全身あちこちの箇所が痛い。それも当然か。あれだけの攻撃を受けてなんともない方が可笑しな話だ。

畳の上に腕を投げ出して倒れると、弓坂が駆け寄ってくるのが見えた。声を出して無事を伝えるのも辛い。表情を少しだけ綻ばせて、心配はいらないと伝える。

「本当に、信じられないわよあんた。魔術師でもないのに、神話の再生なんて。どうなってんのよ」

「……あの魔術師は、俺はただの人形だって、言ってた。……だから、そういうことなんだろ」

「もうっ……意味解んない」

弓坂は苦笑に唇を尖らせて、ついでに顔を明後日の方に向けて逸らした。その状態で手を差し出してくる。立ち上がるのに力を貸してくれるということなんだろうな、と判断してその手を握った。もう自分には力なんて残ってないはずなのに、不思議と簡単に立ち上がれる。知らなかった。手を握る。なんてたったそれだけのことが、こんなにも頼りになるなんて。

「ちょっと、誰が肩まで貸すなんて言ったのよ。凭れ掛かってこないでよ」

「そう言われてもな……俺もこうしないと立ってられないんだよ」
無理し過ぎたかもしれない。魔術の使用だけならともかく、今回は物理的な損傷もあって体は深刻なダメージを受けていた。少し休まないと本気で危ないかもしれない。

少し、休む。

……けれど、どうやらそれはまだ、あいつが許してくれないらしい。

「え？　ちょっと何してるのよ静月」

「すまん弓坂、もう少し待っててくれ。どうもまだ、満足してないらしい」

肩口の大きな傷から血を滴らせて、指先まで流血で濡らす鏡岬が畳の上に立つ。本来なら意識はとくに途切れているはずなのに、ふらつく足元で必死に立って。少女はひたすらに真っ直ぐ、こっちを見ていた。

それが、鏡岬深紗希という少女。彼女はいつもこうして待ち続けていた。自分を認めてくれる誰かを。一人ぼっちのこの場所で。それを悲しいと思い、その姿を美しいと思う心があった。だから俺は——そんな孤独の中で笑っている彼女に、一度でいいから本気で笑って欲しい。こんな薄暗い悲しみの中でじゃなく、もっと暖かい、陽の当たる場所で。

その為には、あいつが立つなら俺も同じ場所に立たなくてはなら

ない。

考えてみれば、約束はまだ、終わっていないなかったのだ。俺は一秒だって、鏡岬と打ち合ってなどいない。なら——これから果たせばいい。果たさないとけない。

少女にとつての居場所であるこの畳の上で、彼女が孤立してしまわぬように。

手近な竹刀を二本拾って、片方を鏡岬に投げ渡す。

「こいよ、鏡岬。今日はとことん付き合ってやる」

約束があった。

鏡岬深紗希をこの場所で一人にしないという約束が。それを今から果たそう。誰一人として理解してやらなかった彼女の實力を、この身で体感しよう。そうすることが唯一、本当の意味で俺が彼女を理解する方法だと思うから。

震える指先が竹刀に伸びる。彼女は気付いていないのか。腕を滴る血液に。それとも何か、激痛さえも抑え込む彼女の想いが、強制停止を指令する脳を凌駕しているのか。

本来なら動くことも出来ないような状態の癖に。

無理をしている癖にその表情は——

「ずっと……待ってたんだよ、籠野くん」

正眼。

ぴたりと、震えが止まる。虚ろだった瞳に力が戻る。鏡岬本人が普段から持ち得る覇気が全身から立ち上がっていた。剣の柄を握ることでスイッチが入り、後はもう、その体は剣を振る為だけに使役されるのみ。

深く刻まれた傷も、魔術行使による反動も今の彼女にはきつと関係ない。それが鏡岬の辿り着いた場所だから。一人でいる孤独を打ち消す為に剣を握った彼女は——その行動で感情を殺す。痛みは少女を止める要因に為り得ない。彼女を止めようとするならばその方法はたった一つ。

この場所で、同じ戦いに身を投じて勝利するのみ。

鏡岬の構えに応えてこちらも正眼。しかし俺の方はそんなに綺麗な形にならない。剣を持つとも、こちらは自己を変格する術を持ち合わせていない。体が限界を越えているのは確かなのだ。

「……あたしはね、ただ」

ここにきて初めて聞いた、形を伴った鏡岬の声。綻、と音がして。

瞬間移動も宛らに、鏡岬の姿が目の前に現れた。

「誰かと、打ち合いたかっただけなんだよ」

右から来る面。腕を上げる体勢は鏡岬の傷を刺激する。本来なら動くことも出来ない体。いくら強靱な意志であれ、物理的に不可能な動きを肉体に強制することはできない。その為もあって本来の速度を伴わない攻撃に、こちらの回避が間に合った。

重なる竹刀。響き渡る鋭く心地のよい音。

伝わってきた剣の重さは今日のどの一撃にも勝る。

「ずっとずっとずっと、寂しかった、怖かった、辛かった、苦しかった」

言葉の度に振り下ろされる剣は代償行為のようだった。

剣は一撃毎に重みを増していく。鏡岬自身の思いを吸って、加速するように。

「だけど誰も解ってくれなかった。あたしは寂しかったのに……なのに、誰も……！」

——正直、先輩とは剣道できません。

いつか廊下で聞いた声。

今日もまたどこかで孤立する少女。

痛々しいまでに笑っていた彼女。

内に秘めてきた想いが爆発して、その反動が腕を稼動させる。既に朽ちた四肢で動く少女は、自らの心を代償にして無理矢理に体を機能させていた。

「強さなんて要らない！ あたしはただ、みんなで剣道がしたかっただけなのに！」

——先輩一人でやってくださいよ、ずっと。

誰も少女を見なかった。その願いを、聞き入れることが無かった。後悔すればきりが無い。もしも、誰か一人でも彼女の心に気付いていたのなら、こんなことにはならなかったのかもしれないのに。その誰かに自分になり得たのだと思うだけで、悔恨に潰されそうになる。

剣を奮う、その度に飛び散る鮮血。

彼女の頬を濡らすのは果たして誰の血か。

ただ一つだけ確実なことは、少女の頬を洗い流すそれが彼女の涙だということ。

「でも、籠野くんがいてくれるからいいと思った。寂しくても耐えていけると思ったのに——！」

俺は、その思いに応えてやれなかった。

そうだ。知っていたはずなんだ。彼女の気持ち。それでも逃げた。関わろうとしなかったのは自分を守る為。誰かを傷つける行為は自己をも損傷させる。だから目を背けていたんだ。それが自分を守ることだったから。

少女を理解できなかった他の人間の気持ちだって、解らないでもない。越えられない壁があることを知ってしまえば、自分の限界を知ってしまえば破綻するから。それ故に超越者は孤立する。

けれど、鏡岬も同じ様に。目を逸らして、誰かを傷つけない為に笑っていた。

ずっと、叫びたい衝動に駆られていた心を内側に溜め込んで。

——何度目かの衝撃に手が痺れる。これほど重い振りが出来るような体ではないのに、既に魔術など絶えた体だというのにどうしてこんなにも重いのか。

右から、左から。感情に飽かせた斬撃は出鱈目に、普段の流麗な太刀筋など見る影もない。だけどそれでも、どんな時よりも彼女らしい太刀筋。少女が見ていた原初の夢。時と共に儚く諦めては消えて行った憧憬が、感情のその色が剣を奮わせる。

そうして叫びの代償は続く。

「解ってよ！ あたしはただ、誰かに理解して欲しいだけなんだよ！」

——おまえ、もっと別のところでやった方がいいんじゃないのか。そんな無責任な言葉で俺は、彼女の小さな願いを踏みにじってしまった。

そうだ。鏡岬はここで、この場所で剣道がしたいと言っていたんだ。だからずっと一人で待ち続けた。来るはずもない他の部員をずつとここで——

「あたしはこの場所で、いつも一人だったから——！」
痛烈な一振り。

視界が割れる衝撃に脳天が碎ける。

叫びと共に繰り出される剣は、紛れもなく鏡岬の本音。声は心の叫び。

それを誰が否定できただろう。一人になりたくない。自分を解って欲しい。その感情は誰もが抱き、そうして知らない間に満たされている欲求だ。そんな当たり前の幸福が、彼女には無かっただけ。だから求めた。狂ってしまうくらいに眩しいそれに瞳を焼かれ、ただひたすらに追い求め走り続けてきた。

なら。

「だったら——」

こっちも、本気で答えないと。

隠すことなく、本気で感情をぶつけてくれた友人に応える為に。

「——俺がいてやる。おまえの練習にも付き合ってやるし、他の奴等が戻ってくるように手伝ってやる！ 一人で背負い込むなよ、無理に笑うなよ！ そんなの——辛過ぎるだろ、絶対、許せないだろ！」

打ち付けられる一方から切り返す。押されるだけでは敵わない。一歩下がって踏ん張りを作る。アキレス腱が悲鳴を上げて、脛脛が筋を違える。限界を超えた駆動を中止させるために、機能をシャ

ットアウトさせるストライキ。構わない。後に脚が潰れても、今の時が動けるならば問題ない。

今の鏡岬には怪我のハンデがあるのだから、それでも力は拮抗するはずだ。

それ程の優位がなければ勝てないとはいえ、それでも勝たないといけない。

臆面もなく与えられたハンデに縋って、少女の弱みに付け込んで。そうまでしても絶対に、退くわけにはいかなかった。そうしなければ、彼女は間違えたままだから。誰もいない場所へ、一人でずっと走り続けてしまうと知っていたから。

「悲しいなら我慢しなくていいんだよ！ 出来ない訳じゃないだろう、だって、おまえ——」

押しきる。

こちらの面は当然のように彼女に受け止められた。反発し合う刀身。反り返る体勢。その、当然の摂理に従った体運動を黙らせる。背筋と腹筋を限界まで使って体を前方に折り曲げる。鏡岬の竹刀に、自分の竹刀を重ね続ける。

腕力でなら劣っていない。

ただ竹刀に力を預ける技術は鏡岬の方が上。

故に拮抗。

痙攣する腕を一瞬でも許せば勝敗は決する。

競り合いになって再度、確認することの出来た彼女の表情はやはり。

「今だって、泣いてるだろ！」

涙を流しながら、極上の幸せを噛み締めるように笑っていた。

……嗚呼、良かった。と安堵する。だって、こんなことで彼女が笑えるなら、これまでは無駄ではなかったのだから。こんなことで少女が心を表してくれるなら手遅れではないのだから。またいつもの日常に戻る。何もかもが破綻してしまう前に、助けられる。

そこには偽りの笑顔などなく。

一人で孤立していた少女が、友と心から笑い合える世界になるはずなんだ――。

鏡岬の動きが鈍る。

「何でなにも言わないんだよ！　なんで、自分一人で全部受け止めてんだよ！　無理に笑ってんじゃねえ、泣きたいくらい悲しいなら笑うんじゃないくて泣き叫べ！」

「勝手な、こと……言わないで」

「強がりなんて要らないから、泣きたいときに泣いて、笑うのはその後でいいんだよ！」

「だから、そんなの……あなたに、なにが解るの……！　あたしは……一人なのに……！」

首を振る、その代わりに剣を振り抜いて叫んだ。

「おまえの隣には、俺達がいるだろ――――！」

競り合いを交わし、互いの立ち位置が入れ替わる。

引き千切れそうな足首の激痛を無視して、半回転。彼女の構えを確認。正眼。

迷いだらけで放たれる鏡岬の面を躲す。それが生んだ致命的な隙。勝敗を分ける決定的な瞬間。これを見過ごす訳にはいかない。

だが油断はするな。

敵は魔術を身に宿す夢想の剣士。この一撃を、人外の力で防がれれば、次に死ぬのは自分自身。

駆け巡るこれまでの日々。短い間の、少ない回数でしかないけれど。俺は彼女と剣を交えた。

短い息を吐き出して、肺の中を空にする。

余計な警告を促す意識を遮断。必要なのは剣を振る為の運動神経。それと、少女を瞳に映す感覚神経のみ。一瞬目を閉じて、すぐに開ける。弛緩した筋肉を緊張させ、腰の位置より少し上に竹刀を構える。

二人の始まりの合図。

視線が重なり、呼吸が交じり合った地点が始まりの場所。

——何度も打ち合ってきた。ならば恐れることはない。

ここにいるのは化物なんかじゃなく——籠野静月の大切な友人だから。

これが最後になる叫びと同時に、渾身の胴を叩き込む。

剥き出しの感情を竹刀に乗せて。

この声が少女の世界に響き、固く閉ざした強がりの殻を突き破ることが出来たとしたら——

「——おまえの世界は、こんな一人ぼっちの場所だけじゃないだろ……ッ！」

今日のこの日は、決して無駄にはならないから。

踏み込んだ一歩。

崩れそうになる体を決死の覚悟で支え切り、握力で指の骨が碎けるほどに強く握った柄に確か感触を覚える。倒れる一瞬。先に伏した少女の姿が目に入った。胴有り一本。果たして、そんな風に判定が下されるかは定かでない。

だけど、そんなことはどうでもよかった。

最後に見えた、少女のその顔が、見たことがないくらいに幸福そうだったから。

それ以上に他を望むなんて、出来そうにない。

保健室に鏡岬を運んでから、体育館に向う。裏側に回ると、そこで野草の観察でもしているような体勢の弓坂を発見した。なにをしているのかを問う前に、こちらに気付いた弓坂がジェスチャーで話し掛けるな、と示す。その指示に従うこと一分弱。絶えず動かしていた口を閉ざして弓坂が立ち上がった。

「彼女は？ 無事だったの」

ここだという彼女とは鏡岬深紗希のことで間違いない。

剣道場で練り広げたいよりも少しハードな練習の後、蟠っていたいざごきは恐らく解消されたのだろうがそれとは別に、鏡岬の体には巨大な傷跡が残された。勿論物理的な意味である。他の生徒にしたような魔術治療だけでは傷が深すぎ、通常の治療を施す為に保健室に運んだ次第だった。

一連の治療は弓坂が行い――男子禁制は当然――処置が終わってから交代で俺が室内に入り、弓坂はそのまま体育館に向った。一時間ほどは様態が急変しかねない、とかなんとか、多分気を遣ってくれたのだろう。鏡岬が目覚ますことは無かったのだが。

学校を覆う結界の起点、式の間所が体育館に在ることは直ぐに解った。約束の時間は午後八時。指定したのは弓坂で、敵の了承は得ていない。必要も無いだろう。その間の空白を俺は自己の療養も含め保健室で過ごした。

そして今が午後の八時。

正直、戦闘に向けて準備が必要だと言った弓坂の言葉は嘘で、一人で勝手に戦っているのではないかとの懸念がなかったわけではな

い。その不安が払拭されたのが今で、酷く安堵した。

「式は完成したわ。……思ったより時間が掛かったけどね」

「早く終わったら、やっぱり一人で戦うつもりだったのか？」

弓坂は答えない。

入念に最終チェックとばかり、体育館の壁にぺたぺたと触り続けるだけだった。

「ねえ、静月。止めたって無駄だって、解ってるから一つだけ約束して」

入り口に回る途中、弓坂がそんなことを呟いた。視線は遠い夜空の星に。

天に語り掛ける言葉は俺へのもではなく、まるで星に願う祈りのように思えた。

「この後の戦闘で、わたしが勝てる保証はないわ。だから、危なくなったら貴方だけは逃げて。最悪、相討ちってことも考えてる。そうなれば貴方を巻き込みかねないから……そんなことだけは、絶対に避けて」

空の月が、雲に半身を隠す。その光が境界のような隔たりを二人の間に作り出し、弓坂は、光の当たるこちら側を既に戻ることの出来ない遠い場所のように見詰めながら懇願した。強い視線で、強がりな、その瞳で。赤い瞳が僅かに垣間見せた、それは少女の本音で不安。

真摯な目が訴える。

知っている。彼女はいつもそうだった。

何より他者の命を優先して、戦ってきた。なのに、誰も傷付いて欲しくないと御伽噺のような願いを掲げる彼女の思いを、何度も裏切ったのは俺の方。知っていたはずなのに。少女が辿ってきた絶望の記録を。

だけど、だからこそなのかもしれない。

他者を優先する少女の生き方は、自らが戦争の火種であることに負い目を感じ、人類全ての最低地点に自分を置いた彼女の生涯を。

俺はただ、悲しい^{うつく}と思ったから。

自分の為に、彼女を蔑ろにすることはしたくない。そうしなければ報われないから。ずっと一人で戦ってきた孤独な魔術師にも、いつか平穏な日常で笑っていられる日々が来ることを教えてやりたいと思った。

「大丈夫だよ。負けないさ、俺達は」

戦うのは、一人じゃない。

だから他に言葉は要らず、あくまでも一人で戦うと口にする、その一言だけを否定した。

俺の返事は初めから予想できたいたというように呆れた溜息を吐く弓坂。苦笑する表情がぎこちなく、緊張感の再来にはその顔だけで十分だった。

だというのに、目の前の最終決戦よりも他のことが気になっている自分に気付く。それは突然に、弓坂が体育館の鉄扉に手を掛けたその時。扉を開いて死地に望もうとする少女の背中に思った。思ってしまった。

この戦いが終われば。

弓坂はここから、いなくなってしまうのだろうか。

漠然とした不安を、一度起こってしまうと取り除くことが出来ない。まるで目の前にいるはずの少女がいきなり遙か遠くに行ってしまったみたいに思えて。

「……弓坂」

だから気付いてしまった。この気持ちに。

本当は、俺は弓坂に同情していつしよにいたいと思っていた訳じゃない。彼女の生き方が、あまりに歪で寂しい生涯が、それでもそんな人生の中で強く在った彼女を美しいと感じた。綺麗だと、思った。——だから、手放したくないんだ、俺は。

籠野静月は、弓坂絵空を失いたくないと、そう思っていた。

「おまえ……この戦いが終わったらいなくなるんだよな。それって、もう決めたことなのか？」

「そうよ。この地に『法典』なんて異物は必要ない。わたしがいても無駄な危険が増えるだけよ。……そうね、いつものことなの。あつちの日溜まりが暖かそうだったから立ち寄っただけ。その結果わたしは、自分が美しいと思ったものを破滅させてきた」

「でもそれは、おまえのしてきたことじゃないだろ。全部『法典』の記録で……」

「籠野くん」

続きを、彼女の罪を否定する言葉を口に出来ない。それを言ってしまうえば、彼女が自ら塞いでいる逃げ道に背中を押してしまう気がしたから。赤い瞳が、何もかもを理解した上で出した結論なのだと、思い至ってしまったからこそ。

俺が言おうとしたことは――

「わたしは、『法典』なのよ」

――少女の生きてきた生涯の意味を、全て否定するものだった。

「犠牲なら十分なくらい出したわ。あのマンションの住人も、この学校の生徒も、貴方が知らないだけで他にもたくさん。それにね、わたしは貴方を殺したのよ」

自嘲的に一度だけ、くすりと笑った顔がどうしても儚くて、無邪気な頃の子供みたいに汚れない表情がそれを垣根なしの本音だと、証明していた。

「わたしは謂わばパンドラの箱。開けてしまえば在るのは破滅と絶望。ほら、そんな奴は」

泣いてしまいうるくらい、純粹に、

「さっさとなくなっただ方が世界の為でしょ」

笑って、答えを告げた。

「前にも言ったけど、貴方がわたしに感傷してるのは全部、わたしの魔術の性質のせいだから、勘違いはしないで。籠野静月は、別に弓坂絵空が好きな訳じゃ、ないんだから」

話はそれで終わりだと、有無も言わせない言葉で閉じた弓坂が、最後の扉を開く。これが最後だと、この先には終わりしかないを知

っていても無感動に。そうすることが彼女の義務だからこそ、何の感情もなく終わらせることができる。弓坂にとってはこの街も、この街であった全ての出来事も、今この場での戦いを終わらせるために在ったのだから。

それを悲しいと思うこともなく、思っていたとしてもおくびにもそんな感情は表に出さず、魔術師の少女は決戦の始まりを告げる扉を押し開けた。

先にある絶望を、赤い瞳で静かに見据えて。

軋みを上げて開かれる鉄の扉。城門のような二枚のそれが少しずつ開かれ、明らかになる体育館の内部。照明に照らされた館内。本来こんな時間に人を受け入れることのない場所。

「俺の用意した嗜好を満喫するのは構わんが、その礼がこの遅延だというのは頂けないな」

舞台の上に立ち、こちらの到着を確認した黒い外套の魔術師、シリアロッドレイルは別段特殊な感情を見せることもなくそう言った。

「人形と戯れるにしろ、少し長過ぎるな。しかし中々に滑稽な見せ物でもあった。楽しませて貰ったぞ道化——実に愉快な人形劇であった」

魔術師の目は俺を向いている。人形劇と、鏡岬とのあれを、こいつは滑稽だと笑う。そのことで頭に血が上る。こいつは、この魔術師は人の感情を弄んでおきながら、それを戯れ事程度の嗜好としか捉えていない。まるで他者の意思など介しない、自分本意の塊だ。拳に力が入っていることに気付く。爪が皮膚に食い込んでいた。それに頭痛もする。——即ち、臨戦態勢。体はいつでも戦える状態にある。

今すぐにでも飛び出したい衝動を抑え込む俺に、弓坂は片手で制止を掛けた。こちらの憤慨が目に見えていた訳ではなく、冷静に敵の挑発を聞き流した対応を取っているのだろう。弓坂はこちらを見ている。

人の行動を制しておきながら、その実、一番殺意を明らかにしているのは弓坂絵空だった。

「あんたの悪趣味な戯れ合いに付き合って上げる気はないのよ。いいから、早くこの結界を解きなさい。今からなら、泣いて土下座するなら火傷程度で済ませて上げるわ」

挑発が効きすぎているのは、むしろ弓坂の方だ。今にも飛び出して噛み付きそうな剣幕が吼える。冷静さを欠いているのは一目瞭然。剥き出しの殺意と敵意を魔術師に向けて、爛と灯る赤の瞳。

学校を舞台に選んだ敵の考えは、確かに正解と言えた。ここなら弓坂は敵の根城であれ脚を踏み入れざるを得ず、理由となる生徒はそのまま挑発の材料となる。『法典』の起こしてきた滅びの再現で、弓坂を狂わせることが目的なら、その精神攻撃の首尾は上々だった。「威勢がいいのは結構なことだが、その口の利き方は気に障るな。

『法典』とは最高の神秘の名ではあるが……所詮は魔術師の到達点。何者かに所有されなければ意味をなさぬものだ。それ単体に意味はない。慎め、小娘。貴様は俺に式を差し出せばいいだけだ」

かちり、と何かが填まったみたいなき音が聞こえた、……そんな、気がした。否、それは聴覚に訴える音というよりも別の、頭の中で痛覚に訴える刺激のようなそんな感覚。

そして、その音が錯覚でないことを示すように弓坂の表情が変わる。彼女にもそれが聞こえたなら、おそらくは福音だったのだろう。憤怒の感情を湛えていた表情が一変、涼しい微笑みを浮かべた顔に変わる。

「……最後に、一つだけ教えて上げるわ。この件に関して、協会が動いてる。何にしろ、これだけ派手なことをやらかした以上、貴方はただでは済まないでしょうね」

「ほお。で、何が言いたい」

「ここで尻尾巻いて逃げたって、あんたはもう終わりだってことよ。勿論——」

ゆらりと上がる右手が、五指を開いて床に向けられる。鍵盤を叩

くみたいに、細い指が短い旋律を虚空に刻み、

「――逃がしたりは、しないけどね」

弓坂の掌が、黒い魔術師に向かって閉じられる。

それが式の起動を指示する旋律だったとは、誰が知り得ただろう。この場を支配していた結界の色が、今の瞬間に塗り替えられた。元から在った色の上から、他の色を重ねて塗り潰したみたいな圧倒的な制圧。

目に見える変化は直ぐに現れた。

舞台の上で無防備に直立する魔術師に向かって、体育館の八隅から生じた赤い光が線を伸ばす。反応するも間に合わず、太い光の触手は八方から黒い魔術師を捕捉、束縛した。その驚愕はこの場で唯一弓坂を除いて共通のもの。一秒の間に、今この場所を支配する人間が入れ替わった。

不敵に口許を吊り上げた弓坂が嬉々とした声で、壇上で身動きを封じられた魔術師に言う。

「言ったじゃない。のこの敵の根城に乗り込むなんてしないって。あんたに有利な空間で戦うんだから、相応の準備は整えておくわよ。こんな風に、この限定空間に式を作っておくようなことくらいはね」さっきまでと打って代わり、冷静さを取り戻した弓坂。……いや、違う。弓坂はこの式を察知されないように煽られた振りをしていた。そうすることで全てでは自分の手の上だと奴に思わせる為に。

状況は完全に決まっていた。この場を支配しているのは弓坂で、身動きを束縛されたロッドレイルは後の展開を受け入れる他にない。――弓坂の用意した、もう一つの術式を無効化することは、決して叶わないのだ。

既に式の一つが浮き彫りになった結界の中では、他の異常を察知することは容易い。弓坂の組んだ術式はこれだけではなく、もう一つ。隠す気など微塵にもなく、禍々しく鼓動する殲滅の術式。弓坂絵空の行う、炎葬の断罪が声を上げる。

「……俺の結界の上から、別の式を書き足したということか。なる

ほど。『法典』を介することで他者の魔術に関与するとは、流石は共界魔術のエキスパートと呼ばれる魔術師だ」

「……」

圧倒的なほど、勝敗は既に決定しているにも関わらず焦りを見せないロッドレイルの様子に、弓坂が表情を曇らせる。己の式が完全なのは、状況を見れば確実だ。ならば先に待つ結末は想像通りのはず。——だというのに敵のこの余裕はなんだというのか。何故、逃れることの出来ない縛鎖の中で笑みさえ浮かべているのか。

「……共界」

——全ての疑問を振り払うように、赤い瞳の魔術師は式に呟きかける。

瞬間、体育館の床に浮かび上がる六つの魔法陣。三つは舞台の上、黒い外套の魔術師を囲うように響き合い呼応しながら旋回を始める。三つは赤い魔術師を囲い、主の指示を待つように周囲を廻る。

「断罪の焰は加速せよ。循環する炎熱は我に従え——我は獄炎を統べる者。汝、その色をここに示せ——」

足踏み。

詠唱に応じて加速する魔法陣。赤い輝きを放つ六つの円がそれぞれを中心に立つ人物の元に集い、重なる。巨大な一つの光の柱を形成し、より強い光となって世界を灼く術式。

胴造り。弓構え。整えた気力に呼吸を安定させる。そして打起こしから引き分けへと、弓坂が構えを変える。会——丁度弓道に於いて弦を絞る無限の区間。彼女の集中がいかなものか、炎は咆哮し激しく火花を散らす。弓を構えるその姿に空間を満たす魔力が集合する。共鳴し合い、共により強く輝きを増す光がやがて灼熱の火炎へと姿を変え、

「共界完了、術式成立。——覚悟はいいかしら？ 断罪の火葬の中で、己が罪状を噛み締めなさい——！」

それは、巨大な炎の弓だった。

射るのは火炎を迸らせる業火の矢。近くにいるだけでこちらまで

焼かれてしまいそうな灼熱を従えて、弓坂は更なる詠唱を重ねて炎を肥大させていく。場の崩壊は、恐らく免れない。ならばその惨事の果てにあの魔術師が生存している可能性は限りなく皆無といえた。離れ。

連結する神経が体の各部を繋ぎ、全身の細部にまで感覚を促す。

呼応する全身の神経を指先に集める。的を射抜く瞬間の無我の境地。少女は赤色を細くして決着の時を絞る。

「じゃあね、魔術師、シリアーロッドレイル——その身は私が責任を持って灰に変えるわ」

残心。

射法八節を終えた少女の姿が蜃気楼に揺れる。ここは灼熱に焼かれる獄炎の密室。

その中で。

世界を焼き焦がす業火の矢が、赤い魔術師の指先を放れた。

十

——世界を焼き焦がす業火の矢が、赤い魔術師の指先を放れる。瞬間。

ぱちん、と音がした。

先刻聞こえた術式の填る音ではない。そんなものではなくてもっと物理的な、この超常の場においてある種異端とさえ思える小さな音。何の魔術的神秘もない。なぜならそれは、八方からの光に身体を拘束された魔術師が、指を鳴らした音でしかないのだから。

業火の矢が魔術師を射抜く寸前。

切っ先が黒い外套を貫く直前。

たった一つの音を合図に――空間を焼き焦がした炎が一瞬で消滅した。まるで魔法のように。世界を赤く染め上げた超常の火炎が跡形もなく、霧散したのだ。ただ一つの火の粉さえも残さず。水面に消える泡沫のごとく、静かな大気の振動が余韻を残して。

「……………なによ、これ」

突如として消失した自らの魔術に、弓坂が驚愕の表情を作る。

それを嘲笑う、壇上の魔術師。

舞台の上。

四肢を拘束された黒衣。

否。

今、この場において、彼を縛るものは何一つとして存在していなかった。

「驚くことはない。なに、貴様も先刻口にしていたではないか。こは俺の城だ。まさか、本気でこのような小細工を許すとも思っていたのか？」

さも当然のように語る、黒い姿。

「蒙昧だ。俺の結界は貴様の使う魔術と同じ、共界の回路を起源とする。ならば、その上層から重ねられた式に関与することなど容易い。残念だったな、『法典』。貴様のしたことは我が結界を強化したに過ぎない。いかなる高等な式を組もうとも、ここが俺の世界である限り全て呑み込む」

舌打ち。弓坂の体が弾ける。駆け出した初速をぐんぐん加速させ、舞台の上に飛び乗り、掌をロッドレイルに向けて構える。

アクセス
「共界！」

声を高らかに世界との共鳴を宣言するのは普段通り、違うことがあったらそれは――彼女の詠唱が何の神秘も呼び起こすことのない叫びに終わったことだった。それが二度目の驚愕。放たれた後で消滅した魔術に対して今度は、その発動から既に不発。

一度目の驚愕が弓坂の冷静さを奪い取り、正面から飛び掛からせると、続く二度目の驚愕が一瞬の判断を鈍らせ遅らせた。その刹那

を衝いて展開される魔術。光の壁が二人の魔術師に隔たりを作り、閃光の炸裂と共に破裂して弓坂の体を弾き飛ばした。

壇上から木の葉のように舞った弓坂の体は、数メートル程を浮遊した後、着地してからさらに受け身も取れずに転がる。だが両手と膝について起き上がった弓坂の表情は体が受けたダメージよりもむしろ、この奇妙な現状に戸惑っていた。

「……なんで、魔術が使えない、なんて……どうして」

愕然とした声だった。絶望の底から沸き出るその疑問を噛み殺すように口にした弓坂を、舞台上のロッドレイルが嘲りを含んだ声音で諭す。

「言っているだろ、ここは俺の城。俺の作り上げた世界だ。故に世界との共感を原則とする魔術の使用は即ち、俺の世界に意識を介入させることを意味する。何度も言わせるな、そんなことを許すわけなどない」

高笑い。耳障りな哄笑は封鎖された館内に反響して響き渡る。弓坂は敵意を表しながらも悔し気に唇を噛み、魔術師の姿を見上げている。形成が決まっている以上、ここで動いても勝ち目はなかった。一連の出来事に取り残されていた俺はここでようやく、一度離れてしまった弓坂の元に駆けつける。駆けつける……つもりだった。

——その為に踏み出した右足の前に突き刺さる、一本の光の針。見たことのあるロッドレイルの魔術。

魔術師の目が告げる。

動くな、と。意思にではなく体に語り掛けて動きを封じるような、そんな圧迫感。逆らうことが出来ず、念を押すように打たれた光の針——杭といった方が正しい——を見送る。

「なかなか出来のいい術式だったぞ『法典』。発動まで俺にその存在を悟らせず、且つ確実に動きを拘束する。——これほどのものを献上した貴様に、これは褒美と受け取れ」

再度、指を鳴らす。

——それは、まるで再生。或いは逆行。さっきまでロッドレイル

を拘束していた光の縛鎖が、消失したはずのそれが、再び姿を現す。そして、あろうことか光を束ねた鎖は対象を弓坂に変更し、少女の四肢を縛り拘束していた。

これがシリアスなロッドレイルの絶対性。結界内部を支配する魔術師の制圧とは、仇為す者の魔術を封じ、組まれた術式の全てをコントロールすること。この結界を城と称するならば間違いなく、この男は王と呼ばれるに相応しい権力を持っていた。

魔術師の手が掲げられる。同時に、体育館の天井を満たして出現する幾本の針。眩く発光する切っ先は全て、弓坂絵空に向けられ、その全てが今、王の指示を待って待機している。まるで軍隊。確実に指令を遂行し、敵を殲滅する軍勢の刃。

「俺が欲しいのは『法典』に繋がる回路のみ——それさえ手に入らなれば、女、貴様の生死は問わん。いや、自我はむしろ邪魔になる。それ故」

悪寒が総身を震わせる。頭上に群がる全ての針が弓坂を目掛けて飛来したならば——考えるまでもない。少女の体は引き裂かれ、碎け散り、断片さえも残さぬ血溜まりに変わるだろう。

「故に、亡骸となって『法典』を差し出せ」

殲滅の号令が下ろされる。光速の針は一斉に降り注ぎ、少女を肉片の残骸はおろか血飛沫にさえ変えてしまう。それがもはや刹那さえも追いつかない一瞬の先。滅びの結果は回避不可能。世界との繋がりを絶たれて魔術を奪われ、あまつさえ身動きをも封じられた弓坂にこの死の雨を防ぐ手立てはない。

間違いなく、詰み。結果は何一つ変えることが叶わない。

……だったら、俺がここにいる意味はどうなる。

何の為に俺はここに来たのか。何の為に戦うと誓ったのか。

敵を倒す為？——そんな筈はない。俺にとって戦いの勝ち負けなんてどうでもいいことだ。元より、勝利の為に戦っているのではなく、この身が果たす目的はただ一つ。弓坂絵空を、守りたいという願っただけが全てじゃないのか。

それならこんなところで立ち尽くしている訳にはいかない。そんなことなら生きている意味さえないと思え。守るんだ、目の前の少女を。

体が動かなかったのは、敵に圧倒されていたから。そこには何の魔術効果もない。ならばこそ断ち切る。意識が邪魔をするならそれさえ振り落としてしまつて構わない。今はただ走ることしか考えるな。

余計な感情は世界に還す。そしてそれが回路を起動する為のスイッチ。内心に全てを預け、意思を己が内なる回路に流し込む。

光の雨が落下を始める。凄まじい速度。弾丸のそれに等しいほどの、もはや光で在りながら影と視認される針はそれでも視覚をスロ―再生しているものだ。時間が止まったわけでも速度を落としたわけでもない。自らの内と外との誤差を生み出しているに過ぎなく、この感覚で間に合わないなら待っている結末は結局変わらない。即ち、これは運命を変えるようなもの。不可能を前提とした現実への反駁。

間に合うか。

間に合わない。

光の針は雨となり、彼女の体を細切れに断絶した後、血の塵と変えてしまう。

……否、間に合うかではない。

無理でも間に合わせろ。

それが、俺がここにいる意味なのだから！

「神話再生」
アクセス

視認できる針は軽く百を超える。光速を以て降る全てを撃ち落とすならば、それを為し得る神話は一つしかない。これが二度目になる。あの戦神の槍をここに再生する。そうすることが唯一、状況を打開する方法。

失敗は許されず、行程の一つでも過てばあれは再現できない。

回路を繋ぎ、意識を世界に溶け込ませ――思い描く、魂に刻まれ

た伝承で理を塗り潰す。

眼前には確実な死を与える光の雨。

それら全てに向けて、再生した神話の槍を投擲する。全てを一瞬で。一本足りとも残さず確実に破壊する。それがその槍に与えられた伝説。必中にして必殺の槍。

だが雨は止まらない。

神話通りの結果は、再生されなかった。

こんなときに暴れだす記憶の奔流。神話をここに再現している脳が碎けるほどの痛みに悲鳴を上げている。血が蒸発するぐらいに熱い。魔力という異物に体が過剰な防衛反応を起こしているらしい。……問題はそんなことではなく。

視界を点滅する記憶の残滓。それが、あまりにも苦痛だった。

いつかのマンション。住人全員が助けを求めて懇願している。熱い。こんなのは嫌だ。こんな風に死ぬのは嫌なのに、と。魔術の色として世界に共感したときの、本来は持ち得ない筈の記憶。住人達の嘆きがリアルに再生される。

……止めろ。こんなもの、見せるな。

——或いは、黒い空と赤い世界。壊滅した街で苦しむ人々の姿。瓦礫の下、炎の中。なにかを求めて争う者たち。時には剣が宙を舞い、無関係な者を突き刺した。……止めろ。時には乱射された銃弾の一発が運悪く泣き叫ぶ者の脳天を貫いた。

……止めてくれ。

時には、条理を覆す神秘の炎に焼かれて絶える、誰かがいた。

記憶が、『法典』の記録が次々と流れ込んでくる。全ては内側から脳を切り裂く刃。一瞬毎に確実に、それらは体を蝕み切り刻んでいった。

これほど、自らを呪ったことはない。

頭痛に耐えきれず、ぷつり、と音を立てて呆気なく世界との繋がりが切れた。——まだ終わっていないのに。光の豪雨はまだ、止んでいないというのに。

思考が追い付かない。

全ては瞬き未満の出来事。結果は何一つ変えられない。できることはせめてこの体で少女を庇うこと。

そうして光速の時間が過ぎた。

喉を上がつてくる血を吐き出し、腕で体を起こそうとするも失敗。代償には大量の血が傷口から支払われ、他にも何か、生きていくために必要なものが溢れていった気がする。

「弓……………坂……………」

名前を呼んだ少女は、光の拘束から解放されて伏している。……………不安なことは、彼女の周りに血溜まりが出来ているということ。だけれど最悪の結果にはならなかった。それに不覚にも安堵してしまう。まだ、原形を留めていてくれたことが一先ず安心だった。

「……………妙だな。魔術は使用不可としているはずだが。まあ、いい。辛うじて二つとも潰れてはいないようだな。形を残したことは褒めてやろう。だが、命は要らん」

血溜まりを踏んで、魔術師が歩く。直ぐ足元の俺には一瞥さえ寄越さず、足取りは一直線に弓坂へ。その距離は歩数にしてたったの五歩程度かそれにも及ばぬ程。だがその五歩をこいつに許せば、取り返しが付かない気がした。

「……………止め、ろ」

足首を掴むと、思い出したように魔術師は殺意の視線を足元に向けた。

「貴様の出る幕はない。人形劇は見飽きたわ」

言って、針を一本投げ落とす。それが、魔術師の脚を掴む手に突き刺さった。

「あ……………がッ」

激痛が言葉にならない。声を出せば、叫んでしまえば吸い込んだ空気が肺を八つ裂きにしそうな気がしたから。

それでも、手を離さない俺に魔術師はさらに針を降らせる。肩に一本。背中一本。脚は左右それぞれに一本。既に痛覚さえも遠い。

そうして魔術師はようやく、痛みによる蹂躪が意味を持たないことを理解したのか、ぼろ雑巾のようになった俺の体を蹴り上げた。

無惨に舞う体。

どれほどの距離を飛ばされただろう。目に写る魔術師二人までの距離はさっきの倍近く広がっていた。

「……解せないな。魔術師でない貴様がそこまで『法典』に執着する理由はなんだ。これは貴様のような者にはただの災害でしかない。見たはずではないか、あのマンションのことも、この学校のことも」
「俺……、……は……」

関節に力が入らない。起き上がるにはかなりの痛みが伴いそうだ。しかも血油で滑って、この手は上手く体を支えられない。痛い思いをして起き上がったのに、また倒れる。そんな繰り返しを、馬鹿みたいに続けた。

「まだ解らんか。貴様が他者を許容できるのは自己があまりに希薄だからだ。己の空白に他者を当てているに過ぎない。その女を救うだど？ それは貴様の感情ではない」

そうだ、こんなのは、空っぽの心に弓坂の魔術が流れ込んだだけ。立派な偽物だ。

けれど。

「それでも……俺には、それしかないから。……簡単に諦めるなんて、出来ないだろ。偽物でも、その心は確かに、ここにあるんだから」

ここにあるもの。

唯一、籠野静月を埋めるもの。それを守りたいと、ただそれだけ。頭を捕まれて、半身を起こされる。脱力しているのに体が痛い。無理な体勢でもないのに苦しいのは、満足な呼吸もできていなければ、全身傷だらけで今もまだ出血が続いているからだろう。魔術師はそんな俺を数秒観察した後で、興味をなくして投げ捨てた。手が上がる。

「了解した。ならばこれは慈悲だ。先に逃げ、人形」

もう上を見る気力もないけれど、急激に増した光度で解る。数はさつきより少ないが、こんな死に損ない一人を潰すには十分だろう。「ではな、人形。ここで果てろ」

既に恐怖さえもなくなって、このままだ、自分は死んでしまうんだなど、まるで他人事のように感じている中で掠れる泣き声を聞く。それが安堵。弓坂絵空は、まだ、生きているのだとそれだけを確認してその瞬間を覚悟した。

21／双色の螺旋

／21

「随分と好き勝手にしてくれたわね、シリアーロッドレイル」

聞き慣れた声が最期の時を引き延ばす。降り注ぐ光は変わらず、けれど針を模した閃光がこの身に落下してくることはなかった。全ては声により、停止する。まるで支配者が変わったように、肌で感じる世界の色が変化していた。

声の方向に顔を向ける。眩し過ぎる光が網膜を焼き、頭痛が視界を霞ませながら輝を入れる。その視界の中に見た。白い、少女の姿を確かにこの目に認める。純白の混沌。少女はあらゆる色を内包しておきながらも黒く濁らず、何もかもを許容する白を肯定していた。舞台の縁で脚を組んで。

矮躯に似合わない存在感を振り撒く。

双色の瞳を絢爛と煌めかせ――棺継来旋がそこにいた。

「この場所は、その二人が介入した時点で式を閉じて封鎖したはずだが」

「あら、そうだったんだ。気付かなかったな、ごめんね」

あっけらかんとして来旋は悪戯な笑みを浮かべる。

童顔が笑い、魔術師は怪訝を怒りに変えつつあった。

「……貴様」

「簡単なことよ。閉じていたなら開いて貰っただけ。気付いてない訳じゃないでしょ？――この結界はとくに、わたしのものよ」

天を仰ぐように両手を広げて、

「だからね、こんなこともできるのだー」

悪戯な笑顔が、邪悪な微笑に変わる。開いた腕を畳んで、右目が

爛と輝く次の瞬間。

中空を浮遊して停滞していた光の針が矛先を――術者であるロッドレイルに変更した。

今度の驚愕こそが全てに共有される。丁度さっき弓坂の魔術を使役したロッドレイルのお株を奪うように、突如現れた来旋が光の針を指揮する。すらりと伸ばした腕の先、指で拳銃の形を作った来旋が無邪気な声で言った。

「ばぁん」

何の殺意も敵意もなく、真っ白な感情と無垢な笑顔が死の宣告を下す。光度が爆発的に増して世界を駆け抜けた。光速の針が躊躇も容赦もなしに己が術式の生成者に降り掛かる。

光の集合により爆心地は極度の明度が集中して白く滲む。一点に集められた光がまた虚空に散らばり、世界が元の明るさを取り戻す。復活した視界の中に呆然と立ち尽くす黒い外套の姿。彼を中心にして、半径一メートルほどの円形に周囲が窪んでいた。

「……貴様、何者だ」

鼻を鳴らす。嘲笑気味だった表情が一変、不機嫌な色に変わる。

舞台を飛び降りて悠然と歩く姿をこの場にいる全員が遠望するしかなかった。

「何者かって？ この目を見れば解るでしょ、そんなことは」

来旋が歩みを止める。

自分よりも二回り身長のある魔術師に対して引きを取らず、自らの名を象徴する瞳で見上げた。

魔術師の表情が歪む。悪夢を直視して否定するように、頭を振ることさえ事実の前には許されない。彼の言葉は、目の前に在る絶望の名を溢すように呟いた。

「『双色の螺旋』……協会の序列三位が、こんなところに何の用だというのだ」

自己を認識されたことに満足したのか、来旋の機嫌がからりと戻る。一方、その肯定を目の当たりにした魔術師は二人――伏した弓

坂までも目の色を変える。もつとも、弓坂とロッドレイルの抱く感情が双方異なることは、表情を見れば明らかだったが。

「……棺継、来旋。創征の破綻者が、何の用よ」

「あれ？ 貴女まだ生きてたんだ。ふうん、そっか——興味なかったから、死んだと思ってたよ」

満身創痍の状態では冗談にもならないことを、白い少女は平気で口にする。

来旋は続いて俺へと視線を落とす。その時の俺はどんな風に来旋に映ったのか。こんな傷だらけの姿ではまた怒られるだろうな。今日は、帰るのが遅くなったし。

……怒られる。誰に。来旋に。

だけどそれはどうして。

そんなことは決まっている。

棺継来旋が、俺の妹だから。

本当にそうか？ ……なにを、考えてるんだ。来旋は、俺の妹で。突然の頭痛に眩暈。聞こえてくる少女の声。それは反響して、靄が掛かったように聞き取り難い。——そう、微睡みの中で夢ともつかない何かを見ていた。繰り返される質問。やがて声は明確な形を描く。尋ねる声に俺は、何と答えたのか。

——生きていたい？

俺は、その質問に、確かに頷いた。

——ねえ、だったらさ。わたしが助けて上げよっか？ お兄ちゃん。

白い夢の終わり。

そこにいた誰かを思い出す。

それは記憶。

籠野静月が、棺継来旋と出逢った夜の記憶だった。

「来旋……おまえ、俺の妹じゃ、ない、よな？」

来旋は答えない。静かに双色の瞳で冷ややかな視線を俺に浴びせ、これまでの好意的な態度から一変した隔たりを持つ冷徹な風格をし

て威圧してくる。こんな、小さな少女に。今まで妹だと思っていた彼女に、今は見下され気圧されていた。

「言ったはずですよ。それに関われば、貴方は無事では済まないとその忠告を聞かなかった、この結果は貴方の自業自得です。折角、わたしが助けて上げたのに」

助ける。

助けられた。

……そうだ、あの夜。色を失って屍に為りかけていた俺はマンシヨンを抜け出した。けれど所詮は消えてしまう寸前の命。ロビーを出たところで力尽き、もう指一本動かせないほどの状態になったのだ。来旋と出逢ったのはその時点。

白い少女は月を背景に、ふらりと散歩の途中のような足取りでそれを見下ろしていた。

路傍に転がる石に、たまたま躓いてしまったみたいにな。

右を向いたか、左を向いたか、たまたま首を傾けた方にそれが落ちていたとでも言っている様。興味のなさそうな瞳で近づいてきて、捨てられた猫を見るような目で少女はそれに問いかける。助かりたいかと、まだ生きていたかと。

訊かれた俺は頷いて、そして――翌日から、棺継来旋を妹と錯覚して日常に戻った。

「創征の魔眼。……一方の目が世界を創り、他方の目がそれを征服する。色をなくした体に、その代替として世界を利用したというのか、双色の螺旋。道理で、この場において魔術が使役できるその奇異、己が内に個別の世界を持っているのなら頷ける」

黒い魔術師が夢物語を語る。だけどそれは、夢なんかではなく現実で、俺が人形である証明。

来旋に生かされた。それが現実。心が無くした色の代用として、世界を廻らせる空っぽの人形。

それが、籠野静月だった。

「さて、と。それじゃあそろそろ初めの質問に答えるところかな」

軽薄な、というよりは飄々とした態度が雰囲気を変える。棺継来旋、双色の螺旋、創征の魔眼、協会の第三位——そんな数々の異名で呼ばれた白い少女は本当に呼吸をするようにあっさりと、けれどその一言に確かな重みを持たせて言った。

「この戦争は協会が預かります。直に事の処理を行う機関がこちらに向かう。魔術という学問は秘匿が原則。世界が文明を以てこれを排除する前に、協会がその痕跡を絶ちます」

場の空気が凍り付く。

弓坂は何を思うのか、横たわったまま来旋を睨んでいる。まるでこの後に告げられる事実を知っているように。必死に威嚇して来旋の口を塞ごうとしていた。

「魔術師、シリアーロッドレイル。貴方は協会が処断します。これからの魔術の繁栄に、貴方は害を為す」

次に来旋が視線を送ったのは、膝を震わせて立ち上がろうとする弓坂絵空だった。

剣のような視線を交差させる赤と白の超越者。

協会の人間として、義務的に言葉を紡いでいた来旋が口調を改める。腕を組み、結界を支配した征服者としての絶対性で弓坂を見下ろす。果てる前の命を酷く無様なものを見るような目で、敵意も悪意もなく、何の感情の色もなしに、

「幾度も繰り返して結論が下されました。『法典』と連結する回路が本物でも偽物でも、周囲に及ぼす影響は危険過ぎる。それはいずれ、文明との軋轢を起こし、巨大な戦争の因になります。かつての統合戦争のように。そんな悲劇を繰り返さない為に——」

双色の眼差しが、一瞬こちらを垣間見た。

「——『法典』は協会が管理します」

来旋が何を言っているのか。その示唆する意味が掴めないはずは無い。だからこそ言葉がでなかった。『法典』を管理する。弓坂絵空を保護するのではなく、その叡智を収集すると。ならば、彼女の色はどうなるのか。考えまでも無い。

消されてしまうのが、道理だ。

弓坂は初めから何を言われるかを理解していたのか、突然の死刑宣告にもまるで反応していない。赤い瞳は虚空を睨み、時折焦点を白い少女に合わせてはよろめき彼方に消える。

おまえはいいのか、それで。

自分が殺されるとか、そんな話をしてるのに何で無関心なんだ。何で、そんな風に聞き流せるんだよ。

一度、弓坂と目が合う。瞳が告げていた、きっと、俺の考えていることなんて筒抜けなんだろう。弓坂の赤い瞳は、一秒未満の一瞬、柔らかな微笑みの感情に色を滲ませ——だって、本当のことだから、と言っていた。

自分が戦争の火種になることも、ここに在っては世界の秩序を崩壊させかねないことも認めて、術式を帯びた己を嘆くでもなく当然の事のように、そんなことを認めていた。

……いいのかよ、本当に。

——いいわけ、ないだろ。

「……ふざけんな。そんなこと、認められるかよ」

来旋の冷たい目。冷酷な、協会の人間として見せる、感情を殺して条理を貫く無情の瞳。

「貴方の承認は必要になりません。無論、彼女も。これは協会の決定です」

「だから……協会が決めたからって、人を勝手に……殺していい理由には、ならないだろ……!」

「それは『法典』。協会の開祖が生み出したそれは、協会で管理するのが当然です」

「違う……そんな、『法典』とかは関係ない……! そいつは、だって——」

「『法典』は貴方を殺した——同じことをするだけです。術式を切り離す為に、弓坂絵空という色を取り除く、ただそれだけ」

淡々と告げる協会の使者は、その双色を弓坂に向ける。冷酷で慈

悲のない、全身を貫かれて立つことも出来ない少女に向けられた視線は、憐敏でもなければ同情でもなくて、この状況ですら断罪には生温いというような非道の眼差しだった。

魔眼が光を放つ。

「自我の消え去る瞬間まで、貴女が犯してきた千年の罪を噛み締めなさい。これで、全て終わ——」

文末を切って、来旋が体を捻る。

瞬間に察知したそれを振り返った頃には、しかし何もかもが遅かった。

中空に浮かぶ数千の針。細くしなやかな刺突の化身が発光する様は、猛獣が獲物を威嚇してようで、それ自体が明らかな殺意を放っている。——無論それは、術者であるロッドレイルの殺意に共鳴したもので、光の弾幕の奥で、黒い魔術師は無情に腕を振るった。

魔術師の指揮を受けて針が乱れ飛ぶ。狙いなど定めず数と速度で来旋を圧倒する針は、支配権を魔眼に握られるよりも先に白い少女の体を次々と穿っていく。マシンガン宛ら予断なく繰り出される刺突。光の雨は怒濤の勢いで降り注いだ。

一秒後の世界。

凝縮された光の爆発で白い影の出来た空間に、少女の倒れた姿が浮かび上がる。黒い髪を広げて、それはうつ伏せに倒れ伏す棺継来旋に他ならなかった。刹那の不注意であれ付け込むのは容易い。

なぜならば、光の針は物理法則の最高速。

超常を支配する魔眼の持ち主は、その純粋な光の速度に屈して敗北した。

22／世界の終日

／22

「小娘が。いくら支配したとはいえこれは俺が作った結界。共鳴することは容易い。隙を見せたことが貴様の敗因だ。なにより、我が城を征服しようとした奢りこそが、万死に値すると知れ」

ロッドレイルの憤慨が更なる針を虚空に紡ぐ。既に動く気配の失せた来旋に対してでないのなら、それはまだ息の根を絶やさぬ俺達の為に用意されたと考えて間違いはない。

状況は、なにも変わらなかった。

弓坂は目を細めて光の針を見据えている。……そう、変わらないのは彼女の命運。来旋でもロッドレイルでも同じこと。この場所には彼女の生き残る運命が用意されていない。協会であれ、魔術師であれ、その目的は『法典』の入手なのだから。

一つだけ、彼女を救う方法があるとすれば、それは――

「傲っているのは貴方の方です、シリア||ロッドレイル」

凜と際立った声だった。

凡そ、死者が発音するとは到底思えない声。

光の針に貫かれた棺継来旋が、何事もなかったように立ち上がり、殺意の視線を自らを奇襲した相手に向ける。

「支配階級の頂点は王ではなく神。貴方は結界を城と呼び、自らを王と称した。残念だったわね。それならこの結界を征服したわたしは神――この世界での死なんて、超越した存在なのよ」

傷一つない体。白い肌。乱れた髪を整えて向き直る。啞然と立つ魔術師の命運は、ここで尽きる。驚愕を恐怖に置換し、無闇に針を乱射しなかったことはある意味で称賛に値するかもしれない。

それが無駄だということは、恐らく全員の共通認識だった。

来旋が手を上げる。切っ先を百八十度旋回させた光の針が標的を変える。一度攻撃を受けた来旋に容赦はない。呆気なく、一人の命を握った手を振って号令を下した。

「死なないってもね、痛いよ。だから乱暴にされるのは嫌い。遣られたら、殺り返すのがわたしの主義」

光の霧が体育館の壁を隠す。霧散した光の晴れた後には、

「でも、人殺しはもっと嫌い。だから殺さないわよ。貴方の処断は協会が行います」

四肢を貫かれて磔にされた魔術師の姿があった。

憎悪の瞳が視線で来旋を焼き払おうとする。少女はそれを無視して、完全に魔術師への興味を無くした。いや、それは無くしたという自然的なものではなく、自ら棄てたという方が正しい。魔術師の怒りはこれに由来した。

「……貴様、協会の犬、破綻者が」

怨嗟の言葉に一瞥。来旋の意識がロッドレイルに向いたのはそれが最後。

少女の関心は今、完全に弓坂絵空……『法典』にあった。

「邪魔が入ったわね。……あーあ、面倒だな。でも仕方ないよね。

——『法典』にはそれだけの罪が在るんだから」

ぱちん、と指を鳴らす。立ち上がろうとする弓坂の脚を閃光が掠めていった。それで苦悶の声と共に崩れる弓坂。来旋が歩く。自然な足取りでこれから処断する対象に無感情なまま。協会の意思を代行する双色の螺旋。棺継来旋が、弓坂の頭の上で手を翳した。

それをただ、見ていた。

止めることができなかった。

そもそも、視界が安定していない。さっきから頭痛と一緒に流れ込んでくる映像が視界を覆っては、残像を残して消えていくのだ。自分が何を見ているかは、けれど明確だった。

見ているのは圧倒的な罪と絶望。

赤い世界に響く嗚咽と断末魔。

気が狂ってしまいそうで、吐き気がする。泣き叫ぶ声が言っているようで——おまえのせいでみんな死んだ、何もかもが壊れたと叫んでいるように聞こえた。

耳を塞いでも聞こえてくる。弓坂は、こんなものに耐えて生きていくのか。

こんな絶望を己が罪科にして。

赤い視界に蘇る悲劇の夜。マンシヨンの住人を焼いた炎から逃げ出した少年を見る。感情なんて残っていないのに、生きているから体は死なないように運動を促す。少年のそんな姿さえ、糾弾に思えた。

見ろ。

これが、おまえの生きる代償だ。

だけど……こんな、もの。

間違ってる。これは『法典』の記録。それにより弓坂が責められるなんて間違いだ。なのに、それでも——夢の中で、届くことのない謝罪を叫び続けている少女がいた。その姿だけで、本当は十分だったんだ。

千年間。『法典』が記録した死の全てが彼女を責めても、俺はそれから守り抜こう。

そう、少女の夢に誓ったはずだ。

「……神話、再生」

来旋が呆れたように振り返る。この期に及んでまだ自分に刃向かうのかと、愚行にも程がある。愚行であり愚考だ。自分には決して敵わないと、つい今し方証明したのに。

だがそれでも止まらない。敵わなくてもいい。なにもしないで彼女を失うことの方がよっぽど辛いはずだから、それをただ見ているだけならこんな命は、消えてしまった方がずっとましだ。

光の針が唸りを上げる。旋風を巻いて飛来する針が脚に突き刺さった。予備動作無し。反応が遅れる。……そもそも、そんなものが

あつたなら躲せたのだろうか。きっと無理だろうな。

脚はまだ使える。ちよつとどころでなく痛んでも、立ち上がるのに支障はない。歩けるなら、問題はないんだ。今は、弓坂の隣に行きたいだけだから。

舌を打つ音が聞こえた。

轟然と、今度は二本の針が脚と肩を切り裂いていった。それに思わず姿勢が傾ぐ。歩くのが少し難しいかもしれない。もう、脚に力が入らなかった。——そんな状態でも、容赦なく続く針の飛来。脹ら脛、腿を切って脚を潰される。遂に立って歩けなくなった。

だったら……、腕を使えばいい。這うようにして、それでも止まらず前進を続けた。

「なんで……なんで、止まらないの。貴方は魔術師じゃないのに……『法典』に執着する理由なんて、ないはずなのに！」

来旋が怒鳴る。

魔術師——『法典』……ああ、確かに関係ない。

俺は魔術師なんてものではないし、『法典』なんかに興味はない。ただ俺は——

「……違うんだよ、来旋。俺は、さ……『法典』なんてどうでもいいんだ。ただ、弓坂が、好きだから」

だから、守らないと。

大切なものが、壊れてしまわないように。

「そんなものは、偽物です。空白だった貴方の自己が共界魔術に当てられただけ、そんなもの、本物の感情なんかじゃない……ないんだから！」

「……ああ、そうかもしれない。きつと、それが正しい。俺の心は偽物だよ。でも、弓坂が好きだって気持ちはきつと本物なんだ。……いや、偽物でも何でもいい。確かにそれは俺から生じたものだから——偽物の心でも、それが籠野静月の唯一なんだ。だから手離さない。どんなことがあっても絶対に、守り抜く」

心に決めた。偽りの心にガラクタの感情。それでも一つだけ誇れ

るものがあるとしたら、きっと、それはこの誓い。彼女が一人で泣いてしまわないように、どんなに辛い夢が少女を責めたとしても、それを笑い飛ばせるように――

傷口から、一歩進む度に溢れ出す血液と生命。さっきまで塞がり掛けていた傷も完全に開いた。踏み出す代償の激痛は意識を浚い、果ての景色に追い返される。繰り返す前進はいつまで経っても目標の場所に辿り着けない。……よく見れば、同じ場所で何度も横転していた。自分の血が滑る。上手く起き上がれない。だったらまずは、この脚で立つことから始めないと。

「……なにやってるのよ、このバカ」

誰かが呆れて、だけど喉が枯れそうな苦痛の声で言っている。視界が霞む。その姿が、よく見えない。

……あれ。俺、何の為にこんなことしてるんだ。

「もういいから！ わたしがいなければ何もかも解決するから……！ 諦めるから……。だから――もう立たないで……お願い」

なんだ、こいつ。何で泣いてるんだよ。さっきまで怒鳴ってたくせに。……でも何で、泣いてるんだろう。……ああ、そっか、俺が悪いんだ。俺のせいで泣いてるんだ、こいつは。

泣かせないって、決めたのに。

そう、思った途端に体が機能を取り戻す。這いつくばっていただけの体を、腕と脚――全身を使って立ち上がらせる。けれどやはり都合よく痛みがどこかに行ってくれた訳でも傷が塞がった訳でもない。立ち上がる、ただそれだけのことがこんなに苦しい。息をするのが、こんなにも辛い。

知らなかった。生きてることが、こんな難しいことなんだって。

「もう止めてよ……！ 無理だって、解るでしょ！ これ以上無理したら、貴方本当に――」

「――うるさい……！」

叫んだ後、肺の中で榴弾が爆発したような錯覚をした。同時に口から何かを吐き出す。赤い色のそれは足元の水溜まりに落ちて、

音を立てて溶けた。

「……いいから、黙ってろ」

あんまり、泣かれたら……頼まれたら、本当に立てなくなりそうな気がするから。

折角、後少しで体を起こせるのに、台無しにされたら堪らない。だから後少し、黙っていて欲しかった。後一度でも妥協して膝を屈せれば二度と立ち上がれなくなる。

「俺には……『法典』とか、そんなのはよく解らない。だけどそんなことで、おまえが泣いてるのは……そんなことは、我慢できない」「違うのよ……そうじゃない。だってこれは断罪で、当然の報い。わたしは『法典』だから」

その一言に憤っている自分がいた。

それで、やっと解った。何が気に食わなかったのか。

何がそんなにも許せないで、意地を張っていたのがようやく理解できた。

「おまえは——」

俺は、ずっと。

「——弓坂絵空だろ……!」

この一言を、糾弾してやりたかったんだ。

だってそうだ。弓坂は弓坂絵空で、『法典』なんかじゃない。彼女がその罪を、千年間を背負い続けるなんて間違ってる。俺はずっと、夢の中の少女に憤慨していたんだ。その夢に、赤い世界が彼女を責める夢が許せなかった。

だからこそ美しいと感じたんだ。

いつも、強くあろうとしていた、今ここにいる少女のことを。なら、泣かせてなんていられない。

「おまえは、弓坂絵空だから——その生涯は、おまえのモノだ……」

『法典』なんかのモノじゃ、ないだろ……!」

「なんで……その心は、偽物だって解ってるでしょ……?」

膝に満身の力を籠める。負担が掛かるのは脚だけではない。腕も、

背中も、頭も。今にでも爆発してしまいそうなくらいの激痛に軋んでいた。

弓坂の表情が、よく見えない。赤い瞳は、どうだろう。少なくとも、笑ってはいない。

偽物の心。

弓坂絵空を好きだという、偽り。空白に塗られた、彼女の色。偽物の心を感化したのは、彼女の魔術であって生涯ではない。俺は、本当は弓坂が好きではないのかもしれないと、そのことを信じようとしていたこの心こそが負けていた。

嘘でも、偽りでも今はいい。いつか、その想いが本物になるように――

「わたしは……貴方を殺したのに」

「……だけど、俺はおまえに救われた。だから言うよ……嘘が、本当になるように」

この心は、決して。

この色は、きっと。

「――それでも、俺は、弓坂絵空が好きなんだ。『法典』なんて関係ない。おまえが、好きなんだ……!」

視界に微かに揺れる蜃気楼。赤い絶望の景色が浮かび上がる。『法典』からの干渉が見せる夢。いつもの場所に少女がいる。――夢の中で、初めて彼女と目があった。

「……ごめんな、おまえが何て言っても、俺はやっぱりおまえにいて欲しいんだよ」

だから。

彼女を責める全てのモノを――この世界を殺す。

「千年間の罪が鎖になるなら、そんなものは引き千切ってでも解放してやる。こんな断罪の世界は、俺が壊す」

意識を還す。呼び掛ける、己の世界。循環する世界の神秘を、伝承される神々の物語を使役する。再生しろ。世界を終わらせる、その神話を。こんな悲しみしかない真っ赤な世界は要らない。これが

目の前にあるのなら、必ず討ち滅ぼす。

「……そこまでです。もう、十分でしょう」

白い少女の声。天井に敷き詰められる針の軍勢。殺戮を与える光の空。この世界において生命は少女の胸三寸。号令一つで光速の内にこの身は原形を失うだろう。

「これ以上は、協会への敵対と見なし、速やかに処断します。籠野静月、貴方は自分が戦争の要因を擁護し、許容しようとしているのだと理解しているのですか。それがどれほどに危険な思想か、その異端がどれほどに罪深い存在かを」

そんなことは知らない。だって当然だ。俺のしているものと、来旋のしているものは違う。本当は初めから『法典』なんてどうでもよかったんだ、俺は。それが戦争の火種なら、滅びの因子なら許せない。千年の罪惡が造り出した結集なら認めないだろう。でも違う。そうだろう。

ここにいるのは、弓坂絵空なんだ。なら俺は、彼女の背負う全てを許容する。その罪が少女を責めるなら、千年間の歴史ごと破棄して見せる。その為に俺はここにいるのだから。少女を守るという誓いを果たすためなら、この体が朽ち果てても構わない。

仇為すモノは何であっても、その為になら否定する。例えそれが、世界にとって間違いでも——信じ続け、貫き通せばいつか、間違いではなくると信じているから。

「……そう。それが貴方の答えなら否定はしません。わたしは、ただ」

協会の第三位、双色の螺旋が手を上げる。

「協会の敵を、殲滅する。それだけです」

針が落ちる。球体に陣形を構えた光はしかし、どんな数、どんな形でも意味を為さない。そんなものは初めから意識にないのだから。今、籠野静月を満たすのは己が世界の心音。世界の感情から手繰り寄せる超常の回路。深く深く、深層の果て、遙か彼方の原初を中心。視界に顕現する赤い記憶。頭痛が激しさを増して意識を凌辱する。

だがそれも今は遠くへ。意識は全て世界に還す。そうすることで再生する神話。この身では一度の行使が限界。故に失敗は許されない。過てば、大切なものを全て失う。

赤い世界に一人、泣いている少女を見た。それが彼女の本音。氣丈に振る舞い隠してきた弱さ。小さな背中。爆音に飲まれる鳴咽。赤く照らされた泣き顔に告げる。

直ぐに、解放してやるから。

こんな世界は、俺が今直ぐに――

「――神話、再生……！」

掴み取れ。

引き釣り上げろ。

我が魂の世界卵に刻まれた神の伝承を。神々の物語の、その終焉を――。

一振り。手にした神秘を振るう。それだけで全ては叶えられる。

この世界の終局も、少女の救済も、針の撃墜も何もかもを叶える魔法。語られる神話に曰く、その一太刀は世界を切り裂き、終末の炎で世界を焼き尽くしたと言う。語り継がれる果ての物語。巫女の予言の最終章。

其は。

「……『世界の終日』^{ラグナロク}。そんな、嘘」

弓坂が愕然と口にする。

剣が放つ炎が世界を切り裂き、焼き払い、軋みを上げる空間を征服していく。結界の術式も、ここでは意味を持たず、絶対の理は炎による世界の蹂躪ただそれだけ。それは、飛来する無限の針を焼き尽くした。

「神話の再生。物質だけでなく、伝承そのものを再現する。……それが、貴方の魔術の極致ですか」

炎に飲まれる体育館は、既に結界の作用も消えて軋みだしていた。だがまだだ。これだと足りない。もう一振り。伝承では一太刀でも、これは現実。回路が未だ繋がるこの瞬間に、もう一度――

伝承を凌駕して再度、英雄の剣を振り落とした。

それは、どうしようもない止めになった。

大切断。刃風が過ぎ去り亀裂を作る。走り抜ける剣圧と風が床を、壁を、天井を引き裂いて進む。炎が世界を焼き払い、斬撃が世界を断絶する。巨大な熱風の剣は白い少女の頬を掠め、その先にある鉄扉を壁ごと破砕した。爆音がスタート合図。動きたがらない脚に叱咤。馳せるのは赤い少女の元へ。

来旋が舌を打つ。支配していた世界を失い、針を使役できなくなった来旋にはこの鈍走でさえ止めることは叶わないだろう。一息に駆け付ける。血溜まりに横たわる少女の前に立ち、双色の魔眼と対峙した。背中に告げる。大きな声は出ない。既に肺も喉も擦りきれそうだった。

「逃げる、弓坂」

道は作った。同時に来旋も無力化した。弓坂一人を逃がすくらいのことならば可能。来旋の前に立ったのは万一の為、彼女にまだ手が残されているのなら――いや、きっと何かあるだろう。その何かから弓坂を庇う為に、盾になる為に俺はここにいる。

音が聞こえない。弓坂の立ち上がる音が、しなかった。それは炎が空気を焼く音や、木造の体育館が軋む音に掻き消されたのか、それともまだ弓坂が起き上がっていないだけなのか。もう動けないなんてことは、恐らくない。

「静月……あんたまさか、一人で相手をする気……？」

棒読み口調は、信じられない状況に直面して感情が削がれてしまった様。

「自分がなにをしてるか、解ってるの……！ ダメよ、相手は協会なのに、敵うはずが――」

「うるさい！ いいから行け！」

振り向かない。今は、既にそんなことに意味はなかったから。

「……それだけ怒鳴れるなら、まだ走れるだろ。大丈夫だから、俺は」

「……だって、そんなことしたら絶対」
死ぬ。

この場でこれ以上来旋に齒向かえば、必ず殺される。協会がどんな存在か知らなくても、自分のことだからよく解っている、そんなことは。だけど、

「俺は——ここで、おまえが殺される方が嫌なんだよ……！　そう
なったら、死ぬより後悔する」

だから、これは彼女の為ではなく、自分の為。

「……行ってくれ、弓坂。こんなところでおまえに死なれたら、俺は自分が赦せない」

何度だって言われてきたことだった。

俺には守るべき自己が欠落している。だから他者を許容し、依存することしかできない。その歪な在り方は、色を無くして尚も籠野静月が果てず在り続ける為の手段。その為に、弓坂には生きていてもらわないといけない。

彼女の存在は。

彼にとって、生きる為の夢そのものなのだから。

水を打つ音が聞こえた。弓坂が立ち上がり、駆け出した音。足音は遠ざかり、そして消える。

残されたのは木材の断末魔と、火炎の唸り。世界の終わりの音を、ぼんやりと聞いていた。

これでいい。弓坂なら上手く逃げ切れるだろう。そうでなくては、俺がここまでした意味が無い。……生き残った意味が無いんだ。致命的に壊れていた。弓坂絵空という誰かに、俺は、こんなにも何もかもを奪われていた。

でもそれは何処か心地よくて、もう、未練は残っていない気がした。

「限界のようですね」

声が、上から降ってくる。

来旋の身長は俺よりも低い。また知らない間に倒れていたらしい。

ただしこれまでと決定的に違うのは、もう次は立ち上がれないということ。それは、さっき自分でも解っていたことだ。もう力が入らない。無理をし過ぎた結果がこれだ。いよいよ意識と体が乖離して、落ちていく意識も、硬直していく体にも制御が届かない。

「目が見えていないようですね。本当に……どうすればそこまで自己を磨耗させられるんだか。そんな、空っぽになってさ」
呆れて、だけど笑って、

「本当に、バカなんだから」

落ちていく、深い意識の底に。

飲まれていく、自分の中の世界に。

自己の欠損とか、そんなところの話じゃなくて——そうか、わかった。

——これ、が——

——なくなるって——こと、なんだ——

消えていく最後、その声を聞いた。

「約束したのに、心配かけないでって」

：

目が覚めて初めて見たのは、月を中心に廻る夜の空だった。
体が冷たい。

冷えた風が感覚を研ぎ澄ましていく。それはまるで電源が入って
少しずつ機能していく機械のようで、その例えだと籠野静月はこの
瞬間、誰かの手によって再起動されたということになる。そして実
際、その通りなのだった。

背後には校舎の壁。場所は、おそらく中庭。意識を失うまでの記
憶は残っている。自分の体がどんな状態なのかも忘れていない。だ
からこそそれを根拠に断定できる。自分一人の力でこんなところに
くることはできなかったはずだ。故に運んでくれた誰かがいる。

その誰かを割り出すのは簡単だった。

隣で同じ様に校舎に凭れ掛かり、月を見上げる白い少女がそこに
いたから。

「目が覚めましたか」

「まあな……おまえが、助けてくれたのか？」

来旋が大きな瞳で流し目を送ってくる。

その動作が肯定の意味を表すと、自分なりに受け取った。

双色の瞳に敵意はなく、妹と偽っていた時の来旋と同じ、柔らか
な眼光が夜に灯る。全て終わった。そんな風に思う。……或いは、

手遅れとでも言い換えられるのか。気絶する前の記憶はあっても、流石に気絶している間の記憶はない。

自分が寝ている間に、全部終わってしまったのかもしれない。

「心配しなくても、弓坂絵空は逃げ遂せましたよ。貴方のお陰でね」
こちらの危惧を読み取って、来旋が言った。続けて、

「シリアⅡロッドレイルも同様に。貴方の所為でね」

そんなことまで、教えてくれた。

「……ちよつと、なにをしているんですか。その傷で」

校舎を支えに立ち上がる。まだ色んな所が痛むが、それでも動けないというほどではないらしい。なら大丈夫だ。やることが見付かった。あの魔術師がまだ生きているなら、何も終わっていない。止めないと、同じことを繰り返す。

「えいっ」

——と、両脚の膝を思いつき叩かれた。

人体の構造上、ここを叩かれると抵抗できない。一瞬で脱力して、壁伝いに尻餅をつく。ついでに落下した衝撃で体が小さくバウンドし、後頭部をコンクリートに衝突させるというおまけつきだった。何だこれ、地味に痛い。

慌てて患部を摩る——瘤になってやがる——今更のはずなのに、これが変に痛くて嫌になる。涙目になってる俺がいた。なんだよ、なんなんだよこの初歩的な攻撃は。

来旋は、けらけら笑っていやがった。

「なにしやがる！」

オッドアイの悪魔になる。

「だって放つといったら勝手に行っちゃうでしょ、わたし、まだ話したいことがあるのです」

「……」

なんか、怒ってるみたいです。

むう、と頬を膨らませている様子に毒気を抜かれる。逆らえばどうなるか解らないので、取り合えず黙って話を聞くことにした。こ

んなことをしている場合ではないと思いつつも、来旋のその態度は、危機感を奪い去っていくほど穏和だったから。

「さて、と。これはまず業務的な報告、と貴方に落ち着いて話を聞いて貰う為の前置きです。シリアⅡロッドレイルはまだ動いていません。貴方が意識を失ってから七時間。彼も深手を負ってますから、直ぐに行動することは出来ないでしょうからね。加えて、弓坂絵空も。……なんにしろ、今晚中には決着が着くでしょうね。彼と彼女がそれを望むように――協会も既に、ここに向ってますから」

貴方が悪いんですよ、と少しだけ睨みを利かせた目をして、
「生徒の記憶を改竄するだけなら、わたし一人で事足ります。でもここまで大事になると、協会が動かないわけには行かない。……校舎は吹き抜けになってるし、体育館は全焼してるし。千人近い人間に暗示を掛けても、そんなの隠し通せるわけないです。反省してください」

「……いや、あの……ごめんなさい」
謝ってしまった。

……いや、だってさ、確かに体育館燃やしたのは俺だし。
よろしい、と悪戯をした子供を許すように来旋が言う。

「それじゃあ、一つだけ。わたしの質問に答えてください」
夜の冷たい空気を吸い込んで。

焦らすように目を閉じた来旋が次に見開いたとき、表情は驚くほどに真剣な眼差しに彩られていた。その白い少女が、双色の螺旋が問う。

「貴方はどうして、そこまで『法典』を庇うのですか？」

月が雲に隠れる。

夜の空。黒い壁面を飾る星が照明。

「自分でも、それが偽物だって理解しているはずじゃないですか。
なのに、自己を破綻させてまで彼女を庇う理由が解りません。共界魔術に感化されたからにしても、それを是と出来る信念はあるはずです」

弓坂絵空を庇う理由。

戦争の火種を肯定する訳。

——決まっている。考えたことなんて無い。ただそれはいつも自分の中にあって、何度も繰り返し見てきたもの。夢に垣間見る、少女の赤い世界。それだけで十分だと思っていた。だけど、そうじゃない。ちゃんと見付かったんだ。その心を形にする、言葉が。いつも。

同じ場所で。

彼女は泣いていた。

その姿があまりに——

「……弓坂は、びっくりするくらい一人なんだ。それはさ、自分が『法典』だってことを受け入れてるからで、だからあいつは誰も自分に近づけなかったんだと思う。誰よりも他者の幸せを祈ってたんだ。弓坂が許せなかったのは自分自身だから、誰も、あいつを認めてやる奴はいなかった」

そうして一人になった少女は。

自分の身の上を嘆くのではなく、戦う道を選んだ。

魔術師であること。『法典』であること。それらを肯定して向き合う為に、自らが弓坂絵空という少女であることを放棄した。或いは忘れていたのかもしれない。そんなことだからずっと一人で、傍には誰もいなくて。

吐き出せるのは、泣いていられるのは夢の中だけだった。

そんな風に走り続けた少女の姿を綺麗だと思った。泣きながら、謝りながら強く在り続けた少女の生涯が何よりも——魔術なんかよりもずっと、この心に干渉してきたから。

彼女の存在を美しいと思う気持ちを否定したくない。

守ると決めた。同じ誓いを、同じ夢の中に残してきたつもりだ。

「あいつの傍には誰かが必要なんだよ。自分で自分が許せないなら、誰かが許してやるしかないだろ。——世界がそれを否定するんなら、世界から外れた存在の俺にしかそれは出来ない。弓坂の隣にいてや

れるのは、俺だけなんだ」

いいや、そんなのは詭弁だ。

だって本当は。

「弓坂が好きだから、俺が、その誰かになりたいんだよ」

ずっと、それだけだったじゃないか。

全て聞き終えて、来旋は何も言わない。ただぼんやりと月を見上げている。話を聞いているのかどうかも怪しいくらいの横顔。白い頬が金色に照らされて――どうしてか、一瞬、少女の顔が綻んだように見えた。

来旋が立ち上がる。手を後ろで組んだ、見かけに似つかわしい無垢な動作。

踊るように弾むように、軽い足取りが月光のスポットライトを独占して進む。

くるりくるり、風車みたいに回って、振り返った満面の笑顔。

その笑顔に、今度は俺が訊いた。

「俺も、一つ教えてくれ」

「なに？」

「なんでおまえ、俺を助けたんだ？ あの日も、今日も。協会の間が俺みたいな何でもない人間を助ける意味なんてないだろ」

ご機嫌が少し斜めに傾いたか、頬が少し膨らむ。

そんな質問は心外だ、と拗ねる瞳。

「協会は関係ないよ。わたしは棺継来旋だもん。行動原理はいつだって自分本位だよ」

「……そうかい」

そうです、と言ってそっぽを向く。

本当の理由は訊き出せないのかもしれない。そんな風に思っただけの時、独り言のようにぽつりと、来旋が零した。ともすれば聞き逃していたかもしれない声は、どこか泣いているように濡れていた。

「似てたんだよ」

世界を支配する少女。

統一者、双色の螺旋。

それは創征の魔眼と呼ばれた協会の第三位が初めて見せた、弱さだったのかもしれない。

「色を無くして空っぽになった、そんな破綻した姿がわたしの大切な人に」

だから放っておけなかった。

最後に付け加えた一言は、きっと嘘ではないのだろう。それが、棺継来旋という少女だった。自らが口にした通り、行動原理は自分本位。気紛れで人を救ったり、殺したりしているのかもしれない。だけど少女の心にも一つ、決して忘れない大切な原風景がある。

それが解っただけで、十分。

「ねえ、どうして世界はこんなにも綺麗なんだと思う？」

「なんだよ、それ」

「昔から、ずっと考えてたこと。わたしは答えが見付かったから、この質問は貴方に上げる」

少女は言う。別れの言葉のように。

……否、それは本当に別れの句として紡がれたのだ。

少なくとも来旋はそのつもりで言ったのだと思う。——瞬間。世界が震撼して、空に亀裂が走った。

覚えのある感覚。頭痛を伴う違和感。空気が濁って、足元が揺れているような不快感はいつかの夜と同じ。あの、街全体を結界が覆った日と同じ感覚だった。

慌てて立ち上がる。何が起こったのかは来旋が知っているはずだ。問わずとも、少女はそれを教えてくれる。やけに落ち着いた、この展開は初めから予想できていたというような態度。

「結界の維持に使っていた回路を収束し始めたようね。とうとう本気を出したみたいです。炙り出して奴かな？」

「それって……」

「今、この街は昼間のこの学校と同じです、ってことです」

「そんな……だったら、また、あんな——」

思考が結論に至る。

同じだ。全く同じ手口じゃないか。住人達が狂気に侵されて暴れだすようなことがあれば、弓坂が放っておくわけが無い。これだけ大きな力を使えば、起点がどこかなど俺にだって割り出せる。……追い込まれた魔術師の、これが最後の足掻きとでもいうのか。

「さて、と。この状況？ 貴方はどうするのかな、籠野静月さん」

「……俺は」

決まっている。

考えている時間なんて微塵も無い。さっき確認したばかりだ。

——弓坂がそこに向うと解っていて、一人で行かせるなんてことを出来るはずがない。さあ、随分長い間眠っていたようだし、体も十全に動く。そろそろ走り出さないと。この夜の果てが、少女の夢。朝日が昇る前に、長い長い悪夢から醒めてもらおう。

「来旋」

走り出す最後、振り向かない少女に言う。

「ありがとな」

一度だけでも、言っておきたかった。それはまだ言っていなかったことだから。

ありがとう、来旋——助けてくれて、本当にありがとう。

解ってはいたが、来旋は振り返らない。伸びをして、準備体操のように腕の関節を解している。これ以上自分が語る言葉はない、そんな風に小さな後姿が告げていた。なら、俺も無言で別れの言葉を返す。行き先を決めて、後はもう振り返らなかった。

最後。

風に乗った少女の声を聞く。

「それじゃー、健闘を祈ってるから——頑張ってるね、お兄ちゃん」

24／赤い夢？

／24

校門の外で全く予想していなかった人物と出くわした。

赤色の瞳にブラウンの髪。夜に立つ、弓坂絵空という魔術師。闇の中から姿を現した彼女に、俺は思わず何も言えずに立ち止まる。夢を見ているような気分だった。だって、弓坂がここにいるはずがない。

「おまえ……なんで。逃げたんじゃなかったのか？」

やっと口に出せたのはそんなこと。

本当は他に何と切り出せばいいのか解らなかったただけだが、それを疑問に思ったのも事実だった。

弓坂は組んでいた腕を腰に移動させ、盛大に溜息を吐く。そんな緊張感のない動作が、弓坂のマイペースさを表していた気がする。誰よりもこの状況に焦燥しているのはこいつのはずなのに。落ち着いているのは、その緊張が伝播しない為にだろうか。

「あのさ、人のことなんだと思ってるのか知らないけど、この傷で逃げられるわけじゃないじゃない。ずっといたわよ、この中に。来旋は気づいてたはずよ。あいつ、何を考えてるのか知らないけど、わたしのことなんてお構いなしだった」

来旋はこのことを知っていた。……だったら俺に言ったことは嘘だったということになる。

「……全部聞かせて貰ったから。勝手に人のこと語らないでよ」
知っていたなら。

俺にあんな質問をしたのは、その答えを弓坂に聞かせる為——でも、どうして。

意味を考えることは無駄かもしれない。来旋の行動原理は結局全て自分の気紛れなのだから。俺が考えて解ることではないのだろう。一つだけ確かなのは、そのお陰で、またこうして弓坂と会えたということ。なら、来旋には感謝しないと。

弓坂が大腿で歩いて来る、何をするでもなく、赤い目で睨む。心底機嫌が悪そうだ。

「止めても無駄だって解ってる。だから敢えて言うわ」

その言葉を、俺は弓坂から聞くとは思わなかった。

「――協力しなさい。あんたの力が必要な」

――それは、初めて、弓坂が助けを求めてきた瞬間だったと思う。いつも戦いから他者を遠ざけようとしていた彼女が、誰かに頼るのは恐らく、俺と出会うより以前から変わらないことだ。独りで戦ってきた魔術師はようやく、自らの隣に誰かを許した。

それが自分だということが誇らしく、どこか嬉しくも思う。彼女の世界に、こうしてやっと踏み込むことが出来たのだと、そう思うから。――そして何より。

弓坂が他者を許容したという、ただそれだけの事実が嬉しかった。純粹に。彼女がそれを望むならばいつの日にか、同じ場所に行けるのではないかと、信じられたから。彼女が初めて頼った誰かが、自分でよかった。

「当たり前だ」

だって俺は、その為にいるんだ。

断る理由なんてどこにもない。それは自己を否定するのに同じこと。

決めていた。

弓坂を守る、その唯一が自分と信じて貫き通すのだと。

俺がそんな風に答えることなど初めから解っていただろう。弓坂は不敵に口許を吊り上げて小さく笑みを作る。だがその表情はどこか緊張感のない、戦いの前だというのに安堵したような雰囲気を持っていた。憑き物の落ちた、そんな晴れやかな顔をして。

「先に言っておくわ。さっき来旋のお陰で解ったけど、結界の中でなら多分、奴は死なないわ。……予想だけど、あれは結界と同化する魔術なんだと思う。何にしろ、一度回路にそれが記録された以上、次回からは同じ力が使えると考えた方がいい」

「……だったらどうするんだよ。それじゃあ、勝ち目なんてないってことだろ」

「いいえ。それなら結界の起点となる回路の根幹を破壊すればいい。魔術そのものと一体化してるなら、それは術者の体のどこかにあるはずね。――作戦は、わたしがそれを見つけて破壊する。貴方はその時間を稼いで」

「了解……って待てよ。時間を稼ぐのはいいけど、回路を壊すのは何で俺じゃないんだ？ 弓坂は魔術が使えないんだろ」

「回路の起点は口頭で伝えられるものじゃないし、あれだけの術式の破棄は『法典』にしか出来ないわ。それに、わたしだってまるで魔術が使えない訳じゃない。法典と繋がってる以上、完全に世界と繋がりを絶たれることはないからね」

ただし、と難点を最後に付け加える弓坂。

「本来よりもリスクが大きいのは確かね。下手をすれば色を全部持っていない。使えて一回。失敗は許されないわ」

一度限りの魔術。

俺がしなければならぬのは、その一度を確実に成功させる為のお膳立て。弓坂が術式に集中出来るように、一切の攻撃から守り抜くことと、そして確実に攻撃を決められるだけの隙を作り出すことだ。

正直、出来る自信はない。俺はこれまでに一度もあの魔術師に肉薄したことがないのだ。だが答えは決まっていた。俺はただ黙って頷くだけ。それが、自分を信頼してくれた彼女へ返す、紛れもない本音。自信がなくても、事実がなくても構わない。結果はまだないのだから、それが嘘にならないようにすればいいだけなのだから。「よし、それじゃあ行くわよ。やられた分、しっかりやりかえして

やらなくっちゃ」

髪を翻して歩き出す弓坂。少女の背中に迷いはない。どこか嬉々としたような足取り。それは夜の散歩を楽しんでいるようにも、少しだけ強がりにも見えた。

「なあ、弓坂」

ぴたりと、弓坂の足が止まる。

「この戦いが終わったら、どうするんだ。また、同じようなことを続けるつもりなのか？」

「わたしは『法典』だからね。それが運命なのよ」

「……止めるよ、そんなの」

酷く憤りを感じるのは何故かと考えた。体育館で見つけた答え。俺は、自分を蔑ろにする弓坂に頭がきたのではなく、そうさせる世界が気に食わなかった。そうだろ。自分の為に生きられないなんて、そんなことは酷過ぎる。

「もういいだろ。自分の為に生きても。おまえは、弓坂絵空なんだ。『法典』の罪なんて背負う必要はない」

こんなことを言えば怒られるかもしれない。それは承知の上だった。俺は何を言ってもやはり他人でしかないから、弓坂の心境なんて解るはずがないのだから。それでも今、それを言っておかないと後悔する気がしていた。一生、弓坂がその苦しみを背負い続けることが目に見えていたから、我慢できなかったんだ。

それが、彼女を苛む呪いになるかもしれないと。気付いていたのに。

「……貴方の言う通りよ。わたしはね、自分で自分が許せない」

星に唄うように、空に語るように。振り返らない少女は天を仰いで月に話し掛ける。

「『法典』の罪悪も、魔術師としての宿命も関係ない。わたしは弓坂絵空が許せなかった。たくさんの人を巻き込んで、多くの生涯を破壊させて、何千も何万も何億もの人を不幸にしてきた、なのに」

途切れた間は、きつと、声にならない心情吐露。

「生きて、いたいよ。わたしは死ぬのが怖いから」

嘲る風に、少女は言った。

泣いているような口調が少しずつ熱を帯びて、夜空に放つ言葉はいつからか自らへの糾弾へと変わった。

「だって仕方ないじゃない。何億の死を、破滅を知ってるからこそ怖い。怖いよ。だってまだ死にたくない。生きて、いたい。まだ見たいものもあるし、聞きたいこともある。したいことだってたくさんあるのに――独りで死ぬなんて、そんなの怖いじゃない。寂し過ぎるじゃない……！」

だから、と繋ぐ。

それは一人の少女が出した結論。自らが破綻しないように導き出した前向きの逃避みたいなの、強がりな強い絶望の回答。

「だからわたしは魔術師であることを、『法典』であることを受け入れたのよ。それが、運命だから」

泣いている声で、

「……けど大丈夫。言ってくれたじゃない。わたしは弓坂絵空なんだって。そう言ってくれる誰かがいて、わたしを認めてくれるなら見失わない――ありがとう静月」

夜の空の下。

髪を揺らし、首だけを回して振り向いた少女は泣いていた。片方の頬を透明の滴が伝い――彼女の表情は、なにがそんなにもそうさせるのかと問いたくなるほど幸せそうに笑っていた。

「そのことを、誰かに言って欲しかった。わたしは、わたしなんだって」

「……弓坂」

愚問だった。

彼女の人生に、答えはとくに彼女が出している。俺が口を挟むことなんて出来やしなかったんだ。……その答えがどんなものでも、俺は、弓坂絵空の出した答えを綺麗だとずっと思っていたのだから。綺麗なものが汚れてしまわないように。だけどせめて。隣にいて、

彼女を一人にしないように——彼女が彼女であることを思い出せるように、俺は。

せめてこの戦いが終わるまでは、隣にいたいと思う。

「貴方には感謝してる。だから……静月、『法典』を使って」

「……使って、て。どういうことだよ。法典ってのは形のない概念なんだろう」

「簡単よ。魔術っていうのは世界との共感。世界の感情に呼応して色を合わせることよ。それと同じ。貴方は『法典』、つまりわたしに共感すればいい」

それこそ、まさに、

「どうやって？」

弓坂に共感するなんて、出来るのか、俺に。

あの赤い絶望を、俺は一片ほどにも理解できているとは思えない。

「そうね……解った、それじゃこうしましょ」

体ごと振り返って弓坂が寄ってくる。接近に気付けないくらいに自然な足取りで、最後の最後まで意図を悟らせず正面から迷いなくあまりに真っ直ぐな行動に、俺は全てが終わるまで何が起きたのかを把握することが出来なかった。

気付けば直ぐに目の前に赤い瞳があつて。次の瞬間にはそれが瞼に隠れたかと思うと、その瞬間に、弓坂の唇が俺のそれに音もなく重なった。

時間が止まったのか。

世界が音をなくして静止した一瞬。何もかもを忘れて立ち尽くす。弓坂は直ぐに離れていって距離を取ると、瞳同様の色を淡く浮かべた頬を綻ばせて言った。

「えへへ、勝てるようにオマジナイ」

俺が、絶叫する二秒前に、弓坂がやっと弓坂らしい強い口調で——ただしこちらの反応に今更羞恥心が出てきたのか、明後日の方向に目を逸らして——言うのだった。

「ここまでさせたんだから、絶対に勝ちなさいよね！」

俺に出来る返事は、言葉にならない感情の混沌。その叫びだった。

25／最後の夢

／25

夜のマンションを静寂が満たすのは、ここが件のマンションで住人がいないことも然りであるが何よりも、既にこの場所が異界と化していることが決定的な要因といえるだろう。街中の術式を一斉に稼働させ、一点に集められた魔力は現実と夢、正常と異常を隔てる境界として成立していた。

それは明らかに、この中に術者が存在していることの証明となる。夜更けを前にした深夜過ぎ、二人の超越者の決着はその時を目前に待つ。終わりは朝陽と共に。どちらかが果てるか、それが決定する前に協会が到着するか。現状ではこの戦争が残り数時間で終結することだけが、確固として約束されていた。

つまりそれは。

この今はもう、この後の戦いにしかないということを意味している。弓坂絵空という魔術師と、俺がいられる残りの時間は本当に僅かしかない。だからこそ、変えられない結果ではなく、その過程を――せめてそれだけは、彼女が報われるように――弓坂が自身の導き出した答えに笑って胸を張れるように、絶対に勝つことだけを考えて――

「弓坂」

マンション前で、最後の確認をする。まだ定められた結末に納得が行っていないし、抗いたい気持ちもあった。だがそれを今口にすることは、彼女の決めた道を迷わせることに成り兼ねない。本当は話すことなんてなかった。だけど最後に、もう一度彼女の声が聞きたかったから。

「中に入ったら、わたしは直ぐに意識を回路に接続する。負担は大きいと思うけど、お願い」

俺は、なんと返事をすればいいだろう。

なんというのが正しいだろう。

……決まっている、そんなことは。

「大丈夫だよ。あいつに『法典』は渡さない。おまえは絶対、俺が守るから」

信頼して、命運を託してくれた少女に迷いのない意志を告げた。それが何の救いにも、気休めにならなくても構わない。口にしておきたかったのだ。心に決めた、たった一つを自分の言葉にして告げておきたかった。

——だからもう迷わない。幕を引く。『法典』が担う千年間の罪から、彼女を解放してやるためにも負けられない。折角、弓坂自身が見つけた答えを汚すようなことは絶対に。

自動のドアを潜って一階のロビーに入る。かつて少女が焼き払った空間は各所に黒い轍のような焦げ跡を残し、完全に外界から切り離された空間は異様な閉塞感を満たしていた。充滿する、回路から滲み出す魔力が肌を焼く。一触即発の緊張感に息をすることさえも憚られ、俺は視界に、黒い魔術師を認めた。

「遅かったではないか『法典』。時間がないのはお互い様だと思っていたが。解っているのだろう？ 協会に目をつけられた以上、既に魔術師としては致命的だ。故に、その意味では追い込まれているのは俺の方とも言えるな」

弓坂が一步、前に進み出る。時間がないと口にした魔術師と、その現状を共有する魔術師はしかし、焦る様子の欠片も見せることをしない。

「気にすることはないわ。協会なんて関係ない貴方はどの道、ここで果てる」

啖呵を切る弓坂は、その一言を最後に目を閉じた。

これから先、彼女の意識は外界を受け入れない。世界の鼓動に心

音を合わせた共鳴状態となる。ただ世界に己を呼応させる――それは、一つの回路。この瞬間。弓坂絵空という一人の魔術師は、全ての機能を放棄した『法典』としての回路だった。

「忘れたわけではあるまい。貴様は俺の世界では魔術が使えない。そのガラクタの脳髄で、なにを為すと言うつもりだ？」

黒い魔術師が腕を持ち上げる。

背後から、影のように現れ出る三本の針。

「神話再生」

――そして、ここからは俺の仕事だ。

弓坂の前に出る。針と正対する位置に立ち、黒い魔術師に意識を集中する。弓坂はしゃがみ込み、既に意識は結界の回路と完全な同調を完了させているだろう。この状態では攻撃を受ければ一堪りもない。俺がいるのはその為だ。

俺が守る。

弓坂絵空という一つの夢を。

「おまえの相手は俺だ。弓坂は、俺が守る」

「……なるほど、貴様か、人形。その様子では、結界に同調して回路の起点を探すつもりだろうが――」

感覚を研ぎ澄ませ。

二秒後の世界は最前線。

余計な思考は放棄し、光の針の軌道にだけ集中しろ。

「――そんなことを、許すと思うか？」

振り下ろされる指揮棒のような外套の黒い腕。

スタートの合図と共に飛び出す高速の針。

数は三本。魔術師の背後から飛来する。――回避することは難しくない。いくら速くても軌道が直線ならばその線上にいれば当たらないのだから。この魔術師の強みは数と速度。来旋に消耗させられた今では、普段のような大量射撃は出来ない。故に目の前の三本が引くラインを避けさえすれば――

違う。

三本じゃ、ない。

寸前の判断で後方から向ってくる三本を回避した。しかし気を取られている内に正面からの一本が肩を掠める。痛覚が混乱を打ち払い、続け様に上方から落下してきた三本を横っ飛びで躲す。針の飛来はその九本で一度止まった。

こちらの読みを外した魔術師は愉快気に口元を歪めつつ、だがそれだけ完全に読み勝っておきながら標的を仕留められなかった不手際に疑問を抱いている。その思考が答えに連結するまでに時間はそれほど必要にならなかった。

「なるほど、心眼か。そしてその身のこなし。彼の神話の再生という訳か」

こちらのカラクリは、早くも看破されてしまった。

神話の再生。その魔術の本質は、伝承の幻想を形にすること。それは武器の類に質量を与えるだけでは決してない。神話それ自体を再現するのだ。無意識的にはあるが、終日の再生でそれに気付いた。だからこそ、この魔術師の攻撃を避けるために自身を媒体として心眼を再生したのだ。

隠すつもりはなかったとはいえ、出来れば手の内は知られていない方がいい。だが、そういつてもそれがばれたところでこちらにはそれほど影響もないのだが。

「無様な戯曲だ。滑稽な人形劇とでも言うておこう。貴様の行いが、形を為すことなどない。――教えてやろう。人形が何をしたところで、その空白は何も生み出さないと」

針が煌く。

切っ先は視界の中に六本。

心眼、空間把握能力の異常化で感知した回路の数は他に十二。合計は十八。さっきの攻撃の倍。それらの切っ先から延長上の線を描き、死角を探す。奇妙なことに、俺の今いる場所こそ、針の降らない安全地帯だということが解った。

針の隊形に疑問を覚えるよりも早い。魔術師が指を鳴らす。一斉

掃射される針の死角がこの場所。何らかの意図を察して回避に移ろうにも、これでは動きが縫われている。

一本。二本。三本。四本。五本。六本。七本。八本。九、十、十一――

「――ッ！」

――虚空を薙いで大理石の床を抉った十二本目の次、十三本目が脚を掠める。続く十四本目は腕。十五本目は肩。十六本目は脇腹。十七本目は額の軌道――それを直前で躲す――最後、十八本目は首へと向って跳ね上がってきた。

「ッ――回路連動、重複再生！」

回避が間に合わない。なら、防ぐ為の神話を新たに再生する。

この緊急では杜撰な魔術行使しか出来ない。故に生み出した槍は、針との衝突と同時に光の塵に変わって碎ける。だが結果は、そのお陰で何とか存命できたという現状を作り出した。

……何が起きた。確かにここは安全だったはずだ。針の数も最初に見た数と同じ。なら考えられる可能性は、針が軌道を途中で変更したというものだけ。そして、それを魔術師が意図的に行ったということだ。

四つの針に付けられた傷が痛む。後になるほどより正確に。より深く体を抉っていった。直前まで俺にそれを悟らせない為に。罅るように少しずつ致命傷に近づいている。……なら、これは警告だ。不本意にも俺はその警告のお陰で救われた。もしも一本目から急所への軌道で飛んでいたら、その時は。

「なにを驚くことがある。俺の魔術は光の使役だと、貴様も気付いているはずであろう？」

今度こそ裏を斯く事に成功して、喜悦を含む声で黒い外套が言う。「光は屈折もすれば反射もする――これが答えだ。貴様の再生した神話は完全ではない。そんなものは人形が奇跡の真似事をしているに過ぎない。そもそも魔術師ではない貴様に、その魔術が操れるはずがないのだ」

続いて浮かび上がる針の数は目に見えるだけで十二本。起動している回路の数は全部で三十を超える。次の攻撃は初めから反射や屈折を起こして変則的な動きを見せるだろう。奴の言う通り、こんな中途半端な神話の再生では回避など出来ない。

俺自身の性能では、奴に及ばない。この次の攻撃を躲せず、体は挽肉に変えられてしまう。

だからどうした。そんなことは百も承知だったはずじゃないか。魔術師ではない俺が、魔術でこの男に競り勝とうなどという思い上がりは初めから持ち合わせていない。器量で叶わないなら、魔術の質で打ち勝つ。

正面から戦っては叶わないなら――勝てる一点で勝負をすればいい。それだけのことだ。

「次だ。さあ――受けきれるか、人形」
指の鳴る音。

針は暴風雨の如く飛来し、切っ先の軌道上にあるものを容赦なく貫いていく。速度は物理法則の最速。軌道を読むことはもう不可能。俺の目で追うことなんて出来ない。故に攻撃を躲す為に、自動で針の飛来する位置を読み取って迎撃する神話を再生する。

回路接続。

幻想を形に変える、意識の果てと回路を結びつける。

作り出すものは戦乱の神が持つ最強の槍。

必中必殺の神話を再生して、全ての針を防ぎ切る。

一本目を閃いた右腕が――右腕を引く神槍が薙ぎ払う。さらに二本三本目と迎撃して――四本目が腕に突き刺さる。間に合わない。本来投擲して使用するこの槍を手にとってしまっただけは敵わないのだ。そもそも完全でない神話。用途を間違えただけで完全に奴に劣る。

だったら。

さらにもう一本左手にも槍を再生する。

足りない部分は数で補う。速度で、性能で敵わないなら同じ物を二つ作ってカバーするだけだ。

槍が二本になり、防御に余裕が生まれる。このまま一方的に受けに回るよりも、この隙に敵の懷に飛び込むのは十分に有効な策といえるだろう。迷うことなどなかった。針を弾きながら直進して魔術師に迫る。針の残りは十五。全て破壊した後、敵をこの手で穿つ。槍を振りかざす。飛び込んでくる三本を同時に切り裂き、バウンドするように反射して跳ね上がった針を旋回して薙ぎ払う。その時点で残りは八本。躲し切れない数じゃない。魔術師との距離は残り十数歩。三秒もあれば、決着は着く。

一本。二本。三本。死角から飛来する二本と、屈折して落下してくる二本。それら全てを両手の槍で迎撃する。最後の一本と、左手の槍が同時に碎けた。無理も無い。これほどの神話を同時に二つも再生することなど出来ない。

だが綻びが内包されていた片方が碎けたとしても、まだ一本、右手に残っている。

「……行くぞ、シリア!! ロッドレイル!」

全力で、右手の槍を外套の魔術師に打ち込む――! だが、防がれた。

目前で投擲した槍は、手元を離れて数歩先の敵を穿つはずだった。それが実現されなかったのは、突然出現した光の膜に進路を阻まれたから。周囲の光を掻き集めて発生した膜に、勢いを殺され、槍は硝子細工みたいに碎け散った。

「言ったはずだ。俺の魔術は光の使役。針の形を模しているのはあくまで、それが攻撃に適しているからだ。必要ならば、こうして盾としても使用できる。俺の周囲の光が危機を感知し、全自動で防御する。即ち――貴様の魔術が、この身に届くことはない」

高らかに宣言して、未だ残る膜が形式を変える。円形に浮かぶ光が触手のように先端を伸ばし、三本の棘と成った光に体を打ち抜かれる。咄嗟にまだ再生を続けていた心眼で後ろに飛び、致命傷は避けられたが、それでも、思わず膝を屈してしまうだけのダメージは与えられていた。

全自動防御。

操るものが光なら、この空間で奴は無敵。

こちらの攻撃は全て防がれ、奴は無限の弾幕をいかなる場合にも用意できる。

……だとしても、だ。

奴の魔術が光を盾にしたとしても、そんなことに意味はないはずだ。再生した神話は必中の神槍。防御があつたとしても貫いて目標を穿つ。それが行われなかった。つまり、俺の神話再生は完全ではなかったということ。奴の言う通り、何も、為し得ていない。悔しくても、それが現実だった。

「興が醒めたな。よく解った人形。これ以上貴様と戯れたところで無為だ。速やかに果てるがいい」

周囲が急激に光度を上げる。

針の数は視界の中だけでは数え切れない。回路の数を測ると、それは実に百を越えていた。それだけの数の針が、ロビーの中にびっしりと浮かんでいる。円形状に浮遊する数百の針。その全てが飛来したならば、今の俺には防ぎきれないだけではなく――

「『法典』を守ると言ったな。なら教えてやろう。これが現実だ。

――人形の貴様には、何も救えない」

そうだ、このままだと弓坂まで針に撃たれる。当然ながら今の弓坂にそれを防ぐ手立てはない。

俺が、守る。

そう言ったはずだ。

約束したはずなのに。

俺には何も守れないのか。本当に。奴の言う通り、人形だから何も為し得ないのか。……大切なものの一つも守れず、無意味に切り刻まれて死んでいくだけなのか。だったらなんの為に、まだここにいるんだよ。色を無くして、それでも存在し続けるこの命に意味があるなら、この瞬間、少女を守る為じゃないのか。

だったら、その役割を果たせ。

無理でも何でもいい。再現しろ。再生するんだ。不可能なことなんてない。絶対に叶う。まだこの意識が世界に届いていないだけ。全てを放棄しろ。全力で偽装する。今度こそ確実に必中を謳う神の槍を再生して凌ぎ切るんだ。

「終わりだ、人形。絶望の光に溺れて果てるがいい」
光が吼える。

唸る針が四方八方。周囲全てから降り注ぐ、それは垣根無し of 掛け値無し。回避不能の完全死角なしの弾幕。空が落ちてくるようなものだ。故事に違うのは、落ちてくるそれは確実に質量を持ち、地上の全てを破壊するということ。

……集中しろ。

まだ時間はある。

世界の刹那を自身の永遠で凌駕し——意識は、体は回路としての機能を果たす。

作り出せ、神話を再生しろ。

全てを賭して、守り抜け——己の存在する、その意味を。

「神話再生！」
アクセス

回路に魔力を流す。幻想が形を帯びるよりも先に手にとる神話を投擲。続いて二つ目。同じことを回路が尽きるまで繰り返す。数で質を補い、質で数を補う。必中の神話は死の雨とぶつかり合い、確実に相殺していく。その度に頭が焼き切れそうな熱を帯び、激痛を伴うが今はそれどころではない。手を休めれば全てが終わる。今は、一瞬も気が抜けない状況だ。

投擲を繰り返し、弓坂の元に馳せる。解っていた。最初から弾幕の全てを防ぎ切ることが叶わないことぐらい予想は出来ていたんだ。だから消しきれなかった分は、取り零しはこの身を以て防ぐ。弓坂の前に戻ったのはその為だ。

幸いにも、残った針の数は初めの十分の一にも満たなかった。だがそれでも針は十分な殺傷能力を持つ。飛来する針を背中で受け止めて、致命傷を避けられたのは幸運だろう。

とはいえ状況は最悪だった。内側からは魔術行使に耐えられず悲鳴を上げる脳髓が、外側には針の刺傷による全身が、意識を飛ばすほどの激痛を訴えている。知らず、膝を曲げていた。既に立ち上がる力も気力も残っていない。目を閉じれば、もう何もかも終わってしまうんじゃないかと、そんな気さえしていた。

「静月……大丈夫」

それだけの状態でまだ倒れていないのは、彼女が、体を支えていてくれたからだだった。

「……見つけたわ、回路の起点を」

よかった。なら、時間稼ぎには成功した訳だ。せめてそれだけの目的は果たせた。

だけど、ここまでかもしれない。

もう魔術は愚か、指一本動かすことさえ出来る気がしない。全身からの出血は運動機能を停止させるほどにまで達していた。放っておけば、このまま血が足りなくて死ぬんじゃないか。今はそれも冗談ではない。目を閉じれば、全てを放棄してしまえば、それで終りだ。妥協すれば起き上がる気力は尽きる。そしてもう、瞼を支える意識も持ちそうにない。完全に……終りだ。

「……静月、ねえ、静月！」

誰だよ。

何で、叫んでるんだ。少し静かにしてくれ。あんまり騒がれたら眠れない。そんな顔で――

「まだ終わってないのよ！　今寝たりしたら許さないんだから――しゃきつとしろバカ！　起きないと殺すわよ……！」

――泣かれたら、眠ってられないじゃないか。

……俺は、何をしているのだろう。まだ何も終わっていない。勝手に一人で終わらせていい状況なんかじゃないはずだろ。まだ俺は誓いを果たしてもいない――弓坂絵空を救うという誓いはまだ――折れ掛かっていた心を奮い起たせる。こんなところで果てるには、俺はまだ何も為し得ていない。弓坂を守ることも、あの赤い夢から

の解放も何もかも、俺は何一つ形にしていけないじゃないか。こんなままで、終われない。終わらせやしない。

守るんだ。

彼女を責める全てから、この手で。『法典』の内包する千年間の罪も全て破棄する。

必要ならこの世界だって滅ぼそう。

脚に力を籠める。立つと決めたら、それは思ったよりもずっと簡単なことだった。体はまだ十全に動かし、回路だって擦りきれてなくなつた訳じゃない。まだ使える部分がいくらでも残っている。それはつまり戦えるということ――弓坂を守る可能性が残っているということだ。

立ち上がる直前、最後にまた赤い夢を見る。……思えば、そもそもここが『法典』の世界だった。この場所が弓坂絵空の世界。彼女の感情が空となり色を満たす固有の心象風景。ここが彼女の世界なら、この場所は彼女の色で満ちている。

それはなんだ。掴み取れ。同調するんだ、その意志に。

答えなんて簡単。肌で感じる、存在全てが呼応する。少女の感情に、共感する。見つけ出すと、世界はすなりとこちらの存在を受け入れた。――自身の回路が、世界が互いに響き合う。法典回路――魔法使いの遺産に共鳴する。

「ああ……やっとなつたよ。これがおまえなんだな、弓坂」
支えは必要ない。

もう一人で十分だ。

「ありがとう。弓坂、やっとなつたよ、おまえが」

それだけ言って後は敵対する黒い外套に向き直った。恐らくこの後の刹那が決着に繋がっている。そしてその幕を引く役目は、こちらが担おう。時間がない。夜が明ける前に全てを終わらせるんだ。

「……しぶといな、人形。不愉快だ。魔術師でもない貴様が『法典』への道を阻むことが何よりも気に入らん。問おう。何がおまえを動かす。何が為に命を賭けて守ろうとする、その罪惡の塊を」

何が、この意志を震わせる。何がこの身を駆動させるのか、答えなんて簡単だ。だってそれはずっと近くにあったことなんだから。俺が弓坂に感化されているなら、内に満たす感情は同一のもの。だって同調するなんて容易い。

「何の為になんてない。俺はただ、守りたいと思うから戦うんだ。大切なものを守りたいから、戦うことを誓ったんだ。そもそも『法典』なんてものにも興味はない」

赤い夢に少女が願っていた想い。彼女が泣いていた理由。

マンションで、公園で、学校で——いつも弓坂が願っていたことは一つだけだった。そう——彼女は守りたいと、視界に映る全てを守りたいと願っていたんだ。その気持ちに強く共鳴する。

やがて、『法典』を回路とした魔術が起動する。虚空を切り裂いて切っ先を浮かび上がらせた巨大な黄金の姿。これが真正正銘。最強の伝承。戦乱の神、破滅の神と語られる存在の愛槍。

「そうだ。おまえの言う通り、俺は魔術師なんかじゃない。だから『法典』なんかに興味はない。それが彼女を責める存在ならば、この手で破棄しよう」

槍の全容が具現化する。

黄金の煌きは世界を震わせる。

唯一度だけの投擲で戦争を終結させる神の槍。必殺、必中を謳う最強の伝説。——それは、この戦いを終わらせる為の再生。千年の月日が鎖となり、彼女を締め付ける罪と成るなら破壊する。これはその為の力だ。

神話の名は神槍。ダングニル

神々の中で最強に座する戦神の槍。オーディン

この力で終わらせる。

赤い夢も、千年の罪も——彼女を苦しめる全てを終わらせてやる。神槍が世界の脈動を思わせるように、ゆっくりと旋回を始める。終局は目の前。最後の激突を前に世界に呼応する槍の波動を全身で感じ、目を閉じる。枯渇した回路は『法典』と繋がり、十全に起動

していた。

この光景こそが神話。

そして、決着の時だ。

「―――受けきれるか、魔術師。この一撃は千年の罪を穿つ」

黄金の絢爛が虚空を裂いて浮かび出る。

全ての幕を引く一投は、人々の夢で紡がれる伝承。幻想に形は要らず、夢想するのは無限を内包する最強。泡沫に散る一閃に全神経を傾け――決着の刻に口火を切り落とす。

「……傲りが過ぎるぞ、人形。いいだろう。その神話が幻想のハリボテであることを、身を以て教えてやろう」

黒い魔術師が手を上げる。再び空間を満たす光の針、それら全ての切っ先は神槍に向けられ、隠すつもりもない殺意を惜し気もなく放っていた。

始まりは音もなく。

二つの回路が鼓動を同時に打ち鳴らす。その瞬間が重なったのはある種の奇跡だったのかもしれない。

幕の開いた先にある決着へ向けて――無数の針と神槍が最後に閃く。

終局は、今この瞬間の攻防の先に。ここに、激突の幕が切って落とされた。

十

数千の針が神槍と衝突し、火花を散らす。

神槍は巨大な投身に針の刺突を受けつつ、魔術師に届く直前の光の幕で直進を阻まれていた。それは、シリアロッドレイルの魔術

と俺の魔術が拮抗しているという構図。最強の槍を再生したとはいえ、どう足掻いても急拵えの俺の魔術では、魔術師としての年季がある奴のそれには敵わない。だが状況はこれだ。均衡なら十分な成果と言える。

魔術師の注意をグングニルに向けさせ、俺自身はその背後に回る。これが作戦。神槍はあくまでも陽動の役割でしかない。奴の意識を完全に一部に集めるには、半端な神話では駄目だった。迎撃に耐えつつ、防御を突破し得る神話の再生。それこそが、不完全な再生でありながらも幾度と奴の魔術を防いできた神槍だったのだ。

元より、これで倒せるとは思っていない。仮に神槍が針を全て弾き、膜を突破したとしても——結界の起点は貫けず、風穴を開けた膜もそれこそ光速で修復される。

俺がしなければならぬことは道を作ることだ。弓坂の魔術が必殺の一点を射抜く為の準備を行うこと。それこそが籠野静月に与えられた役目。

そしてそれを可能とする神話は唯一つ。

終日の再生。

あの神話をもう一度再現することだった。

世界を焼き尽くす彼の一振りは、即ち万象の根源となる回路を断絶する力だ。俺が斬るのは光が膜を作り出す為に使用する回路の破壊。そうする為には余計な邪魔は排除し、確実に隙を衝かなくてはならない。その為の陽動が神槍。全てはこの神話再生の為に打った布石だ。

——だが可能か。

法典回路に意識を接続している今、さらに他の神話を再現するなど——

考えるまでもない。そもそもそれしか手はないのだから、迷っている暇なんてなかった。ラグナロク世界の終日そのものの再生は不可能でも、その中から一場面、終末を齎す英雄の一刀だけを再生することはきつと可能だ。

魔術師はまだこちらに気付いていない。これが最大の勝機――逃すことはしない、失敗も許されない。この一度で、確実に仕留めて見せる。

「神話、再生」

魔法の枝。スルトの一振りで終日の一部にして最大の一瞬をここに再現する。感覚はない。己自身が魔術の一部になり神話を再現するこの瞬間、俺の意思とは無関係に体は駆動していた。天から降るような一振りは巨大な剣を大地に放つ。――剣の切っ先が、光の幕と激突した。

「……ほお、神槍は陽動か。本命はそっちの神話。どうやら心得ているようだな。貴様が勝つ為の唯一つの勝機が何なのかを。だが浅はかだ」

黒い姿が半身を振る。右手の掌を突き出して光の膜へ指令を下す。突如、形体を変える光。ドーム状の膜はそこから槍のような柱を突き出し、防御と共に迎撃をも担う壁へと役割を変えた。その数本が体を串刺す。

痛みは勿論ある。だがこれは幸いか。いくら痛みを感じようと、どれだけ体が破壊されても関係はない。既に体は神話は再生の触媒となり、それを果たすまでは例えこの身が碎けても消えることはないのだ。だから肉体の損傷など問題にはならない。戦うべきは物理的な外界の敵ではなかった。

大きな力を使えば必ず見えてくる、例の赤い夢。こいつが視界に張り付いて、頭の中をぐちゃぐちゃに掻き回してくる。いくらなんでも、それで回路との接続を絶ってしまえば一貫の終り。俺は光の雨に打たれて肉片に分解される。

「ッ……しつこいぞ人形。とうにその体も精神も限界を超えている。何故まだ動く。何故まだ戦える。何故、そうまでして貴様は『法典』を守ろうとするのだ！」

怒号そして数を増やした棘が関節を抉る。

赤い視界。いつもの終わった光景の中、少女が泣いている夢。こ

れが見たくないから、こんなものが許せないからこそ戦うことを決めたんじゃないか。彼女を責め続けて苛むこの千年の赤い罪を^{ユメ}終わらせる。世界の終日なんて大それたものじゃなくていい。ほんのたったそれだけだ。この馬鹿げた悪夢を消してしまいたいだけ。

世界が平和であって欲しい。そんなのは誰もが心のどこかで願う夢だ。少女はそんな大きなものではなく、せめて自分に救えるだけの、目に見えている世界だけは守りたいと願った。

同じことを思ったはずだ、俺も。

「……なんだ」

自分の目の前で傷付き、それでも自身を貫こうとする姿が綺麗だった。

千年の罪に苛まれながらも強く輝いていた、少女の存在が本当に綺麗だったから、この心は最初から感化されていた。きっと、色を無くして空っぽになってしまいう前から、彼女に当てられていたんだ。だったらこそ、守らないといけない。

無色になった自我に残留するそれが唯一の自己ならば貫き通せ——
——大切だと思つた一つを全力で守り抜け——！

媒体となって機能するだけの腕に意思を通わせる。生み出す神話に自身を連動させた。

止まらない。

これで体が果てても構わない。何故ならこの心は、彼女を守りたいと願う気持ちは本物なのだから。

「本物……だったんだ……！」

赤い世界から流れ込む絶望の叫び。

無念の断末魔も、怨嗟の嘆きも、救済を求める糾弾も、全ての悲しみを振り切って叫ぶ。こんな世界は間違いだと、夢に縛られた少女に居場所を教える為に。

大きな悲しみ。

絶望の記憶。

赤い世界はもう必要ない。これからは俺が、弓坂の居場所になる。

誓ったのだから。

生涯を擲ってでも、彼女を守るのだと、それは、それだけは――
「……この心^{ココロ}だけは、本物のだったんだ――！」

神槍が正面から壁を突き破り、しかし再度出現した二枚目の膜と相殺される。

一つの回路を放棄したことにより、残り一つに全てを注ぎ込むことが出来るようになり――終日の一振りは、天空から大地までの世界の全てを断絶して落とされた。

「な――んだ、と……！ 貴様……己れ人形……ッ！」

炎が光を飲み込む。完全に光を焼き切った終末の炎は一瞬の内に回路を焼失させる。全ては一瞬のこと。回路を焼かれては魔術師が気付かない訳がない。だが今はまだ何の手も打てない。

つまり、今のこいつには、

「――弓坂アアアアアアアアアッ！」

背後から胸の中心を貫く、その紅蓮の一閃を躲す手段などあるはずがなかった。

十

神槍が削った大理石の上を、その亀裂よりも細い弓の軌道が黒く焦げ跡を残していた。無数に散らばり浮遊していた光が、魔術回路の束縛から解放され霧散する。残ったのは刹那前までの鉄の音が乱れ飛ぶ喧騒とは打って変わった静謐だった。

やがて胸を穿たれた魔術師が小さく呟く。

戦意も殺意も失せた声で。

己の破滅を射抜いた赤い魔術師を振り返り、しかし何も言わずに視線を交わすだけで体を戻す。

魔術師の体は影のように、吹いてもいない風に流される砂となつて消え始めていた。その口から一筋、流血が零れだす。黒い長身の姿は感情もない無色の視線でこちらを見下ろした。

「おまえの空白は、我が死を内包するか。道理で、千年の罪をも、許容するのも納得がいく」

最後に、恐らく嘲笑ではない笑いを浮かべて、何かを為し得たように満足げな顔で、

「努^{ゆめ}忘れるな、それは、いずれ世界を滅ぼす。終日の因だ」

弓坂は、最後の魔術で既に立っていることも困難な状態であるはずの少女は、尚も凜とした眼差しで強く消えていく黒色を見据えていた。二人の魔術師の視線が交錯し、終わりの時は静かに訪れるのだった。

「だがそれさえ許容するならば人形。貴様の色は、本物かもな」

興味も根拠もなさ気に、それが黒い魔術師の最後の言葉となる。

回路の焼き切られた、一つの結界として成立したその色はここに、呆気なく消失した。

26／世界の色、彼女のイロ

／18

朝焼けが近い。夜更けを過ぎた地平線は既に黄金を滲ませ、夜の終わりを告げていた。

少女は屋上の縁に立ち、街を見下ろしている。自分の守ったもの、守れなかったものがそこにはあって、きっと今、その清算を彼女なりに行っているのだろう。その小さくも尊大な後ろ姿を、俺は言葉もなく見守った。

空が見たいと弓坂が言った。だから最後の時間をこの場所で過ごすことにし、今に至る。けれど交わす言葉は一向に見付からず、氣付けば夜明けの色を眺めるだけで時間は過ぎていた。やがて冷たい風が吹き抜け、屋上に音を生み出す。弓坂は、

「終わったわね。もう直ぐ協会が来る。それまでに、全部終わらせることができてよかったわ」

別段話すこともなく、弓坂自身も、その言葉はこの沈黙に氣まずさを感じて口にしたのかもしれない。

「そうか」

なのに、こんな言葉しか返せない自分が少し憂鬱だった。本当はもっと言いたいことがあったのに、それが言えないのは、思いを口に出してしまえば未練が残る氣がしたから。……こんな時にまで、まだ先にある別れを惜しむ自分を律する。今はもう、答えを出したのだから、未練なんて持つてはいけない。

そうすることが、少しの間とはいえ共に戦った彼女への感謝と労りだと信じている。

「こんなことで『法典』の罪は消えないけど、この街を守れてよか

った。……でも一つだけ、謝らないと」

黄金を背にして振り返る。風に流される髪は透き通り、朝日を受けて輝いていた。その姿があまりに綺麗だったから、気を抜いて彼女の言葉を聞き逃しそうになる。

「ごめんなさい。わたしは、あなたを殺した。守りたいと、思ったのに。あなたは、わたしを守ってくれたのに」

その言葉に、苛立ちを覚えた。自分が殺されたとか、そんなことなんてどうでもいい。――謝らないで。俺にそう言って、そんなルールを取り決めたのは弓坂自身だ。だからこんなものは彼女の言葉ではなく、弓坂絵空という少女がここにいない気がして、それが嫌だった。

もしかしたらそんな心境が顔に出ていたのかもしれない。弓坂はくすりと笑うと、晴れやかで満ち足りた風に笑顔を見せ、

「なんて――わたしらしくないか」

いつもの、彼女らしい態度で悪びれずに笑うのだった。

その様子に安堵する。戦いが終わって、ここにいる少女はやはり籠野静月が好きだと感じた弓坂絵空で、あの夜から何も変わっていない。いつでも自分本意で、勝手に、そして何よりも甘く、自分を放り出して他人の心配をするようなお人好し。

よかった。と言って、抱き締められた記憶が今も消えない。思えばあの瞬間から、俺は彼女を守りたいと願っていたのかもしれない。いや、もっと前から――全ての始まりの、このマンションでの災害から、ずっと。

「おまえらしいよ、その方が」
嬉しかった。

いつも通りの彼女がそこにいて。

自分が今どんな表情で少女と向き合っているのかは少しだけ予想ができた。思わず緩んだ空気に、口元が微笑んでいる気がする。だって、弓坂がそんな風に笑っていたから、きっと俺も同じだろう。この心は、彼女に感化されているのだから。

「はあ——疲れた。ねえ、籠野くん。ほら見てよ、空、すっごく綺麗だよ」

心からそう思っているのだろう。脈絡もなければ、口調もどこか無垢で幼い。幼少期の思い出に語るような口調もしかし、言っていることは確かにその通りだった。本当に綺麗な空。

ふと思う。

——どうして、世界はこんなにも綺麗なのだろう。

それは、ある白い少女から貰った疑問。彼女は答えを見つけたと言った。どうやら、俺も答えに行き着くことが出来たらしい。今この瞬間にそれを自覚した。

「弓坂、おまえはさ、何で世界はこんなに綺麗なんだと思う？」

「なにそれ？」

「なんでも。ただ思っただけだよ」

ふうん、と興味も無さそうに言う弓坂。

夜の終わりが近い。空は次第に夜を排除し、完全に朝へと移り変わろうとしていた。こうして話してられるのも、後僅か。そう思った時、

「やっぱり、わたしはわたしが許せない」

弓坂が言った。

「何度考えてもそう。それは決して変わらない。わたしがわたしで在る限り、ずっと、許すことなんて出来ないと思う。それが、わたしの答え」

「……弓坂。だけど、それじゃあおまえはいつになったら報われるんだよ。おまえは十分、色んなものを守ったのに」

「でも、滅ぼした数には及ばない。それに今度のことは何から何まで、あなたに助けられちゃったしね。本当、ダメダメよ」

弓坂が手摺に掛けた指を離す。こちらに向かって歩いてくるのは、もうこれ以上話している時間がないと言うことだろう。屋上の出口に向かって歩く、その脚を最後に一度だけ停止させた。

「けどもしも、もしもいつかわたしが、わたし自身を許せる日が

来たら——」

濁りのない、純粹な微笑みが黄金を背にして唄うように言う。その一言が全ての救い。戦いの結果得られた、ただ一つの答えにして報いだった。

「——その時は、静月を好きになり、また戻ってくるね」

だから忘れないでと、彼女は言った。今はまだ自身が許せないから、誰かを好きになるなんて出来ない。報われてはいけない。だけでもし、自分が罪を許せるだけの自分に出会えたなら、その時はまた——

それが、弓坂絵空の手にした答えだった。

長く自らを蔑ろにしていた少女はこうしてやっと、自分と向き合い、その始発点に立つ。運命と、『法典』、魔術師としての宿命と諦めていた生涯を己の手で切り開く為の旅路に今就いた。

参ったな。……これだと、いっしょにいたいなんて言えない。彼女にそれを自覚させたのは、俺なのだから。止めることなんてしてはならない。折角彼女が出会えた弓坂絵空を、無駄にしたくはなかったから。僅かに残った未練を立ち切った。言ってやる。始まりを祝す約束の言葉を胸を張って朝焼けに。

「約束だ。忘れないよ、俺は絶対」

振り返れば夢みたいなこの日々も全部。思い出はいつまでも綺麗なままで、ここに留まって失われる筈はないのだから。もしなくしてしまいそうなら思い出す。弓坂が好きだった俺自身を。この心はもう、無色なんかじゃないんだと信じたいから。

「大丈夫。心配しないで。わたしはもう、大丈夫だから——ありがとう、静月」

踊るような足取り。弾むような体。ふわりと舞った髪の毛の匂い。瞬きの間に、少女と間近で目が合う。

「じゃあね。最後だから言うけど、わたし、あなたのこと嫌いじゃないわよ」

言い残したことはそれで最後。泡沫の逡巡も纏まる前に、赤い目

をした魔術師の少女は夢みたいに消えていった。今度会えるのがいつになるかも解らないのに、そんな、呆気ない別れ。でもだからこそ知らず笑い声が出ていた。剩りにも彼女らしい、その猫のような去り際に。

「まあ……いいか。気長に待つさ」

さしあたり今は、こうして空を見ていよう。いつまでも、せめてこの黄金が青に変わるまではここでこうして。これまでを思い出にするのは、それからでも遅くはないだろう。空が青くなったら一先ず眠って、夢を見る。いつかの赤い夢は、また見られるのだろうか。くだらない思考。纏まらない意識にとりとめもないことばかりを考える。……そうだ、最後に一つ、答えを見直しておこう。折角見付かったのだから、忘れないように。

世界はどうしてこんなにも綺麗なのか。
決まっている。

——ここに、彼女がいたからだ。

／E p i l o g u e

恐ろしいくらいに平和で馬鹿静かな日々が、また少しずつ流れ始めていた。

それはまるで、つい一週間前に起きた全ての出来事が夢だったのではないかと思えるほどに緩やかで、穏やかな、そんな時間。そこには赤い魔術師も黒い魔術師も白い双色なんかも介入しない。全く以てほのぼのとした、どこにでもありふれた日々の木漏れ日。暖かくてつい、転た寝をしてしまいそうな、そんな時がここにあった。

「籠野くんっ！ やあやあ、おはようおはよう！ 今日はまたどうしたんだい、こんな朝早くにっ」

……と、人がシリアスな流れから大人しい独白で綺麗にこれまでを纏めようとしていたのに、空気の読めないこの剣道少女は元氣いっぱいにそれを破綻させてくれるのだった。誰あろう。鏡岬深紗希だ。この、片腕を吊りながらも毎日剣道部の練習を欠かさない生粋の熱血は、今日も今日とて元氣百倍である。

実にやかましい。

「あれれー？ 機嫌が悪いね、籠野くん……もしや、失恋でもしたかい！」

ばっしーん。鏡岬のギプス後頭部強打。俺涙目我慢できない。なんか、色々冗談になってねえんですけどこの人。

鏡岬さんは続けて、がっしーんがっしーんとばかりに背中をどついてくる。背骨が折れそう。痛いから。本当痛いから。

「あっははは。若いね、若いよ籠野くん！ 大丈夫！ 君はまだまだ若いよ。君の未来は明るい！ そうさ泣くな少年、君は腐った蜜

柑じゃない！」

「鏡岬」

「おうっ、なんでい」

何故に江戸っ子？

「うるさい」

「ごめんなさい……」

あ、しゅんとした。

怪我をしている見た目もあるし、こんな本気で所在無さに立てれると精神衛生的にあまりによろしくない。なんだか自分が悪いことをしているみたいな罪悪感に心の何処かがきりきりと痛む心地だ。まあ、それでも。

俺には、痛む心なんてないんだが。

「朝から元気だよな、おまえら。……甚だ面倒くせえ」

「お、出たな仏頂面金髪ヤンキー風紀委員！ 相変わらず今日も倦怠だねえ、まったくよう！」

「やかましい。つうかギプスで殴るな。おまえ、全然もう動けんじやねえかよ」

「ダメダメこんなんじゃ！ 折角練習来てくれる子が増えてきたんだし、あたしは全快するまで休養だよ、てやんでー！」

「うっせ……痛え！ 止めろ、叩くなマジで痛いから止めろこのアホ！」

うわぁ……こんな御道初めて見たかも。されるがまま鏡岬に叩かれてるし。しかも結構痛そうだよ、あれ。しかしまあ、鏡岬がはしやぐ気持ち解らないこともない。あれ以来、腕を負傷してもなお一人練習を続ける鏡岬の姿に感化され、練習に顔を出す生徒も現れ始めていた。その大概は後輩で、元から鏡岬のファンみたいな連中だったのだが。練習を全員が全員拒否していたのには、やはり周囲の共感が強く意味を持っていたらしい。

……勿論、それだけではないのだろうが。その、言葉に出来ないような要因に関しては、例の事件である程度の収集が着いたのだろ

う。ある魔術師の謀略が、思わぬところで福と転じたのだ。

ていうかこいつ、全然休養してないじゃん。

御道もそんな実情を意識して、今は鏡岬に好き勝手させているのかもしれない。

「てやんでー、てやんでいつ！」

「痛いって、こら！ いい加減にしろよてめえコノヤロ！」
……。

御道、もうただのチンピラじゃないかよ。

「ああ、そーいや静月」

鏡岬に強奪された赤い風紀委員の腕章を奪い返そうと奮闘する御道は、思い出したように俺へと話を振った。その間、鏡岬は終始笑顔で悪戯を続ける。御道の風紀委員腕章は、あろうことか彼のブレザーの背中に装着されていた。……安全ピン。自分じゃ取れないぞ、あそこは。

教室の入り口を親指で示し、御道は言った。

「お客さん——」

見る。示された方向にゆっくりと顔を向けて、

「……おまえの、妹だ」

白い、双色の瞳をにこやかに輝かせる棺継来旋をそこに発見した。

＊

「わたしでごめんね。でもさ、絵空ちゃんは当分この辺にはこれないよ」

来旋の来訪により、一限目はめでたくサボタージュが決定した。で、ここは青空の広がる普段なら立ち入り禁止区域に指定される屋

上。来旋が扉の鍵を持っていても、俺はちっとも驚かない。今更だ。聞けば来旋は、あれからもずっとこの生徒をやっていたらしい。当然といえば当然で、元よりこの学園の生徒である来旋があ的事件を理由に姿を消す理由は……まあ、ないだろう。

「何の用だ、来旋。今更俺に会う理由なんてないだろ」

「むう、冷たいな。いいでしょ、久しぶりにお兄ちゃんに会いたくなっただからっ」

「やめろ。俺はおまえの兄貴じゃない」

「あはは。気分気分。こういうの好きでしょ」

「……誰が」

「お兄ちゃんの携帯、『い』で変換したら最初に『妹、大好きっ！』って出てくるでしょ」

「アホか」

「ベッドの下に妹白書って本が！」

「何なんだよおまえ！ 本当に俺の妹かよ！？」

「……ていうか、全部フィクションだからさ。いや、本当なんだから……」

来旋はいつかみたいにケラケラ笑って、しかも腹まで抱えていやる。双色の目は惜し気もなく涙を溜めて、喜色満面の大笑。狂喜して乱舞までやらかしそうな勢いで跳ね転がっている。

何だよ、用がないなら帰れよ。

「あつ、ヒッドーイ。わたし、これでも気になってると思ったから報告に来たんだよ、その後の経過！」

三角に眉を尖らせた、童顔が怒る。

「むむむ、それなのにその態度。来旋は酷く落胆しましたやる気をなくしました。このままだとお兄ちゃん並びに他の生徒を串刺しにしかねない心境です」

「いや、待て……おまえならやりかねない」

だから怖いんだよ、こいつは。

「解った悪かった、謝るから許してくれ。んで、ありがとな、来旋」

来旋は片目をこちらに覗かせる横顔で、

「帰りにアイスを奢りなさい」

「……了解」

「やった。じゃあ赦して上げる」

こいつさ、協会って組織のナンバースリーなんだろ。

調子を狂わされながらも、咳払いを一つして呼吸を落ち着ける。

ここまでのことがなくても、来旋とは実際に一度会って話をしておきたいと思っていたのも事実だ。あの、絵空事みたいな日々から一週間。今のこの日常は本物なのか……失われたものは、変わってしまっただけでどれくらいあるのか。いいや、そんなことよりも何より、もっと――

「協会の手回しで、今度の件は処理しました。報告はわたしからしたので、心配ありません。とある魔術師が、『法典』を錬成する実験にこの地を選び、結界は世界の縮図を造り出すために用意された。魔術師は実験に失敗し、その結果消失してしまいました――と、こんな風に報告しました」

「……」

俺は、慎重に言葉を選びながら素直な感想を述べることにした。

「それは流石に、無理矢理過ぎないか。勿論、そうしてくれたのは有難い。でも、なんつうか」

「協会は事後処理と事中介入しかしません。事前活動はなし。だから結果はなんだっていい。ここで何があったのかなんて知らないし、魔術師が実際に果て、その回路を残したのならむしろ収穫です」

焦らすように一呼吸。来旋の笑顔が綻ぶ。

「だから弓坂絵空も追われる身ではありません。本人は知らないだろうけど。安心した？」

……こいつは、本当に。なんていうか、見事にこっちの聞きたい答えを提出してくれる。逆に言えばそれは、俺の考えが読まれていたみたいで多少嫌だという部分もなくはないのだが。この際なんでも気にしない。

「生徒はみんな結界に当てられて記憶はないし——あの彼女には、わたしがぼっち暗示を掛けたから大丈夫。ていうか、記憶を削り取ったしね。そこに、彼女の色だけを残して」

「おまえ……そんなことまで出来るのか。結局、何者なんだよ」

「わたしはわたし、棺継来旋。棺継家の成れの果てで願いの破綻者。それだけよ。今は協会の第三位なんてやってるけどね」

くすり、と艶やかに少し年相応でない含み笑いをして、来旋が話の結びを付ける。

「まあつまり全部元通り。世界は無関心に回ってるし、いつもいつでも世界の色は普遍だよ。それがいい、その方がいいね。静かなのが一番だよ」

くるりくるり、傘を回すように回って、来旋が屋上唯一の出入り口に向かう。義務的に話すことは全て話したと、自分の役目は終わりだと、そう告げるように。青空の下で、白い少女は舞うように足を踏む。

その小さな姿を不意に呼び止めて、

「ありがとな。一週間前、被害者がいなかったのは、おまえが結界を止めてくれたからだろ」

最後の夜。

街中の回路が起動していながら住民に負傷者はゼロ。誰も暴走はしなかったし、何の被害も出ることはなかった。それはつまり誰かが結界を封じてくれたからで、俺の知る限りそんなことが出来るのは一人だけだった。

「ねえ」

来旋は答えない。答えないし振り返らない。そのまま、

「世界はどうしてこんなにも綺麗なのかな? ——答えは見付かった?」

屋上の鉄扉に触れながら、彼女らしいほんの気紛れみたいに訊いてくる。その答えに期待はしているだろうか。俺は、胸を張ってただ一言、去っていく白い少女に答えた。

「見付けたさ、ちゃんと。答えはここにあったんだ」

階段の一段目に足を掛けていた矮躯が軽く振り返って――言葉はなく、満開の笑みだけを鮮烈に残して、双色の瞳を持つその少女――棺継来旋は去っていったのだった。

そうして残る、平穩。僅かに漂う、異常の残滓。

こうして消えていく、これまでの日々。

だけどそれは決して夢でも幻でもなく、この先もずっとこの場所に残り続ける事実。世界を渡る風が、いかなモノを風化させていくとも、色褪せても形が欠けてもなくなることはない、いつかの記憶。多くの物を傷付け、壊していったそれは、けれど大切な日々の名残。

忘れることなんてない。

だってそれが約束だから。

いつか、自分を許せる日が来たなら、また帰って来ると口にした少女との約束。

その生涯を、赤い夢の記憶をなくさないように――この場所で、空を見上げて待ち続ける。彼女が帰ってきたとき、この想いが、心が、己の色が本物だと胸を張れるように。信じていよう。またいつか会える日がきつと来ると。

夢が醒めてしまっても。

そこにあつた誰かは、いなくなりはしないのだから――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7796/>

魔法使いの赤い夢

2010年10月8日12時25分発行